里見八犬傳

第壹輯

巻之一

特別
A13
4304
1

八犬士傳序

初里見氏之興於安房也德誣以率衆英略以摧堅平呑二總傳之于十世威服八州良爲百將冠當是時有勇臣八人各以犬爲姓因稱之八犬士雖其賢不如虞舜八元忠魂義膽冝與楠家八臣同年談也惜哉載筆者希於當時唯坊閑軍記及槇氏字考僅足識其姓名至今無由見其顛

八犬傳卷之一
山青堂藏
響庭文庫
八13 4304 1
<241-303>

末予嘗憾之敢欲攻幾珪自是常畋獵舊
記不已然猶無有考據一日低迷思寢曙
聽之際有客自南總來語次及八犬士事
實其說與軍記所傳者不同敲之則曰曾
出于里老口碑敢請主人識之予曰諾吾
將廣異聞客喜而退予送之于柴門下有
臥狗在門傍予忙乎踏其尾苦虐倏發于
足下愕然覺來則南柯一夢也回頭覽四
下茅茨無客柴門無狗吠言熟思客談雖
夢寐不可捨且錄之既而忘失過半莫奈
何竊取唐山故事撮合以綴之如源禮
部辨龍根于王丹藍龍經如靈鴿傳書於
瀧城擬張九齡飛奴如伏姬嫁八房倣高
辛氏以其女妻槃瓠其他不遑毛舉數月
而草五卷僅述其濫觴未創八士列傳雖
然書肆豪奪登諸梨棗剞劂成又乞其書名

予漫然不敢辭即以八犬士傳命之
文化十一年甲戌秋九月十九日洗筆於
著作堂下ノ紫鴛池
蓑笠陳人解撰

世ゆゑ里見の八犬士八犬山道節（乳名犬塚信乃）犬川荘助（乳名犬江親兵衛）犬村大角（乳名犬田汶吾）犬坂上毛野（乳名犬飼見八）犬吉（乳名犬山道松）犬江親兵衛（乳名真平）犬村大角（乳名角太郎）犬田汶吾（乳名小文吾）則見えたり。その名軍記に粗そそく。本貫終始残審ゆゑ。いと惜むべきものゆゑ。よりそく唐山高辛氏の白皇女槃瓠（犬の名なり）に嫁しける故事を做ふく。個小説を作設因を推果をもて説こ婦幼のねふりを覚さめしむるの一助ともなれかし。

肇輯五巻ハ里見氏の安房ニ起るより。第十回表実の軍記と大同小異あり。且狂言綺語をもて。戎ハ俗語俚諺をまじへ。いと鳴呼しげく綴るハ固よりと覧ん人の倦ざらんことを。全傳の巻端に。おのく列伝あり。茲ん春毎ニ嗣出ださん。全本となるさんニ両三年の祖ゆゑ。

蓑笠陳人再識

有像南總里見八犬傳筆輯總目録

第一回

季基遺レ訓兆節

第二回

飛二一箭一俠者悞二白馬一

第三回

景連信時暗阻二義實一

第四回

小港義實集レ義

第五回

良將退レ策衆兵知レ仁

白龍挾レ雲歸レ南

奪二兩郡一賊臣倚二朱門一

氏元負行厄從二舘山一

芭内孝吉逐レ讐

靈鴿傳レ書逆賊贈レ頭

第六回

開二倉廩一義實賑二二郡一

奉二君命一孝吉誅二三賊一

第七回

景連奸計賣二信時一

孝吉節義辭二義實一

第八回

行者石窟翁相伏姫一

瀧田近郵狸養二雛狗一

第九回

破二盟誓一景連圍二兩城一

信戲言八房獻二首級一

第十回

犯レ禁孝徳喪二婦人一

裂レ腹伏姫走二八犬子一

肇輯題目通計一十回

完

浪中得上龍門ニ去
不ンバ數江ー河歲ー月ノ深サ

雄子尓壽
忍光八
難波江乃
芽江波
始垂毋
辛之河尓
加久尓
世波
著作堂

里見治部大輔義實

金碗八郎孝吉

周公恐懼流言日
王莽謙恭下士時
若使當年身便死
至今真偽有誰知
白居易續史詩

山下柵左衛門尉定包

神餘長挾刃光弘が妻妾玉枠

何ぞ我おりしもうき名立ちぬれば
えこそ生きめと思ふやうき死なまし
源内藏人貞行

秋倉木曽次郎氏元

朴平

五郎三

麻呂小五郎信時

安西一郎大夫景連

正夢と
なりぬ
起行

鹿や
照射山
とり宮

東図舎
羅文

金鞠大輔孝徳
きんまりだいふたかのり

深宮飽食
恣狰獰
臥レ榻眠レ遭
慣テ不レ驚
却テ被レ捲レ簾
人放出
宜男花一下
吠ユ新晴
元貢性之詩

伏姫
ふせひめ

里見義實の
愛犬八房
さとみよしさね
あいけんやつふさ

八犬子髪あげ

大塚倩吟

平居勿特汰
青年越此書
年好勉雄

犬村角太郎

犬江真平

犬坂毛野

犬塚信乃

犬飼玄吉

犬川荘助

犬山道松

犬阪毛野

犬村角太郎

犬江真平

犬塚信乃

犬飼玄吉

犬川荘助

犬山道松

犬阪毛野

第一回

季基訓を遂てく節を死を
白龍雲を挾て南ゟ帰く

京都の将軍鎌倉の副将武威衰へて偏執一世ゟ戦闘とゟり一比難を
東海の濱ゟ避てく土地を闢て基業を奠一子孫十世ゟ及ぶまでく号総の
四主てる里見治部大夫義実朝臣の事蹟をつらく考るゟ清和の皇別源
氏の嫡流結守府将軍八幡太郎義家朝臣十一世里見治部の権源季基ね一
の嫡男ゟ時ゟ鎌倉の持氏卿自立の志頻ゟ執権憲実の諫ゟ用ゐ忽地嫡
庶の義をとなへて室町将軍義教公ゟ確執ゟ及びて京軍猛一ゟ色革そ
憲実ゟ力を戮一且戦ひ且進てく持氏父子を鎌倉ゟ攻一報国寺ゟ押篭つく詰

○巻端 頁の錄帝ある紙ゟて営生営業の肩を舉一てく巻一てく四方の君子ゟ告なること左の如一

曲亭

家傳神女湯　一包百銅

こゝこの俚者ゟ家傳の良方婦人諸病の神薬
ゟ一てく日記てく産前産後ゟの子ゟ用ゐ即功あり
つゝ紙ゟ求めるゟ君子ゟ少ゟからぬ
家ようゟて難産夫拆の婦人ゟ一用ゐゟ一ゟ
つ蛇虫の妙薬　一包六面銅半包三十二銅　婦人毎月つ初ゟ一ゟ用ゐゟ一ゟ
方いてゟらゟ永用ひて玄妙ゟ又産後ゟ血ゟ下ゟ功あり
精製奇應丸　大包二百粒　余ハ代銭米　中包三十六粒代銭弄　小包十二
世ゟきゟ九宝とゟいてゟ製ゟ方ゟ開ゟ
青ゟゟもきゟ丸ゟ功ゟ
法ゟてゟび製法むつ
諸病針灸ほど
可ゟの人ゟ
右製薬弘所并施療　江戸芝神明前　書肆いつゟゟ市兵衛
取次所　大坂心斎橋筋唐物町南へ入　書林浪花
○招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり此印ゟきゟ偽劑ゟ係ゟ

目

腹を切せろ。是ハこれ浪花軍天皇の永享十一年二月十日のことゝかくて持氏の嫡男義成ハ父とも〻自害をく尻を鎌倉ゝ留むと父との二男春王三男安王とまう㊟公連ハ辛くゝ敵軍の囲を脱れて下総へ落のびを結城氏朝迎とりて主君と仰ぎあり京都の武命ゝ後ろ管領清方持朝の大軍をも厝とせざされど義ゝ仗て死をぐる辞せざる里見季基を首とうく凡持氏恩顧の武士招ぎれども皆集りて結城の城を守りうべ大軍ゝ囲をろがら一トさび包みを取らぎ。永享十一年の春の比より嘉吉元年の四月まで籠城三年ゝなりぬ。外ゝ援の兵ろまべ糧も矢種も竭果つ今ぞや脱を途るゝ只ひろとるゝ死よやとて結城の一族里見の主従城戸推ひらき血戦ゝ込入る敵どもを靡けく衆皆討死まる程ゝその城意ゝ随りく両公連ハ生捕られ美濃の垂井まで害せまる。俗ゝ之を結城合戦とぞいへり季基の嫡男里見治部大夫義実ぬ。このとき九ハ又太郎伴普司と呼れつ。年ゐ不九ゝ満されど武勇智略ハ父祖ゝもまりく。その才文道ゝも長ろう。三年ゝ未父と共ゝ籠城の艱苦を厭ぎ。この日も諸軍ゝ先まちく敵十四五騎斬て落ーゐ敵と引組く討死せんとく進ろ父の季基遥ゝこれ義實勇士の元を喪ふことを悼ろあまりに似さまとる父子ゐろ共ゝ討死せバ先祖、不孝こまとふべきと京鎌倉を敵とて受く貳ごろを存ぎるとろく勢蜘きゝ力窮り落城のけゝこまりて父ゝ節義の為ゝ死ー子ハ又親の為ゝ脱れく一命をたゐつとも何ろ羞るゐあらん速こゝ殺脱く時節を俟て家狄奥せとく落ようとのそゝ甘ろ義実ハ父あへぎ敢坪ゝ頭を低うけゐつひぬ。もろハ主君ゝ親の必死を外ゝこて阿容ことゝ脱るころ三才ゐ小児も要せず。呪弓箭の家ゝ生ぶこく某ろく十九歳丈武の

道ことけ入りて吹逆邪正古人の得失大聚ハこれを志ろり只冥土黄泉のもん
供とてそやひなれ死べき処ゟ迯死ざらんとて笑ひを招ク名残活ゝ先祖を辱ゝ
ゟらんとて兵ゝ〳〵ひと答る辞勇ゝ〳〵実微妙ヤうさうろぐ圓頂に衣ゟ容貌更出家沙門ゟ
悖りもせぬ時節を俟て家を興せとの父を推辞ハ不孝ゝゟぢや足利持氏ゟ
譜代相倚の主君ゟあらぢ抑ゟ祖ハ一族ゝ新田義貞朝臣ゟ後ひて兄弘
建武ゟ戦功あり。ゟろしよう新田の餘類南朝の忠臣ゝゟど。明徳三年の
冬のそゞろゟ南帝ハ洛ゟしくゝ憑む樹下雨漏りよろ。ゟろゟろぐる鎌倉
ゟる足利家の招ゟ隨ひゟひ亡父ハ理見大炊満兼主持氏の処ゟ出仕ゝこれハ
持氏ゟようくゝ今幼君のゟる死も志ハ致ゝろ。ゟとゟの理ゟを辨へだも
只死ゟる武のゝ武士とりんや。学ゟ向ゟ又そのおひるゝ。かくまでのゟを用ひざる親とも

やひそ子ゟあらぢと辞せろゝ〳〵敦圉ゟ父ハ義実道理ハ責られくゟハど馬ゟ
髪ハ落ゟ涙ハ道芝ゟ結ぶぐゟ死本のもゟ
海ゟりあゝろ鯨波の声ゟろゝ人進む敵軍を季基信と兄ゟりくゝ時移りてハ
ゟろゟりゝとやふとさゝ豫てゟりまろゟさ
肉薄人負ゟゟ注因をゟそけるゟ両人齊一ゟを起ゝ俺ども共つゝろゟん。
誘ゟゝとひゝど木曽ゟ義実ゟ馬ゟ馬の轡を雫ゟぐし義人ハその馬の尻を
拍ゝ逐走ゟせ西を投てぞ落ゝゆくゟ
を返ゝるゟゟろゟゟ忠魂義膽ゟゟ
結ゝとゝく引居ゟり季基ハ落てゆくゟ
さゟゟ宣期をいそぐんとゝく鞘ゟ縛ゟ馬
ゟゟ群り来つぐ大軍へ会釋もゟゝ突ゝ入る勇将の下ゟ弱卒ゟゟ

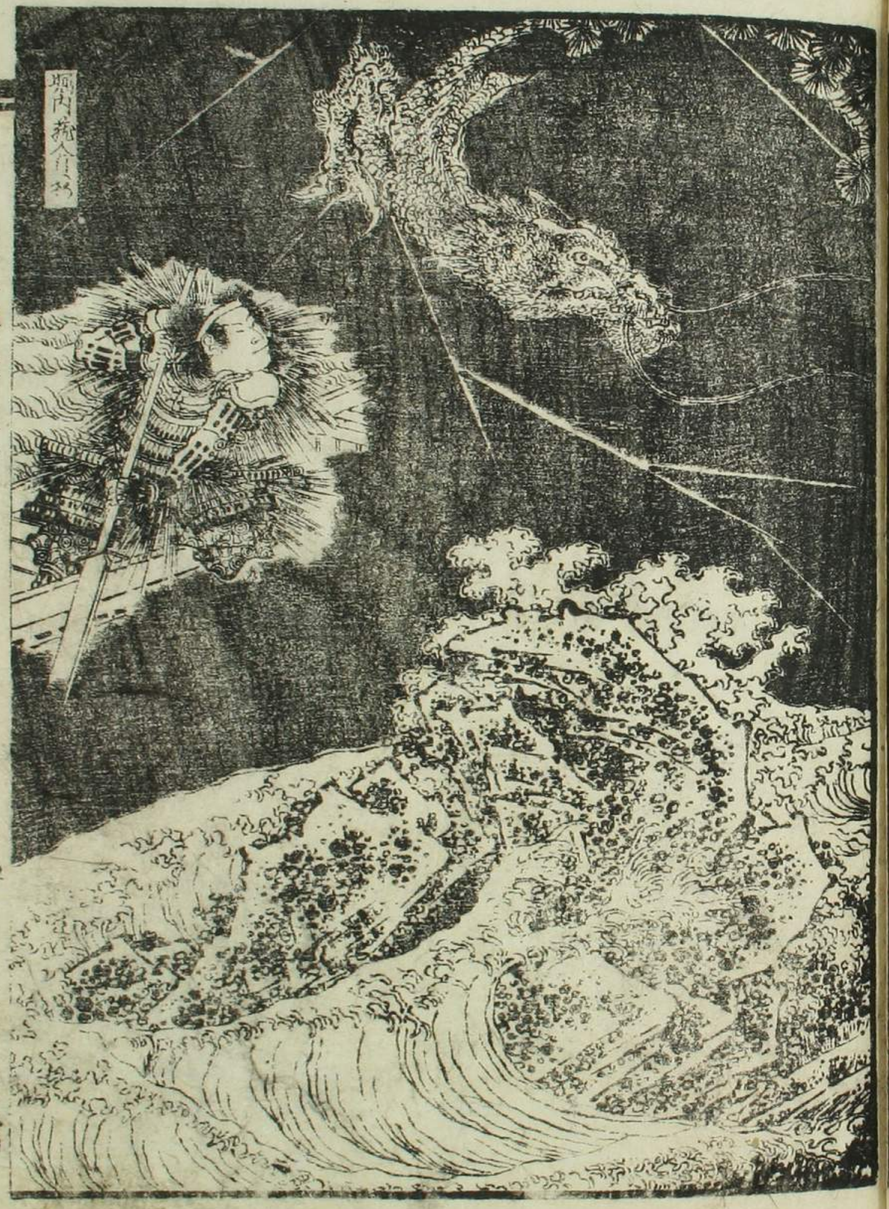
隷由二弱二強。離弦矢をさゝるものゝごく稀なり所ゝ武實を後ろへ落さんとあせ
外又他事あれば固ゟあまる大軍を一足も進せぬ射方の死骸を踰踰て引組ぶ
刺ちがへもつれ枕を臥不どは大抵李基ゟ多く。鮮血ゟ野巡の草を染ーく。
衆乱軍の中ゟ駭ゟまどく。
馬蹄の塵ゟ埋とのくともその名ゟ朽ざ華洛おぞく立のぼりる丈夫の最もたげ
ーに宿期ぺさる程ゟ里見冠者義實ゟ杉倉堀内ゟ孝れて。十町あまり
落延ゟさるふくも嚴君ゟいくそたび馬の
足掻を駐めつゝえゝる力ゟ岡の声。矢叫の音嵩ーくて落城とおぼえて猛火
の光天を焦せば。吐嗟とぞろ叫びあへぞ。
えゝしろ両個の老堂左右ろ。纏ゟ携ゟて動せばこゟ物体ゟ今更ゟめゆや
犯ひめろん大殿の教訓ぞ何とろ聞召さるぞ今落さるく城ゟ棄て可惜あん命を
悪ゟぐ古歌ゟ引ろ其虫の火むーろる。果敢るの。夫大信ゟ信ゟず。
大孝ゟ孝ゟずめーと古人の金言日未ろ。口順ゟゟゟゟ仮げるー。元貴ゟ死の緩化ゟ。
忠孝の道ゟ一條ろるゟ迷ひゟゟゟゟそやろゟ。
犯ゟ孝子の哀傷頽ろ小焦燥声ゟさげーく放せ負ゟ琴ろる氏元ゟ孫連ゟ練云ゟ。
親の危ところぺそれど今これをも免びろぺ孔人の子とゟれんや。放せーく。
揚て打どあふれど玉匣ゟろ等ーる忠臣の裳ゟ金石此ゟ縷ゟも難ーく隨ゟ雫ー
ぴく。馬壇鞍勢柳坂げろゟ後ゟ遠離ゟ史退林のほとりゆく勝渉ーる孫倉勢
二十騎あまり追蒐ゟ来ーく遠武者態逸足ぞやー。緋威の澄ぞそ五枚甲ゟ鍪
形の間ゟ耀く白銀ろく。中黒の紋挫ぐる弐大将とぞろゟ僻目欲逢ーる返せと呼
ろけろう。義実ゟ此ゟ擬議せどゟあるがまゟや雑兵ぞろう。敵をもそ立て走ゟかゟろ
ゟ拠ゟ返ゟ難をとゟろんやとそ馬をきすと立ろの武大刀振翳ぐく進こゟゟ。

大將を殺せ。とて。杉倉君堀内推並び。歌の矢面に立塞ぐ。鐙を捨て突山刀を。
抜宮八亦老當を殺せ。とて馬を馳下せ前後を争ふ主後三騎大勢の真
中へ十文字に蒐通て。殪て巴字なりその
うち透り。西に當り東に靡け北を殺して南に走せ馬の足を立さだめず三
略の備八陣の法共よ知る道ありとこれ忽然にて
後よ有り。倉皇突戦微茫を竭せ千変萬化の大刀風よさそれ大勢乱
騒ざわくむらくもと引退く。敵退けり杉倉ホ主を練よく徐と殿る武勇
跟て来る端武者八遠箭よ射て殪し。追ひちらし林原三里が程送られて
終ぬ。落る夕日の迹ホ十六日の月圓るより。追来る敵ありそれ主後
不思議よ虎口を脱れて。その夜八白屋よ宿りを投ち旦立の置土産よ馬
物具の紙おしとりそせて次女を賚一生忘ふ東西まべて敵地のまとも。聊

志もてこの女よあいねが相模路へまくの第三日めよ三浦なる矢取の入江
にその固より果む糧もなく。艘纜をとく餓疲もてく松が根よ尻をうち遥よ漕出
洲へ渡さんとて輸の勅の息吻あへぎ。海原波ちぢめて白鷗眠る比八卯月の夏霞挽遣しくる船山被とだろり
指せもあるも鑿のごく穿るのーかしく削るがごと。青壁峙そそりたるも危き。
長汀曲浦の旅の路。少年碎くるひろひろ。遠寺の鐘いとど哀れを催ほめらかく。
いそげども。船一艘もあらざりけり。當下杉倉木曽妙氏元八谷屋の門よ乾魚
とう納る白水郎がもとをさ招た。噌髭ホよめ問ん前面へこころと
舟八こぎ寄ぬ浦曲よ流浪ひとくいとでしく餓さるふられいとるあまこの君へ

物あくがれ進くゝ私と纏ひあくいぶせき中ゟ羊十四五ゟる悪太郎赤熊ゟ仰くゝる
額髪潮風ゟ吹黒れゝ瀬ゟ垂くを櫂も揚ず揉ゟるぞ兒青海波ゟり
顫ゝまゝ出癡ゟる兒ゟの人ゟゐ手つゞく合戦ゟ私ゟ過半借とゟまて漁猟
ぶも物足ゟぬ誰ゟ前面ゟ人をゟゝきんされバ又とゟ浦ゟ汲む淫ゟゐゟ兒
よ。
世ゟぶ腹ひとゟ肥ゝかぬゟ馴もゑ老ゝ媼ゟきゝ
まぐ脾撲くゝこれを食べとあざゝ縛て塊を摧取つ投ゟけんとゟる祖ゟ氏ゑ
そゟゝゟとゟけバ塊ゟ郷とゟ飛越さ。松ゟ根ゟ尻をゟけゐる義実の胸前へ刀兒
茅れバ自若とゟさ左のくゟ刀をゟ及ぼ右もゆぞこれを受ゐふ狽ゟ憎むぞ為体ゟ
氏ゑゟ要時もゐ媼ぎ眼玄睜ゟ声をゟゟ立とゟ鳴平ゐる癖者ゟゐ殺ゐんバをゟ
彼ゟゟ一碗の飯玄もさゝれ糧ゐくゟゐのゝとゟゐふとも辞ゟ物ゟ渡ぶ兒ゟゐゐる
呼約も限りあり。いぞその隙欲刻後さくゟ兒ひゟらせんと敵圍ゟ刀の鞘ゟ紙掛て

走り解んとゟさりしゟ義実ゟ悪ゟ召禁め木曽次大人ゟゐ（ゟ）醐驗ゐ老てゟ駕馬
ゟゟり鳥鳳ゐ窮ぎゟ兒び蟻蝦のゐゟ苦めゐゐ昨ゟきのふ今ゟけふゟゞの兒
ゟを兒れゝ欵彼ゟゟ敵ゐゟ足ゟぬゐのゑゝくゐ紙葉とゐゟ土ゟゝ三岡の
墓ゝ已ゟ今安房へ渡ゐゟ及びそゝ天その関欵ゐゟの兆欵被ゟ玄乳ゝとゟゐ
とゟゟ憎ゐゟ嬉ゟこれを吉祥とゟぎゐとゟゟ欵ゟゞゟゞや晋乃丈
公ゞ五鹿（増岡の地名）の故事ゟよく今日のとゐ祝ゝゟ塊ゟ三度
戴ゟそゞやく懐ゟ被ゐゟ公氏ゑゐゐ暁て刀の鞘ゟ掛ゝゐと兵ゟ欵解ゟそのゆく
とゐゟ憑ゝ兒主君を吉時ゟさゐれゟ白水郎ゟ子どゐゟゟ常ゐ紙拍ゝゐよゝゐゞを
笑ひゟ時ゟ砥山雲業最ゟゝ海面俄頃ゟ晦ゟゟ磁石ゟ塵の吸ゐゞゝ
潮水頽りゟ逆上ゟ風颯ゟとゟ狂ゝそゐれ兩ゟ彼鞘岡の縁ゟゐ盤ゝ降ゟゞ
電光ゟゐゞゝゟ雷さゝゐどろゝゝく鳴撲けゟ猥僮とゐゟ劇驗ゟゝく。



笘屋と走入り裡より猶ほ敲けどもかしてぞ義実主従八位立ちかどり
せんようのるを且ち入口の松の下蔭より笠と蓑とを脱ぎ捨て風雨をとゝ
烈くと戒め晦く戒め明くようせそれ碎け破れ又立ち浪猛く色そ廻翔る雲の
中より物そあれとつゝの間観く忽然と一道白龍顕れ光を放ち浪猛き起立
南を投てそ飛去る且ゝく雨霽雲もさそうろ日ハ没るのぐらゝ釈かれる海の際
よそく波紋いろとろ精を放ち松の雫吹拂ふ風よ散るまへ沙石の中は輾没る
山ハ遠ゝく聳ふく巌ハ青きそくいまぐ乾ぐ瞻ゐ糸倦ね絶景佳境と
み月の愛とゝハよろこ止ゝと氏れハ義実の衣の濕吹乱を排ひのどして後れ
さぎ出る良初戒今ゝくと俟ほ義実海面を指ゝく向ふ両ハと烈ゝくて立驟ゐ
たち浪の間よ巨最雫云ぬうよ廻翔り彼山岩のほろろう白龍の升りしを木曽
ゆくんさり欤と問れそく直と足戒跪拝とハ認めりそとお本ゐ物の服うと

おぼく輝かぎゝと鱗のよ戒を僅ゐ子くハ義実うち点ぜされバケを
そのまゝれゝその尾と足のゝ戒ゝ
夫龍ハ神物ゝ変化固より彊るし百人いるとあり龍ハ立夏の節戒候そ
分畏ゝく両戒行ゝ戒名乞ゝく分龍とハ今ハ則その時ゝ夫龍の灵さるや
眠ゝとて迩く顕れ隠ゝとろく深く潜む龍ハ誠よ鱗虫の長ゝかる方ハ周公
易を繋ぐとゐ龍を聖人よ比ろ
欲ハ及ぎゝ戒ゝ人戒ハとれを蓑或ハ御あるひハ屠る今ハその掛るめ
るの又佛説よ龍王経あり大凡両を積るめ心よろぐゝ且戒編又法華経乃
提婆品ハ八歳の龍女成佛の説あり
めあり此の赤よ龍を名つけそ両工とハふ赤ゝ且戒両師とハふその形状を
雑をとゝ乞ハ角ハ鹿よ似そ頭ハ駝よ似ろ眼ハ鬼ハ似そ項ハ蛇よ似ろ

腹ハ蜃ノ如シ。鱗ハ魚ノ如シ。その耳ハ牛ノ如シ。その爪ハ鷹ノ似ク掌ハ虎ノ似ク。その耳ハ牛ノ如シ。その角ハ鹿ノ如シ。その項ハ蛇ノ如シ。その腹ハ蜃ノ如シ。その鱗ハ魚ノ如シ。その頷ニ径尺ノ珠ハ有リ。司聴ト名ク。角ヲ以テ喉ノ下ニ長径尺ノ逆鱗ト名ヅケタリ。物アラバ必ズ之ヲ触ル。故ニ天子ノ怒リノ象ト云ヒ伝フ。雄雌ノ鳴ト云ヒ雄ハ上ニ風ヲ起シ雌ハ雲ヲ興ス。その声竹筒ヲ吹ク如シ。その吟ズルト云ヒ。その声ハ金鉢ヲ扣ク如シ。彼ハ敢テ行ルヿ又暮ニ処ヲ変ゼズ。今ヲ以テ古ヲ知ル。故ニ聖人ハ之ヲ龍ニ比ス。散ヲ以テ云ヒ。昇天ノ時ハ雲気ヲ乗ジ。陰陽ヲ兼ネ。秋分ノ後ハ淵ニ入リ。夏至ヲ迎レバ雲ニ昇ル

又九つの子を生む說あり。第一子を蒲牢といふ鳴ことを好むものゆゑ撞の龍形へ
とゞ象るの第二子を囚牛といふ音を好むものゆゑ琴鼓の飾とこれを付第三
と云ふ象るの第二子を囚牛といふ音を好むものゆゑ琴鼓の飾とこれを付第三
子を蜚物といふ呑ことを好むものゆゑ盃盞飲器ふちに画く第四子を嘲風と
いふ險を好むものゆゑ堂塔樓閣の角これを象る第五子を睚眦といふ殺ことを好
むものゆゑ大刀の飾とこれを付第六子を負屭といふ文を好むことわん。
いふ人の龍象印材の鈕文章屋の下に画く。龍の如きその是ゆゑ第七子を
狻猊といふ訟を好むものゆゑ第八子を狴犴といふ獄を司るの形へ乃獅子に
て坐ことあり。第九子を覇下といふ重きを負ことを好むものゆゑ第九子を覇下といふ重きを
て云ふ好むものとぞ倚子曲彔に象ること
あり。
貝を好めゝ料の足火爐の下凡物の焼。まるの鬼面のごとき是なり。
これらの外よの子あり。寵章の囚を好ゝ饕餮ハ水気好ゝ蟋蟀ハ膩を好ゝ。
なんぞ
蟻蛇ハ風雨を好ゝ蟠虎ハ文采を好ゝ椒圖ハ口を閉る紙

好ゝ蚣蝮ハ險を立を好ゝ螭魅魍魎ハ金石ハ睡ざるものとぞ皆これ龍
の種類なり。大ろうろう龍の徳易よとろくハ乾道ゝ物ゝそろくハ神聖ろう。
その種類の多の外ゝ天子ゝ上智と下愚とあり。天子ゝ
威徳をもつて百獣を伏るゆゑ天子も亦威徳をもつて百官を率ゆゑ故ま
天子ゝ衰龍の御衣あり。天子の御顔を龍顔と稱ゝ龍體を龍體と
唱ゑ是ゝ尊きゆゑ。その徳枚挙べからず今や
白龍南ゝ去白ゝ源氏の服色ゝ南ハ則房総ゝゝハ皇國の素盞嗚尊
その尾をゝゝ踏ゝ彼地を領ゝ
こゝ服部の臣ゝべしゝさいふいかゞや。と正首ゝ和漢の書を引古実を述ゝ
ゆくまをゝのゝゝゝ思量り後才數知ゝ氏元ゝく感佩ゝ武分の家ゝ生
まゝも匹夫の勇ゝ誇ゝゝく。兵書兵法ゝ通ゝまゝ今の時ゝ

稀ふるふるほどもろこし有年ふる人もえ書をいつのやふ流つしのひ
らんさもろびてをのづから物ふ博くふ天の徴る君ふ寔ふ良将ろり今ぞそ
ふろせ結城ゆくふ死ざりける氏元がそぢめの憾とうらうふなる命めで
さくけふあふ救びこそとてふまもめろふ
果さひとも要ろの死入ぶ明さんやふ安房へおん供つまつくらんとぶ人どもも
船ろるー天ふ晴ても甲斐闇ふ月給ろぶる途の役ろきこころろぶる水焦燥
のこせんまふろふ水給えとふ名ふでや。ふ流れる堀内員外が今ぞぐも。
まのたぶうきふ甚不審富貴ふ他人も合ひやぶーふ時ふ妻子も離ふ人の
ふをつぶるこ甚不審富貴ふ他人も合ひやぶーふ時ふ妻子も離ふ人の
城ふ経ろるまふ渠まそふ途ふろ逃ふりけんおぶつふるくいとひんく肩根うち
ふまれぶ。ようまもこ実業ふとうち笑ふくさふる疑ひそ才智ふ老宮ふ主君宮ふの
ふ中ゆー彼と没ふ人ろのまれーふぬ悲ふ大人撰せふひて五日ふ

ふ属させふろぶやふれも赤員外ぶ人とろりふよく知ふん難ふ臨ふく
主を棄逃かふこのふあらぶ今憂時ふゆふく候ん月も生ふ死比ろるまと
物ふ障らねまの業ふ。ふの底もいと廣きふ。ふ流ろ生ろ十八日の月ありーろこ
浦波や。金銭集め玉を敷龍宮城もかくやふまも本法をふまれふ。彼村漁人ふのふ浩処ふ快船一艘水嵯のうこ
ふろ漕出ふろ。ふろふまやとろる狂ふ。
ふ私の中ふろ声ふく。ふ歯ふ五ぶの。ふ
てーふまと口実ふ一首の古歌ふ仲正ふ。ふ集ふを。水主ふ何ともなふそぶやふふ
漕ふ名ーぶ件の人ふ猶ふ。砂の中ふ投ふみふ
きぶ堀内員外ふこやくいふ。とふまふこの主後綽向良ふ先ふ立ふく舊乃
ふ拇下ふ坐ふを与ふふ員外ふ松の下ふる紙撰ふ仕ふく小勝紙著向ふ相模

…ふく入くるう。渡海不便ふぜう…成戻よ…くいへば。提淀ろう出入土て…首
…彼首ろ…屋ふく。津波来ど…ふ船を出さば。ゆるくく水崎ゴ赴ど漁
…舟を俟ろくとど。餓さ…ふかろのやとく飯を炊せゆ程よ雷雨烈ーく
…ろう」ぶ。ちど彼処よ日を消ーかくの如く遷ろ。そぐめろこれらのよ…。
…をきよいひぺぶーくおぼーく石けん。といふを義実ゆふおぼされぶそのろざる
…ころ。
この狡これはさろろのり木曽ゆもふく…ふ船のあろろん一切ゆひろけざろ…。
…ん。
り…前人ろろせぶ今宵いそう安房へてさん宴ふよろ…ど方学ろれ。と
…ひごもろえ…ろ…ど…ろ…ぐ…ど…ろ…ぐ…ど…ろ…ぐ

やまとこれ。あいけいろうき。ふるあり。日本書紀景行紀に所云淡の水門は是。安房へ僅水四郡ありて平郡もあんだせうあれどつけよ。ふるさ。あり。といひ長狹といひ安房といひ朝夷といひ仁安治兼の間平家世ざろうみろ。ろろり一此ろ。あるに三人の武士ありろ。東漸よその名ろえろる御厨の麻呂ごろうふるとろ。あんさいさぶらうろびり。ろろぶまちうあねのり五郎信俊安西三郎景盛東條七郎秋則これるり。治兼三年秋八月ふるひのろうとあろういーそやきいろさぶ源頼朝卿石橋山の軍敗ろえく。安房へ起ねひーとろ件の武士ホ第一ばんつえをぶ番ホ隨従ひろく。安西三郎景盛ハ郷導をつっまろり。麻呂信俊東條秋のろらつろえん則ホハ硯奴を離りろく。至二の志をあらんせーろぶ源氏一統の後被人ころハ安ハーぐん房四郡をころちろろりろく子孫十餘世相続ー世ハ北條ようろりかろうへありぐり足利家の時まぐもその本領を失ろぶ。景盛が十二世の孫安西三郎太夫景連ハ安房郡舘山の城よあり。信俊が後裔ろる。麻呂小五郎兵衛信時ハ朝夷郡平舘の城よあり。又長狹郡。東條が氏族ろる。神餘長狹や

弘ハ。秋則が後とろえ。平郡の瀧田よ在城せり。ぶるも舊家といひるぶら。神餘ハ東條が所領を合一く。安房半國の主るるえ長狹平郡の西郡を管領ーく。家臣後数少ろうぶ人馬物具いぶさろえ物をとろろーく不足ろれが。安西麻呂を下風よ立ーろ。推て西主と称ーろ。かし祖よ光弘ところ驕りて色を好ろ。酒よ酖りて飽ろく側室腰妾多ろる中よ。王梓との淫婦を寵愛ーて。内外の賞罰さハ梁よ問ろ沙汰せーぶ。王梓よ媚ざれぶ功あるも用られざ。梓小賭賂のハ罪あるも賞せられ。王梓よ媚ざれぶ功あるも用られざ。ようろ家則いろく乱ろえく。良臣ハ退紀まり。佞人ハ時を得るろ。ぞ中ホ山下柵左衛門定包といひあり。ろろり。是が父ハ青濱ろる草料場の預もく。ろろく碌ろえく刃をろぶが定包ハ人とろるり相親さ人親よホ月ぶ面ろ白ーこ眉秀ろ眞卑ろ

近習ゆゑをそうけ。現女謁肉妻ハ佞人の資ニ柵左衛門定包ニ陽ニ行ぶ状を慎ミ陰ニ好智を逞シ。栄利を貪る癖者ゐるゆゑ初ハ王梓ハ佞媚をとらんとするに渠が好むおもてハいよ〳〵口才主君を欺せ酒醴を侵淫楽を勧め。剰王梓と密通ニ尾陋の挙動ありけれどもこれを瞞らざるに依もるに定包を差臣の上ニおき。世藩屏の貴罰大小となく。皆任用ニうけゆゑハその権山下一人の帰ニ。主君ハあるもの人を練ら〳〵身退ル又物利ニ憑ものゆゑ媚ニ定包ニ尾翼の塵をとらしめ。嘗を掛ニ幾を御ル。利害を説ニ。舊法を更め。税斂を重シ。課役を累ニ民の寃をえ久ニを視ニその山下定包ハ神餘が家の禄山ゐるゆゑそハ出仕ゐる毎ニ白馬ニ騎シ。目を側ニ髪をつくろひ密ニ白妙の人咲馬と渾名員〳〵ニ途ニよりあふと死ハ避くるもヲロクりけり。不題離田の近村ニ蒼海巷とハ処ニ杣木朴平と唱ニ荘客あり。戦国の治俗ニ撃剣剣業を法いハざるゆゑ。膂力剛ニとろ悍く難ニ随ヒ。死をごもおそれぬをとゝ仗俠を左袒ゐれゆゑ神餘の家則ニうニ乱ニそ民のこゝろひ大ニゐる。律ハ山下柵左衛門ニ冤ニ訴ニ従ハ。ニ理ニ非ニ直ニ曲ニ見ニ沿媒ニ枉ニ法ニ非ニ和主ハ。彼と岩ニ劣ニさゞ。洲崎の玄垢三とハ友ニ潜ニ水ニ相ニ比ニ甚ニ親ニ昵ニ。白妙の人咲馬ハ権を恣ニうニ民を虐田園ニ禍ニ。蝗のむニ螟ニ賊ニ異ニゐニ。這奴ニ仍ニ加ニ。我ハ人ニ何ニ我ニ。ニ妻子を養ふべ。苛法ニ随ニ。ハ人ニ咲馬を撃殺ニ。野の人の苦を援ハいと憐べゝ。我ハ年ニ歯ニ老ニ。餓ニ凍ニ。ニ死ニ。ニ。ニ。

愉ᵗᵒ するのみ。と譚ᵗᵃᵐᵉ ᵉ ᵗᵉ ᵏᵘ 三八一機ᵏᵃᵐᵉ ᵒ 及ᵒᵗᵒ ᵗᵒ ᵏᵒ ᵗᵒ ᵃ ᵘ ᵗᵒ

を起し。これとふかく久しく城外へ出ざりし今徐建が
讒言ハ口苦うるぬ良薬とおぼゆる是ハ早旦て將倉もとべたよぶこの
日を今ゝうらく准備させよと仰ぶ定包扇を匆と
ひとども近年ゝ物いと繁くく民その課役ゝ労れう。加旃畑を打種
おろ〳〵まる比の是ハ潜びく生させめ〳〵某ゝ佐つゝかれかよろ〳〵く
討ひひろん土民ホ畔他ゝ拒ひろめく。祖父ゝくこれをあるのよぶ雑ゝ仁君と
ひざろ。これも亦民を使ふ一術よいわざやと云まゝ巧ゝうひめぞ光
弘感嘆大くさるるとぞいふ。翌日家の老ゝるれハ誰も
かくてそあるべれ。さてぶこの後ゝ住せんとく列率後者の数を着さく那
古七郎。天津兵内ろとのふ近習八九人のこふ後行の准備させ結旦光弘ハ。
草毛の馬ようち騎ゝ物を牽ゝ。潜やめぞ出ざりける。却説

山下柵左糸門定包ハ豫く縁しるの是ぶ前日城より退ると忽く落羽
青葉の村長ホを猛る召よせられ邂逅ゝ休眠をゝるこれバ翌ハや此ゝこの
処ゝ出く放ちませんとやふ入舎とのふ旨をこゝろゝよ。こいと厳よいわせふけるぶ
村長ホハ走りくくり荘客们を驅催し途の掃除ゝ当帝目の少死とぐくそぐ
罵驟けの杣木朴平ゝ垢三ホハ漸こふ便宜をゝるく翌ハ必本意を遂べ死
時来れりと竊ゝ欺び両人列率ゝ打扮つゝ笞前ゝ挟走り出その夜丑三の
比なり。落羽路の東北ゝる夏草ゝ古ゝる松を肩ゝ。
定包遅しと俟ざり。短夜の是ハ墓ゝるくく。鶏鳴暁を告る比長挟奴
光弘ハ鹿皮の行縢ゝ綾蘭笠ゝくくり。
の近臣ホハ九人ゝを左右ゝく滝田の城を出くぶ山下柵左糸門定包ハ豫ゝ
非常ホ備んとて。駄兵私率許ヨおるく。彼白馬ようち騎つ。此一後れく

うこせさう固ふう謀うこその日ハ馬奴ホさえ荷擔れっ。朝五の秣よ盡を加て
ふ餌さうけん光弘の乘る馬ゆくこ十町あまりみしく暴よ病て拍とも進
まず前足折さく撲地と孕せばぬも俯よ輾びかくるを那古七郎。天津兵内
あわてさわ　さまたげ
慌忙扶起してなん騎督をとく牽と声るやゐ嗚玄れハ後者更よ劇
まどひ　こゝろ　そうく
惑さく後陣へや此さくと告しくぶ柵尤出つ定包ハ鞍を揚さく走らく茶つ馬ようう
ひく
冏りとをうたちさく光弘よおうしんせう。潜びさ獵よ出させのへハそれとやくハ
ようね　おもち　いさゝか　うこん
准備せさうし騎督を給ものぐ後よ時や移らん某が馬よくる玄の。羊來日ニ
ふるる　ものゝ
畜押せ〻よ鞍味もいと愛さく乘せのへとそぐやうふ。轡を牽よくとれへ光弘
さうまちくき
忽地気名るのほりさく立させてる床九とたるのち。然ようバその意よ任せど汝ハ
せんとう
ゆくよ休ひさく予が騎督よ乘さく恭よ。
かけ　のりこ
掛跨汝馬の尾筒も戦ぐ旦開眼見ぐ系の卵花も東も白くる。隨よ鞭玄

以めくる活る抔ハ必死を繋ー馬よ仁のうあらん。さるにても又けふの狩場を荒馬と
よ鳴ぐ漳ようーあらえ荒羽ハ荒る鳥のゑぐ獲をみる祥ろのうぐや彼方へ行ま
鐙を鳴ろうー。馬の足掻を早むまぐ。那古天津ホハせんをぐもろ草繁ゑ暇
道初のごく先を追ーくく。荒ま鳴の遑る。荒ま岡ま来ま名れバ雪よう
あく駭れる杣木朴平。洲崎を垣三木立の際より倩とみく。白馬ま騎
よる紛ふぐうもあくぐうけ。山下柵左治門定包ぐさんとく伏る弓小笹刺て。
きりくと弯殺り。矢北近くる随ま一二を定めく弾と普渡せバ寵違うご一の
や。矢ま光弘ハ肉月を射られ。叶びもあ
と駭く天津兵内二の矢ま吃をぐさと射ろ。
ま癖者よ。とハ狙小後者ホハ劇駭ぐのま獣のヨ少を測うひて転ぬてイン
ともすぎりてぐ。那古七郎眼を瞬ろ。今眼前ホ主を

轄ーく。何う曙曙をあらん。ようや木立ハ渺くとも。数町ま足ようねらの岡の樹と伐
草戒芟竭ーくも。捜出さぐ己ぐ己ぐ欤と
障泥を切とろく。盾とろ。引被なくく走登ま六衷皆ごまホハ劇激さま雙言を
定ろホ認めねども。ま旦轄ぐとらんと進ミケり。朴平ま垣三これをえて辺づけ
てハうろハどとく。将士の後より顕ま出さんくま射ごろバ先ぐまをごま列来
十餘人瞬間ま射殺さる。ろろれども彼両人ハ天将もまうま竭ーぐろと鳳哩
と投棄て。大刀真額ま抜磬ー。岌ま懸て砍ま六ごハ。この勢ひま砕易ーく。
奴隷ハ大ぐま逃失さり。残るハ近臣七八人力を戮ーく戦へども不知安内乃山
阪るり。株ま跋さ。藤蔓ま足をとろ引ま。輾轉戒ハ抜ぎれ戒ハ又痍を員ござ
るろうけり。そぐ中ま。那古七郎ハ且く賊を疲労ーく。垣地へ雑引出さんとて。
且戦ひ且走ま六ま垣三八先ま進ま。朴平ハ後ま続く。脱さぐと追蒐まろ。

落羽岡の朴平妄垢三
ろつひろ光弘の
近習と
なる
山下定包
那古七郎

さるのひ義
朴木の朴平
天津ノ兵内

坂を下りしが七郎佶とうえくうそく忽地礙と打掛る。礫よ玄垢三額を傷られ。目眩てや倭僮ところ残那古ハ雌くみよろ走らせくる玄垢三が腮よう乳の上ゟ打く十と砍る斬られて仆る背の上ゟのぼーかんて頸掻落ーたあらんとするを朴平ハ血刀引提て。飛るの如くまぢかと砍落ー怯む処を突倒しくる。再三さび刺を刃ホ流ゟ下へ垂る血をぎんと砍落ー怯む処を突倒しくる。再三さび刺を刃ホ流ゟ下へ垂る血を喫ふ。右ゟー咽喉を洞を折。前面の樹蔭ゟ弦音ーく誰とゐ右ゟ背矢ホ朴平ゟ股を射さーく倒ふんとうく。膝を突笛矢柄を截く抜捐ふ耳を貫く声の声。研ゟ咄と郷音ーく。捕よの兵数十人ぞや生ふこと取巻ふう。當下山下柵左衛門ハ前を員弓を挟ふく。岡の檜ゟ馬を馳ゟ廻の名ゆハ数代の主民の恩ゆハ父母ゟの厳を。戕ひをり逆賊ホ山下定包と認ふ前ゟ射く落せハ人喫馬ゟあらざりけり。謀りしとハ孤るの驍の堺用と翻く。國主を害ーまれハ反逆の罪脱ふ途ゟー怨ハ積る山下定包擇ぬホ。

敵兵の大勢ゟ捕吏を闥ふ。朴平ハ定包と名告るを聞ふ。朴平ハ定包と名告るを聞ふ。

本所を除ーハ生ふうふ。捕捕ゟれとぞべるふ。彼縛めよと令まれバ威風ゟ靡く。

さべる」とく甲高ところ小引退た草ゟ伏木を潜り。是首ゟ顕ま彼首ゟ隠れふ。且く防ぎ戦ゟあふう。矢傷ゟ進退ちでめゟ仰ぎ砍れども衝ども大勢ゟ捕ゟんよろ累ふ。かくまれども定包ホ近づく玄垢ゟ是ちくぐえとやちひそん腹を切ふイとまろ処玄垢先ゟ進ふー両三人左右ふう組笛て。ゆふく索をかけーバ定包ハ時を移さバ。ふと懐ゟ拐索ゟ出ど故ふ件の二人ゟ外ゟ隠れ潜ぼりのふうけり。治納ホ城中よろ。老黨若黨数十人轎子を扛ーふ。主の迎ゟまありしバ定包縁曲を

告てゆゝ光弘の亡骸を橋子へ擔入させるゝ朴平次孝垣三が首級をかけ主の死骸の後に跟させ滝田の城よりかゝりしが兵皆呆果たるの体にて家の老どもあまた只一人も残らず結ゝ城當座の賊を搦ゝとの給ひ管領賛をさうしろが笑ようゝて定包が慢心ゝ緒司ともいろ〳〵近習ともいろ〳〵と出ゝ香華院へ送る狛ゝ罪人杣木朴平が孝垣三が首級ゝとも吉竹の串ゝさしてゝ棟の梢ゝ乗さうゝ加以日未已を幾ばくの紙ゝ皆朴平が文書ゝとゝ一人も洩さゞ搦ゝこのとゝゝ殺とうゝさそもゝ朴平孝垣三ゝハ海岸の民ゝ是とて。武勢も力量人ゝ勝ゝ神餘が家臣ゝも要せさる賊臣ゝ包を討んとせんとは。志ハ剛ゝ智ゝ勇ゝ彼が乗雄の智ゝ揚ゝ

不覚ゝ仇の悪ゝを佐けゝ戦の人を連累せり。主恋ゝとのゝ疎ゝ心ゝ都鄙山下定包ゝ緯十二分ゝ謀ゝ主ゝ有一日老臣近臣ゝを城中ゝ召饗ゝゝ会送りゝまりゝけゝその緯の為ゝ定包ゝ長袴ゝ烏帽子ゝ掛緒長ゝゝ大刀を時ゝ上座ゝ推處ゝ又礼服の下ゝ身甲をさゝ力士十二人を傑立さゝものゝ左右ゝ備らせさそ畏人ゝ對さいのやう。先君不慮ゝ世成去ゝのひゝとゝん子ひとりゝの立さぶ鄰郡他家ゝより擇とゝ世子ゝをゝ麻呂氏ゝ女子のゝふゝくようゝんと間つゝ席をゝ立ゝ〳〵ゝる面を向上ゝものゝもゝく。衆もゝともゝ小功ゝある上ゝ藤倉の執権ゝゝ北條氏ゝも信ゝ両郡ゝ知ゝれよゝゝ君ゝと仰ゝぎゝゝ忠勤ゝを励んようぞゝとのいへゝと諭ゝそ嘲てゝ回答ゝゝ定包笑ゝ介ゝとゝも大ゝゝ。これゝその徳ゝるけゝとゝも今ゝゝ衆

ぎ張の後ろびの人の望を失ひく。この城ろのがく保ちがたけん。これ旦擐み二部さ領ーて。
とく人をぶ徳ある人こ譲るべし。野心を存ぜるとろろ々ゑとくく推書み血を汲ぐせ更み酒宴を
設ーく祿をそそぎこばこる萬歳と祝ーけり。かくしてぞ定包ら滝田の城を再めて
王下とこれを名け。王粹をおのが嬪妻みーく。後堂み冊せその餘光ろの寵妾み
かろく枕席ぬをゑさせ。富貴歌樂を極めーろ威を鄰郡こ示んとくく館
山平館へ使者こ遣ー。定包不肖みーくひろけろく宴人こ推そめて長柄平郡の
主とろぬかれが子こ両君こ好を結んとぬみのこ此方よりや推ままこ貢方
よりや未満ちのふ左右ハ賢慮よろべしとをゑみのハせーろ麻呂安西ハ
果て娼と必ずと一朝の張こあくまでそのこれ
けつさゑびこの館山の城主ろる。安西三ろ大夫景連へ力剛く心悍くそちの線を
ぬめども気こ満ち決断色ろ平館の城主ろる麻呂小九郎信時み利み進を

人を傷る。貪婪ぬ匹夫の勇将ろる主ろ安西こ諜ー合ーく。定包を討んとそ有一日近
臣のこをろく。潜の館山の城こ起ろ景連み對面ーそ定包が縛の兇ゃふよーさ
密ぬー。和殿其ホを戮ーく安房朝夫の軍兵を引率ー。瀧田の城を攻んみへ。
勝利疑ひろろものこ定包脱く首を授さ。彼両郡どころちろろ悩をそろびや。
と忽率こ勸視せべ。景連ろ然左右こうち頼。戦内坂東大そころのろまこ兵乱こ
苦めども安房こ主未垂吉又みーく。士率軍馬のうこ熟望べ。彼山下ハ大身そろ主の
呼領をみも濡さぐろ和こまろろ弦ぬべそのオその智測ぐこ要給を推るこ主
と仕こ貳ろれ。その徳その義推こ知るべ。天の時ハ地の理こまろぐこ地の理ハ人の
和こまろぐ定包既こ時を沿く。地を沿くく人の和を約こう。自他の分限を量らぐて
牛角の合戦ぬりこ且く楽こ帰降ろく。當郡へ誰引こも伏兵をりそ。ろ忌ぬ擒み
まるともあくこ敗ろこどろ漢楚逸鴻門の一會み飛范増が策成らぐハ労ー十功ろ死

のころで草を折く蛇よ驚く後悔甚や去がたし且く時を俟ん一トさび滝田よ
り変を生ずるも必ず人離れ員くる至らば攻ぎとるも必潰んと安房へ立ちかへり信時
千葉へ行て評論區々のおろかさ。安西が近臣遠く廊より遠りまるく障
子を推開き且くも乱名を宿家の祖よ主の系連信とうく。何ぞと問ふ小膝をとゝめ。
里見又太郎義実と名告れる武士年十八九とおぼしきが後者偉よ二人をおそ推
梁りてその来由を尋ぬへ下総結城の義人大交季ノ基へ討死。その
首級倉堀内とらの両個の老僮とてもの相模路へ渡海ー三浦より渡海ー當國
白濱へ来るとり。この餘の趣意ハ人伝よりやへ入るべきよ略之。
ケ月と他ーもうくまうしるるいぐつまの
頃よ回答ひこ。そハこゝろゆるぎとぞりふ。

南總里見八犬傳卷之一 終

南總里見八犬傳

第三回

館山の後ふ

東都　曲亭主人編次

景連信時暗ふ義實を阻む

氏元負行三ふ

却説安西三郎大夫景連ハ近習のをの先ぐ結城の落人里見義実主
従三人水行よりおのよ来れる緯の趣大くふ猜しるゞら後難そりかさ
速ゆ回答せゞ麻呂信時をえりくぬ此とこのるふうんぬ。
と向を信時笑ひ主里見ハ名ある源氏ぐれども。まゝハ縁も好もるー妻二の
持氏ぐろれハ結城氏朝よ荷擔れ籠城三年よ及ぶりめくら京鎌倉を敵ふ
受てハ命ハ豫くろのとりめとぬべるふ落城の日ふ及く親の敵ぬる
ゞもえくらおゞ阿容ゝと迚かくまうへ流浪るる。とるようもるる白

山青堂藏

後ろより追退けあひ孫と仇敵をそこく説諭せが旨京連
且く陣を傾け某もさハ思へども用ふべたよりうれまゐらせ彼ホハ三年兵城
そこく戦も熟するの気実年ころ一とも数万の敵軍を殺脱ぬへ
いつふしてちこよぐ来べ允召入れこく対面しその剛臆を試そこく使ハべ死もの
うべ定包を討一方の大将をねうとまん欤又使ハべ允めうらびハ追退却
おこぐもの立地を刺殺しく後の禍を攘ひうんこの一挙ハいろふと密語が信時
そぐくうち点ぢ微妙そうもひふり某も対面もとべれる准拠一めとハこふ
芒べ景連猛き老臣を召よりとく箇様こと説示一ぢ武勇力量兼備さ壮
士ホ謀を侍さぜ只管よいそぐ一れバ信時も又倶しる家臣ホを召へば
そそその絆のよろを結ぜあるぐ景連もろ共いふ客房ホぞ生うけるこの
絆の為体をそこく武を張ハ威をかおりこく安西ぶ余臣九人麻呂が後ろ十

餘人負いうめりれお扮しこ二帯ふ居ぶがとつ飾あこる数張の弓弦の膠ホ画る
漠布の如く掛うてこる錦雉刀ハ春の列山の霞ホ似うり廊ふ幕を垂て身甲
そうる九十人あうりまうとつぐ一そ一ぐ一そ出かの主後ハ生拘んとそこりくホ彌家を
引こうさぶ行ふ里見定者義実ハ外面ふ立仕と既ふ半晌あまりふして
ふうそこと召入らをゆくとのそうこ二室ふ過ぐ衝立の紙屏の蔭より孫種乃
麻の上下そる壮士四人立見ゑ一誘ゆ人俺仁業内ハそうらんといひあへば前
後ふ立るぐうホ生うそくと恋ゐ左ハれバ此二活ゑそこく後ハふる
杉倉堀内これをえそこく吐嗟とだりもろ共ふまうまをもんとまる将ふ又
おるぐほとうより白小袖ホ玉襷掛て袴の股立そこく取る鞘兵六人支生く
短鎗の尖ハ突揃ハ先うふハ皆背さるふあうれるぐうぞ送り去ふる
ハ義実ハ驚だるれ色なくこれのくれ数待る三年以来結城ホ敵の

矢面に立て一日もあり。縦下を潜脱しいく遍となくあとさき知らず海より外の物もなくなりぬれば却て風騒を良賤を異にせず。ゐ仰ねもの乞食ども打交りて主の後方なる老党もあとさきより沿るとえもいはず小歌とうたひ乱舞をこゝろみるに一二人を過ざる主後へ撤のうちの美女の弓弦の索斡異なる饗應あるじの刀祢の人料理を亦徳賞味つまらん誘紫べ内とといそがしく送らせて中く主後なやその席に臨しかば壮士ホハ弓を伏、剣を引提て東西なる。唯幕の内より今ぞけり。當下里見義実八景連信時を逐ふて些も媚ふれ色なく。賓座なる扇を右手に道結城の敗将里見又大郎義実亡夫治部少輔季基が遺言よりて辛く敵軍の囲を拭脱れ漂泊しくさまよふ落ぶれりかゝるが逆旅の旨屋ホもてなすを今ハ旁を寓して華洛にさすらへ鎌倉なる管領ホも後ざるこの安西の民とうちうべ

こよなき幸ひのべとおもひしかども一朝のちりを蝕ほうもあらんとは一朝のちりを蝕ほうもあらんとは云ひつゝ敗軍の将とて嫌れど。對面を許しぬ。倶にくるに亡父が愛臣杉倉木曽次氏元堀内義人負ひ。ゐ氏元負ひ。ゐ氏元負ひ。ゐ氏元

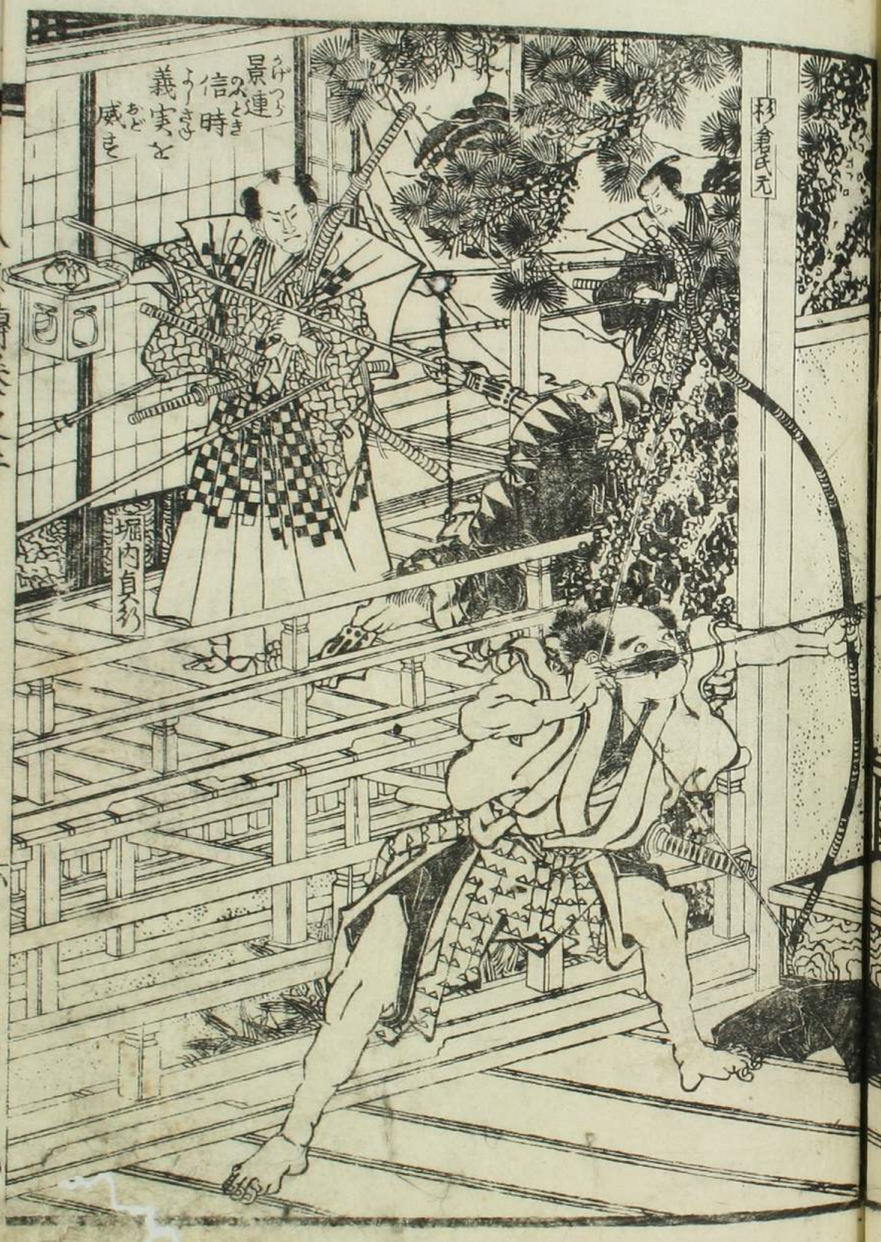
命を敵に受ん方のなくとそろの兄まで
泣んと思ふ嗚呼人の落膽を情むと慈眼視衆生佛のごとく草莽を容るゝと
も里禍壽海を仰ぐ方雅ら罪人をよろこび留めず。その崇を招くべき
盆の對面ろくん。とあざゝ詈る顧をそ。抑つゝうち笑ひ笑實に元然とうそ
咲く。もう山ふかその名ぬえー。麻呂ぬー。み狹麻呂安西東條が當岡の
崔嵬家ぞう。男悍武畧さもてそと思ふ。親ふて
も季甚ハ生涯只義の一字をもりぞくいたりち難ふべしとぞ。結城へ
宿參鬼り。京縲倉の大軍を三年が間防ぎとめて死ぬ臨とも悔ーとせざる兄。
某親ふ及ぶとも。敵をおそれて逃も甚ぴ命を惜て走りも甚ぴ亡ぶ乃
遁ぎこと猶ふ。時を俟んとぞふの縲倉の持氏卿
扨世さろぞりし時安房上總ひべさろん。八洲の武士一人として心を傾け。

腰を折生仕せざるもろひとそ。幼君のあんぬ。家を忘れ
身を捨て武朝ふちぞを戮ー結城ぬ竜城ぬさろ。柿ふ勢利ふ爲人を憑げ
ろれめろればこそ。麻呂ぬー。安西ぬー。持氏卿の恩義をぞハぐ。西管領の
榮をおそぶ某と容ーとろろ袖を捕へて退りろん現管領ふ威権高ー。
囲ふの武士隨從ひぬ。おそぶぬふさるところれども。ろのごとく主從三人ふるぎる義
実をいくおそろく。器械令ぶる壯士ぬ結引せ當処ハ安毒を異えこ口
ぬふ。ご用心嚴ー。席上ふ弓箭を掛。劍戟の鞘を外ー。剱帷幕の内ふ
黙の力士をかゝーのふふ。いふぞや。と結ら目を注ぶ見ぶ景連ぞろぎ大息つゝ
ろり。劍戟ふ爪牙ぬ等ー。ふ身を護ろれ。
かろんや。倶ー業内せーのとぬ器械を令ぶせろ。力士をかし置ぶ景連

る。家ぢうもこれをきゝ。什麼汝ホハ何のあ
で。ゐよと追退け。飾ある鎗長刀ハ屏風をめ
ぐらし。奥の隠るのそのまゝび安西麻呂が家臣ホハ遠侍へ出るもあり。屏風の背よ
退ぞく。汗を拭ふも手のうけかゝるまゝ腰紙をやく。
実ふうち對ひ今示さる鎗の処。その拠ある仙さまど。敵をおそまび命と
惜ど。後運を天に任ふく。時を俟んとやそのゝび坂東ゆハ源氏をのゝり。なる
対のうへあるべきに一國の主もあらばぬ。好ゆ元来終くうの安西氏を憑たとて
船成よせてろぐに餓るものハ食を擇ひび追ふくめハ路を擇ひび敵を
おそ且一命を惜ふく逃迷ひハいかゞゝ恥かゞ
対の水を飾らびるまろうべ如此ろうと明地よ告ふ人明地よ
ろうる。この席上ゆ連るかひなふとうゆゝくくちぐ
いふくぬへ。それさるとも成まうぢのこ過ニハあらじ
一對一致の両老堂ゑ。源伏ら主ふく。信時ハ怒ふよ逼りふく。ゐもるいかゞ。実ハ

いかれどもと再三こびろ退ぞ成ぬゐる添ぎ
進ふ出心を師とふく人をそれゞ打据もあ
麻呂大人の推量ハ雑兵仇武者のゝゐ
命を惜ふ敵ふ退れふく途成失ひぬふゞ當岡よ来つるゆおふぎ偏ゆ先鋒を
追べゞ昔源頼朝卿石橋山の軍敗北て安房へ赴給ひし和君の先祖信俊
ぬ。安西の先祖景盛ぬ。東條ぬろ苦ふ第一番ゆ隨従ひ二の志をあらハ
ろ頼朝ふ主ゆ先を追ふて上総へろ越の
大軍よろりゆふ更ふ鎌倉ふ基を占ふく遂ふ平家を滅ーゐひ給里見もおほ
源氏嫡流八幡殿の御末ろりかゝる古例あるものをあまりゆ安下ふあとろゆゝ傷

源頼朝公
曽我の兄弟


景連のぶとき
信時うつさ
義実をあどを
杉倉氏元
堀内貞行

乳名をつるく忽地水声を激〳〵自行氏元不礼なせそ。これいろ〳〵ろうとうさべに
頼朝よ比んや。その漫え鳴呼〳〵と叱り懲こらしめ〳〵追退け。勸解び寛る容ぶりみ。
信時が眼を瞪じ〳〵て紙丈きを〳〵おいかぜ景連が肩揺〳〵て揺ぬがでく絵笑ひ。
あるひは佛ぞ〳〵とくべ木いろ〳〵めろ里ろの里ろの後者よくやろ〳〵頼朝の足
義朝が十五个岡の節度使ろう〳〵朝敵とろ〳〵ぐり廿び清盛もとべろ〳〵狭。
かれべ彼卿。流人これだ。下ろび義兵を起しこ及びく。舊恩をも忘坂東武士
招ざこども属後ひぬ里見氏かこれと異ろそのたゞ先太郎義成牧やれろこ
仕〳〵ろ。乗地一郷の外よろこびゐ勢が僅よ百騎よ足らび中葉へ宮方ゆて。彼
此よ世紙あのびあへび鎌倉へ降参〳〵。本領安堵ろ〳〵ことゞめ。それもあべ
が間ゐ〳〵。今ろる呼ん落人え主ろろ口を翻るよ汝ホ何の綺綸わろん志を
改めて景連よ仕へろべ。さこでろりのゐあるべんゐ。と

飽ちぐあざこ誇れども。氏元も負行も主のこころを汲ひく再びこれと争うん。
義実がうち微笑安西ぬ〳〵寔よあろえ。あろ
この地ゐ来〳〵ゆくよ行ゆもろ巷の風声。民の誹謗ハ止と死ろゐよと家臣ろ
主君の耳を塞ぎく。告もせび練もろせぬハちぬ不忠ろのろびや。氏元自新
ゐひろけろ〳〵黙の禄を賜ふとも木忠の人と肩を比耳の讐ろる主君ゐ仕ゐる
工戒ゐ〳〵。といられ〳〵景連氏元変そハ行ゐをや織ゐろる巷の風やらゐゐ
そや。と向ハ扇を膝よ突立ゐまゞ暁ゐハをや。こゐこゐ主人のろのろゐ麻
呂ぬゐもゐあろろ〳〵神餘安西麻呂の三家ハ舊交む絶ろろまゐ。
相佐け〳〵當國久〳〵ゐ無異ろ〳〵ふ神餘が壁臣山下定包奸計をもて主を
戕ひ忽地二郡を横領〳〵推ろ国主と称まれしとも。神餘がゐふこれを討ぢ阿容
阿容と下風小立て共よ濁を受ゐハ民の誹謗も宜ろ〳〵ぼや。某このゐゐ

入れ。用らるゝことのあらバ大馬の労を竭(つく)さん。出陣(しゅつぢん)の
准備(よそほひ)もえそび給(たま)はず。その儘(まゝ)に及(およ)れ給(たま)へ。すゝめ
のまゝ口(くち)〻に批評(ひひやう)せられたる神餘(しんよ)が勇(ゆう)なる武士(ぶし)
の態(てい)。今(いま)ハしも見(み)まで笑(わら)ひあへり。景連(かげつら)
怒(いか)りの色(いろ)。方寸(はうすん)を告(つげ)ざりしかバ。
右(みぎ)ハ立遠(たちとほ)る信時(のぶとき)ハ此(こ)の時(とき)ぞと擬議(ぎぎ)せず。
をさ〻軍議(ぐんぎ)のあるまじき猥(みだ)りの席(せき)と。
あく伃(あくまで)も告(つげ)ん俺(おれ)が心(こゝろ)の男(おとこ)あらや。
〻と敦圍(とんゐ)みづ〻しく反(そ)りかへりたる刀(かたな)の鞘(さや)
元(もと)も負(おは)ぬ主(しう)のほとり小鄕(こざと)と書(かき)
掩(おほ)ふ袴(はかま)を捧(ささ)げ八方(はつぽう)へ眼(まなこ)を配(くば)り。麻呂(まろ)が後者(こうしや)これを
上(かみ)ざま〻〻失礼(しつれい)。當下(たうか)安西景連(やすにかげつら)ハ舊(ふる)
年(とし)の下(しも)ざまの死(し)を爭(あらそ)ふ武士(ぶし)の風俗(ふうぞく)なれど。麻呂氏(まろうぢ)ハ戦(たゝかひ)
時(とき)の勢力(せいりよく)をもるものハ姫忍(ひめおし)ぶをのこ危(あや)うびかくハ
和殿(わどの)が宗(むね)とする所(ところ)なり。今(いま)この浦(うら)に流浪(るらう)の一(ひと)
一陣(いちぢん)に支加(しか)の彼定包(かのさだかね)を討(うち)とるべしや結城(ゆうき)の守將(しゅしやう)
抽戦場(ちうせんぢやう)の大功(たいこう)あらバ恩賞(おんしやう)の沙汰(さた)
厲(つと)を愧(はぢ)るとのゝしり。景連(かげつら)軍令(ぐんれい)の背(そむ)くものハ
ちゝ〻ぬきでハ決(けつ)して用(もち)ひがたし和殿(わどの)一(ひと)
信時(のぶとき)を抱(いだ)き慫(すゝ)め耳(みゝ)口(くち)とさゝ〻著(つけ)て。
顧(かへり)みるまゝ。ちゝ〻ぬきハ。
房(ふさ)へ持(もち)ぬかゝるまじき義実(よしざね)ハ扇(あふぎ)の
まとゐ。
ハ。
ハ。
ハ

なむぞうと憾るーかれバやくも留所も只この一張よあらんのを心を定めて、
回荅をせよと辭もあらば更に難義とおもへど此二もいろのやうに教ゆる舟上こぎ
よろ。よろべの岸よてそ刃のぬーなれ。おつよ底衆を蒙りて用らるとあらバ何
をか疎かべき。うるく仰へという景連うち点頭ちくらいな文のさとめん。
努て違背あるべくらバ。ろぶ家の嘉例として出陣の首途よ軍神を祭ることあり。
その脈ゆ大死るる鯉魚を俎よとそめ。ろんろぶる鈎をおろしてこの鯉を釣とて
かつらべよ死敵と組撃ーて。頭を切さろ不同ろべーおろろやと現示せバ。
義実固辞けれども。ろく兼りひぬと應えおて立んとせし。主の後方よ従り
る氏元負ハ左右よう。その袂を引とどめて。両人肯一進ら出安西公へ申へん。
嘉例と云宣へども竿を斜めて舟よ睡う。鯉を下ーて魚を捕る。その知ら
鰓鉄よりひめ。これらハ武士のせざる所。義実ゆ似げる死抜え思ひ

ちあらんことろの臣死ととうを古人もいへり。脈とるーめへ
うとのいせも果ど景連ゆ氏元ホを招とて疾視彼奴甚不礼え武実ゆ法度を
おそれて。既よ兼話せーるのを。化耳抜ーて行とゆさるその家僕よて悼ろ。
ろぶ軍令を犯しる罪尤軽うひ彼季ーて斬て棄よと烈しく怒りて叱
せび氏元負ハちろく進ろく。祝果さんとてくりろ武実ゆ耳よ
遥よ退せ彼ホがるよ賠語ゆへハ景連ゆやく乱色をさろめ。ちろバ鯉をろる
まろく武奴ホを和厥ホあづろん。和厥ゆ親約めく事よそ三日ホ限おて
べ。笞ゆ問よーく日をろさバ白物ホがうへのろーまよ。ろ沿てよと他るもろく。
いろろ毎ホ義実ハ恭ーく領諾ー。ちろろべ旅宿へおくらんとろくうろ負ろる
老堂をいそびたろ出ゆへバ次の房よ鶏闇さる麻呂小五郎信時を猴子障
子を開ーく。冷笑ひろく耳く目送り。あろーのほとうへたろおろく安西ぬーいとゆぬる

るどく里見が後者ホを助けくれハ只管義実を恨る果さんと
志つるどもおのれ和殿ゞ指とゝのへハ網に裏の魚を走らしうと卿がはしく咳けバ
景連実にくうちほゝ笑ていもそれも又ちからなし。めよう。用意ハあるゝれども義実ハ名家の
子ゆゑ小冠者ゆゑ又後者ホゞ而堀一人
当手とのゝ死欲さゝを漫ゝ殺下さバさもも數人を殺さん數窮まれハ必囓
自窮まれハ必咬ふ。況勇将猛卒ゆゑ。後ゝを束さ刃を受んや。窮鳥懐ふ
入ときハ猟師も捕らぐとのゝるゆ。今定色を討ごて怒る死人を殺さバ民の
誹謗ハ日ホゝさ遂ゝ大事を成ざかべし。さるにとく義実を二たゝび留め
ゝ猛獣を養ふごとく。早晩寝席安ふらぐ。首鼠両端よ言をよせて
ゆゑ主後ゞ雅慢を厭ふ。祀の贄を求めん。陥阱を造るめん安房一国ゆも
鯉をせ是その風土よりるめ欲彼奴ホこれをあらぐゝ。測よ支那よ

海猟いごゝホ日をとゝ。軍法ごとくこと豆成斬んかくてを
殺さもその罪あり。こゞ私とのゝへゝ。早晩寝席安ふらぐ。首鼠両端よ言をよせて
信時ハ笑ゐよ入ゝ営を干と鼓噪給ふ。主後ゞ雅慢を厭ふ。祀の贄を求めん。陥阱を造るめん安房一国ゆも
赴ゝく。定色よ後ゞ虎よ翼を添るさ。ゝ用ひるのべ庶ゝ貸て
田屋を損ゞ悔ひとのゝひごゝ留て後よこれを殺を謀よやゝめるゝ。吁嘉
るゝゝめるのりと只管賞嘆をくうけるゝ。かゝし程よ義実ハ白濱ゑ旅宿へ
とゝく。歩の運をいそぐ。と途のと遥ゝりけるゝバかゝりも著ゝで日ハ暮ゝり。
抑安房の白濱ハ朝夷郡の内ホゝく。和名抄よその名ゝえゝくいとも舊ゝる
郷よゝん。濫口村よ接とのゝ今ハ七浦と唱るのゝこの濱辺の擬名ゝのり里ゝん
浦。原。乙濱白間津是ゝ用法ハさてお
氏の舊趾。その事ゞもさくまおゝり。所謂安房の七浦ハ川下。岩目。小戸。塩
ゝゝ。ゝ実ハその暁ゝさ白濱へかゝりつ。

目睫もせぐ漁猟の用意をなす人人氏元負矛欸ぎ。君子は曙り
信時ハ匹夫の勇者景連ハ能を忌ミ才を猜く甚傑り。我を元ると仇のごと
憑ーげる元人のあるを鯉をあさりて行ゆくハせん。そや上総へ赴元てその毒悪を
避ん人とりろた小漣ーるが義実に元ち掉ると杏。你達が出見ハたぐり。麻呂
安西ゲ人とのり。利実親く義小睦うり。口と行ハうううゆく。定包をおそろく
のぐ瀧田を討のろろ。と。ろぐぎろふあるぐ孫ども。さら戎避く上総へ赴元彼
元ル又如此るぐが下総ハ敵地え。そのとき君子ハ時を沿て楽ミ。
時を失ふくも亦楽む。呂尚ハ世よいのふ太公望老なり。齢七十小傾くまでよふ
人のろろ。渭濱よ釣ーく文王よ値偶ー。紂王を討滅ーく大功あり。膠門
國ゟ封られ。子孫数十世よ伝ぐくう。太公望とうかくのぼこれハ時と独力と。
両ぐう失ふのめん。釣もるまで氏深小。且鯉いめでふ元魚ゲ傳聞安南龍門
の鯉瀑布よ泝るとのぐり。これ三浦ゟそ龍尾をそう。
今白濱へ来る小及びぐ。人又鯉を釣とふ前象後兆憑ーうるやや獲あふ
斎ーく。景連がせんやうを姑くそれとろふ。暁るのぶ出んといそぶのハ氏元も
貞矛もその高論よ感服ーく。釣をやめ。さを
主後三人名もろぬ淵をさづりて
天ハわのぐと明ふう。

第四回

小湊よ義実義を褒む
邑内ゟ吉鱠を逐ふ

却説義実主後ハ此の池彼川と淵ぎて。ぜよ方て途より途よ日を消せど。
白濱の旅宿へもうどゟ。ろぐ長狭郡白著河よ漁猟ゲどふ。三日ゟ
なりふける日数もけゟを限りとゟ人ぶ。ろろ頻ゟ焦燥のぐ獲ハ殊ふありるぶ。

小鯛ぶるも死鯉ぶるも。釣よりもと千劔振神の代よ。青や山青堂蔵
て矣ゆ一釣を索つ。海龍宮ゆ遊びもひそ又浦嶋の子ハ級去魚釣り。鯛釣
うもさく七日もぐく家ゆも来ぞてあさりけん例ゆ今も引く糸の素れ若ー死主
ぐ。撲ハ岩ぐも面をあへーく。斉一咲世嘆きそうけり。浩沙ヨ汀下よう。声今ゆ
唄ひつ。おろ〳〵を望く来るゆあり。主後これをえ知ればし最逢げうそ児へ
什麼いろる打扮ぞ。ありし乱ーる髪ハ春の末黒の芒のぬく。掻垂さ肩裳ハ
杜の浦よる海松ヨ仙さう。みとも
る人の皮膚ハる死ゆやゝ熟せる苅枝裂ある柘榴巨さる墓の脊とい
とるゆくもぐくハあじうーさてゆ今下ハ惜きゆる世ヨ疎れ人ヨ婚れてゆ
死ざりけるうちそて忌ー死ヨ渠ハ何とゆ思ハざるゆや底斜る面桶を
うち鳴ろー。紙る声りく唱ゆと里ろそて。ー白帳表ー生風も

う。安房の水門よる私ハ浪ヨ磯ゆ朽ぎ人もてそ引け。これもひろ
うえ。ー今逐ーつ寄る祝ぐもぐく汗迫ヨ立てぎり。彼人ゆ釣を我つくと
うちえてぎり流る膿血の臭ヨ鼻を掩ふ。ー主後ハ鼻を掩ふ。ー迫ろー。とおもふ
めろろこ児ハ立とえーく近くよ。
の称ぎうの釣ざゆてそちろる祝式ハ
きく岩ひゆふと志ぐく向れく氏元ゆ己と我ゆぎ回ー杏ろぶ欲をるゆハ
鯉へ他魚ハ好ーうぎど全益の報生せ。
児ハゆあ〳〵腹を抱さうち矢ひ。
伊豆大島ゆ馬を向よう。ろ仔労ー
一岡ゆハ鯉を生ぜ又甲斐ゆも鯉るーとぞ見その風土よるゆ欲又一
親ヨ一岡十郎なうぶれ彼魚ハろ彼巨の一尋さるゆろれがといくり。

その子拙弦求めめよ実ふ妥盃の殺生ろ〳〵ん。とあざ〳〵傲りん。常を
拍そ又何ことうち笑へび妥実おが
大鵬ハ慈雀の林ふ拒ぎどられいろる
厚多ま〳〵ど百踏〳〵く安房一郡の主ふまろ容られざ然る戎喩を就ふ取り。
今又鯉ふ久後をもひようせ〳〵ハ愚癡るりた元来鯉ハこの地方ふろ〳〵と志す
つ治せよといひつる人の心の底ハ濁江るぐら新元そそくふろ伎倆と今ぞ
志るり〳〵この乞児ふ逢ざりせバ彼毒計ふあてろまるん危くりしと今ふ又ふ
只管驚嘆をもへび乞児ハこれを慰〳〵さのミ悔〳〵ろひるる陸奥ふも
鯉ハる〳〵。彼ハ五十四郡るり。志れバ鯉の生まるとまでざるとそその岡
郡の大小よるめるかれバ一岡十郡ふ元ざまハ鯉るー〳〵とらふめ〳〵雫
強附会の臆説るるまど百十室の邑ふも忠信あり。讐ハ里見の御曹司上もふ
人とるる〳〵一人岡成知るふよるる〳〵この祖ふ漂泊〳〵く膝を咎うこの室るる
といふ主後目を注〳〵く乞児の顔とうち熟視る。そ〳〵中ふ義実かうちゆ毎ふ
嘆息ー〳〵人ハ形貌ふよろぬめるる汝ろ〳〵ろ彼光明皇后ふ垢を撥せ
ろる汝又彼光明皇后ふ垢を撥せ者の類汝固より吾とろるめ汝その
名をふよほ〳〵れと呼りめへび芸元慈と咲ふろハ人の往還繁り。後めへ
とそ先ふ立バ主後ハるのほ妨るのろう。虚〳〵く拳をおさろて後ふ跟従〳〵く犯ふ。
小松原の郷近ろ山蔭ふ往門ろ。ものが脊ふうち被る蔬を脱〳〵く塵うち掃ひ
樹下ふうち布ろ〳〵。美実を居まろ〳〵ハ氏元と負ハ夏草を折敷く。
主の左右ふつんめろう。當下ろ児ハ逡巡〳〵く蒂ろ〳〵額を著いちご見ふ入
ろるめふいひび不審と咎ろんこるろ神餘長挟ふ光弘ガ家隷ふ金碗八郎
孝吉とんれ〳〵めふる果ふくいろ金碗ハ神餘の一族歴ろる武士ろれ

山青堂蔵

金碗孝吉
夜里人
とおつむ
金ごろう八郎
杉倉氏元

堀内貞行
里見ノ
白箸河ホ
劔ソ
義実
義士ホ

庶子ども残りなく家臣となりぬ。されど某ぞくの老臣の第一席ぶひひーが某をやくして父母を喪ひ手もなく尼ぬ死ざまざまの職を奪ひとりこの人を微禄せて。僅に近習ぶ使れさう。ぬくく主君の行状よろづ色好き酒に荒き側室玉梓に惑溺ーく浪費の肉を生ぜ倭人定包を重用ーく賞罰を任せーぶこれより家則いさく紊れさく神の怒り人いふぬりつこと戒禁ぬ民ぬおてもさく旅へ尻君をどもその老臣ぬ禄のあるその罪をきりつこと法を犯ーく。これを睹ようるまでぶ某頻ぶ面を犯して争ひ諫れどもそのひひ比干が肝を刀尖ぶ串ぬ伍子胥が眼を東門ぬ掛るまでぶ君の罪をいその罪もぬ及ぼーぐど。大厦の覆んとまろとするに一木いつできれを救ひ止めく用ひらまどぶ死ぬやと。ぶひひーぐうく。

ぶひひーぐうく。

ぶひひーぐうく。

徂徠さんと云くとも面ハ豫さくこんもあくざれハ晋の豫讓ハ漆ひ
つゝ身ハ疥くく姿を變一日毎ハ瀧田を徘徊して間ゐく時ゐく窺へだおごりと
ゆうとゐるを怪しむ人のゐるなきあらバ且く彼処ハ遠離りくこの処ハ
隠れゐる乞巷の風聞里見冠者義実ぬし結城の色を脱ぎ捨て麻呂妄西をこゝ
ゐと彼人ハ能を忍ぶ才を媚ふくこれを用ひど剰言紙設さんと計れる
よし不思議ハ耳かへるとい人ハ君ハ告るん因ハあくまでハ名紙ぬしう
ぎみうとさちゐ臣児が無乳母と蓑ハの心持ハとるのうそハ何処ハとうちつけハ人ハ問ハ
ふハさゝみとそゝ箸の何ぢまれが約まる刀祢ぢゝ他郷の人とおぼしれハ人表骨
相平人ならバ親くこそとも礼儀ハ稱ふその為体ハ主後ハ三年ぢ正く彼君ハぬん
と推量れども白地ハいひるよりも消潰ハ蟲が舟歌ハ擬へく事情を述ぐり何
とぞ里ぬえひくとの里ぬんの君を沒くく敵ハ氏の名を表しこう白帆芝
ゐを風まものゝとゝ白帆ハ源家の縁をハのおくハ義兵を揚ゐバ威風ハ靡ぬ民草
ゐのとハるゐゐゐ残隠しう。安房の水門へゐる船ハ浪ハ碎けバ潮ハも朽ぢ人ハ
とそゝけゝまもゝとゝ荀子ハ所云君ハ舟ハ民ハ君ハ水ハ君ハ今漂泊をゐひて麻呂妄西ハふ
忌嫌れ離ぬるおゝバ多くハ見ハ員ぬそまつ紅バ竟ハあゝ者ハ悉ゐく
瀧田舘山平舘ゐる剛敵をうち平げゐんと祝そゐハ組ぬ今美ハ仗て雄ぬ武
揚猛ハ瀧田へ推寄せく定色が罪をかぞへ短兵急ハ攻ゐバ一挙ハて城を落
さん彼城既ハ狭伏ハて平郡長挨を取ゐゐで麻呂妄西ハ討ぢも倒れんぬまもも
とゝ死ハ人を制しゐるゝとゝ死ハ征せゐる。そくゝゐひくちゐの人彼城ハ如此ハこゝ箇様
箇様と地理要害ぬゝみとるゐゐ述ハくゝ氏元も負ハもよゝ憑ハゝ心持ハくく。
頻ハ耳ぬ側てゐう。ゐりけゝとゐ武実ハその後ハ乱ゐるのくいゐく呼ぶれ実

過ぎ徐ようとのみとも宴をひらく衆と敵ーがこに況ここは浪人なり行装因こ
郎方を集ん今日は主後三四人瓢田の城を攻んた
異ろうと及ばじと辞のへ八金碗八郎小膝
大約二郎の民百姓徒逆賊と虚げら且怨骨髄と徹るとの人どの捨と壁れ威と
こそ孤独を辞せば。神餘がある人とうく義と
蛭の密と繋ふが如く。響の物の意まるでく。皆紋ぐ支集り。仁武の軍と命と擲生
ろがう定包が穴を喫んと願ざるのゆんや。
志ろ。衆人と集合んと学をくばより易うり。計畧へ個様ことと聞ちくまって
密沼ば武実へ有理と應く。
ある少へ男もうくば遂と廢人とうのとの
のみをうぶるふよる軍兵うち孤ば面
云ふとといひうけざるべーのその痛の頭と
愈る良某うへ不便のうえ某剤もうぞと
集るふ志る人ありとの名告るとの。そとうと
忠義のみとのひうぐうの皮膚へ痛と包とうやく人の面教ぎそへ朋方と

とく愈る痛うへば愈とよばとあるべ
撞く家ゆくり鰻を喜ふるとあれば。漆と
今その痛へ漆の毒と鯛さるのと肉より漬
毒と鮮へ立地と愈りやせん用ひてこよ
又呂を推辞ばこの浦曲ゆ鰻多うり。いそ

蚤の子どもが乞のうへの魚盤を載つて来るけるを見て氏元慮ーくこやくと
よび　ゑ　ゐ
ゐるとぞ何ぞと問ば蟹えり。おのれ愛さ。と笑ふぐらゐ遣りをく買とるふその
数三十あまりあるを。実にこれをそ。箇様ぜよと教へば孝吉がこゝろの内
果ぐそのやうすのぐり甲を磋ぐく全身よなつて。そぶ間よ負ぬ。ホハ腰ろ
燧をうちまるし松の枯枝を折焼てぱ。ろーあぶ。吉よ與ふをもとうも疎さぢ腹せよ
只掻く随よ脱落ぐ。大ぐこうのぐび愈よう。現掲馬苯の效験神佛預忠を
憐ぐりる奇特と示ぐよ似ぐり。奇ぐく。氏元ハ負ぬの共後ホぐろ横ぶろ
めて嘆賞ー。あれえゆと指せハ孝吉ハ馬蹄迹の溜水を讀ホーぐく日ろ面をを
つくくとえつて感涙を禁めぐび皮膚ハつぶける如もろく。撫乱せー痛ハ今立地よ
飯ぐろの文武の道よ長ぬ良将の賜ろのの名医ハ圀を医まるとうや某の男もろ

屑ぬもの乞ぬと乱せー圀をうち治めぬ民の苦艱を救ひめぐび寛仁御
まろぐんぱとぐろハ麻呂安西ぶ来地よりゆるばよりも限る日まぐた彼ホおせるまぐず
おろぐん筑さうとぐく粧襪をぐたホおろぐ。撫乱せー痛ハ今立地よ
起たぬハと叮嚀よ勧めぐ。蓮の葉式撫あげぐく警短よ引結ぶ腰ぬ縄の帯
ろぐろ。隠ーぐくめてる七首をさーぐく往方ハ小溪の浦曲迄よ誘引ね
さる程よ金碗八郎孝吉ハ里見主後よ郷導ーぐく小溪へ赴けば夏ー日ろぐろ
そも暮ぐ。九日あまりの月ハさぐ。結とーろるまぐ生ぬ。ぐ呂ぐ誕生寺の鐘の声慢ぬめ
ぬ亥の時ろのぐさてもこの小溪ろる高光山誕生寺ハ敢川村のそちふあり日蓮上人
生まぐの地なる仍りぐく。日家上人開基ーぐく。一宇の精舎を建立ー。誕生寺と名け
ぐぐ。ぐぐぞ良賤渇仰ー。貴こ檀那とろのりしぐび法門長久の鰹首ぶ俗ぐぬの上
ぐ。まりろけ。あハろうぐ。
徳の七里法華。安房七浦の経宗とろぐ大ぐ題目忘ろのとども。就中長狭郡ぬ

祖師終生の地なるとばかや。苟且にも他宗を弘めん僞間の信者をゆるすべけん。
こゝは金碗孝吉が豫て討ん且里人ホを緊んとて終生寺のわとを
なる許叢よ火を放ん。さるる燄草ゐら私ども野干玉のくらき夜ゐのまぎ
れにもなきねこ携漫夫丹人祢子も釋氏ものく先を爭ふく喘ぎ走り來つゝそんまこばすを
笑ふく甚だ我ゐと兩三町人もひとりもぬ竹藪のこ果敢ゐくも燒ゐるゐ夜へ
靜かく風次ゐ里遠くく小舍もゐゐ人食支ゐ製し火を大くこよ
往のそ撞もまぜゐりしゐ裏人史よ旦れ終ひくく鉢巻よせもゝ甚と解つ
汗然ともあり。これいゐゐの白後くくこゝゐ兩約をゐるでも野中のさゝそ

うゐは狡ちとふあらぶ可惜胥を人も我も起さゝて逸ゐ十町退ゐ三里ゐ飛がく
ぶくふ吉ゐ歩くく減せーうよ立喰のかゐうなゐをいふせんさりとてさせる
うゐゐハ狡ぶつゐ筋ゐゐぶやとのれくゐ吐とふもあり。岩ゐ祢く罵法
のゐ皆集合ー儘よ魁ひくをゐ。當下金碗孝吉ハ燒殘りうる鼓法より。
噴ゐーゐ立祢ハ裏皆弁二ゐをゐくく人ゐ鬼ゐとぞゐりふ旦驚ゐ旦呆れく
あれよくとの狙よ孝吉ハ甲夜よりゐ伏
ところよ你達とやゐうのゐと喩せバ史よ
俺們を迷せー白物ハ彼奴え打よ括れよとゐ聞くを驅ゐ進ゐ緣由を
告ざれバ。もゐやゐるべゐとゐゐ故ゐくゐ
せんと推猜ゐ。その囘乱ゐくく忠臣ゐふゐ
あるバゐそゐハ浮世よ隱ゐみざゐ窶れ果ゐゐバそゐこゐやひけぬゐ

べし。こゝに舊の國主小仕一金碗八郎孝吉といふ。曩に君を練りて、ひそかに逆臣定包と謀叛を為
身退きて旅宿に生涯終さゝんとすれども。舊恩忘がたく。
憤ひて故郷に立歸り。名を変姓を變んとて。隊を離れ。人衆を別れ。天の
涯。あさり。多年。結城の寄手を救脱さんと。白濱に漂泊し。安西ホと頼みをかけて彼ホが忘て
ば。一日留めん。圖樣ありとも。こゝらホ機密を告げ
達く逆ひ與しく恥とせず。古主に舊交ありといふとも。こゝらホ機密を告げ
ば。よも忍ばれ。憤り。墓のたこの身を恨ひの。熟ら現身の息の肉をそ啄るゝ。
死ぬるの後ホ天ホのりて。遂ひ怨を復さんゆへ。腹と切らん。とぞいふ折里見冠者
義實ぬし。結城の寄手を救脱さんとせしほどに。縛いかゞその期ホ至らば。
彼君手の内ホ忘れ。ひそかに良將大物
包を滅さゞれ。是則賊民ぺ一國のゝく餘殃を受ん。四のゝ逆を討義ひ仗ホ
もろホ言ホ必踐易しとりく。ホらホよ
箕へ集會ふ。こゝ荀且のところぶと叮嚀ひ。金銀どのとゝもひらけざるの
ゝ良民ぺるぐく土炭を脱ひてく子孫必餘慶を受ん今ここに義を
ぬし。結城ひ音り。武上式ホ勢ひ生拘られ。
脱れてホ漂泊ホところの身をそ
虐ひ。ホのびくふうち歎く。彼君ひ後ひおゝ世定
包ホ

ゐぐどちくく及ばざる勢ひ當ぐくけまじ月日いたく残照さびや。とうち歎じたくいひー。

さるほど里見の君のくの雑とくるー小弘声を素姓を尚八源家の嫡流世ゝ四子ぇる良将へとやゝつる日よゝり莫ゝく足を憩ふ昔醒き。多世大伙ゝ病甚まむ民草を憐さゝおくよ軍を起ーゐぐ誠ゝ四の大幸ゝり。孰ゝ余を惜むべゝ其処方をこゝ如ゝり。其処ゆくゆゝ仲甘ゝ兵実ゝ民元さゝ負ゐを将て数落ゝり。徐こと進を出ゝ衆人ようち對ひまゝそ里見兵実ゝれ乱ゝる世ゝ殊更ゝ日前ゝるのゝぐひとそ修羅闘場ゝ奉ゝー矢傷のきゝるめゝゝ悪木の蔭ゆゝ頽ゝまゝゝゝ民の父母ゝるべゝその徳施てゐといくども。人倘ゝゝを給じとゝのゝべ。ゝゝ赤その報ゝよゝざゝんや。譬バ千里の駿馬ゐその

あ[illegible]ゝれバ走りぐゝ万里ゝ羽を振大勝ゐ翼ゝるとゝれゐ孤独ゝ

ゝ[illegible]者ゝれ。今衆人の佐をゝゝう。遂ゝのゝゝ滝田の剛敵ゝるり。馬物具兵粮の貯ゝゝゝゝ桃ゝゝゝ。

まゝく衆皆面をあゝー現ゝゝなり。ゝゝゝゝ

村長とおぼゝくゝ老ゝるの面三人班をゝゝ

聊愚按とゝるり。凡長按一郡ハ定包ゝ服旅の老掌葛巻毛酷六ゝあゝうゆゝ東條ゝ在城せり。ゝゝ紙ゝるゝ遠ゝうゝ。且緯のゝゝあゝ廿ゐ酷六を駈ゐゝゝ物具兵粮ゝゝゝ一郡忽地ゐんゐゐ入りるん。ゐゝゝゝ滝田を攻ゝゝ進退自由ゐゐゝゝと言未細ゝ生ゝゝう廿ゝ武実感嘆大ゝゝゝゝ。

ゝゝる狭野夫ゐも功者ありとゝこの使ゐを心ゝゝゝゝ。

神速ゐるゐゝゝゝ。今宵直ゝ推懸ゝ彼処ゝ陥ゝ元紙ゝん箇様ゝゐせよ。

ゝーと謀を示ゝゝ孝吉ゐゝゝ残ゝゝ氏元負ゐゝゝ共ゝ襲合ー村民ゝ数ゝ。

一百五十餘人あり。廻れを三隊よりけく。
[illegible]
皆手[illegible]巨竹を伐とりく。竹槍とりく挾む。その一隊八四十餘人堀内員外[illegible]
ゐく。假よ金碗孝吉を縛つ。先陣よ進みり。これ則義實の計畧ゐようまごろり。
後陣八則五十人杉倉氏元大将ろ。中軍八六十人義實みづから將とりく二隊を
[illegible]間經ろ遠り虫城の正門のほとりゆく。一隊よろうんといそぶろ。さる程ゐ東條ゆ。
定包が目代ろ。某毛酷六郎元範小湊の火を舘ゆよとく。甲夜ゆ[illegible]
火八そや滅つ。里遠兄野火ろよ城ゐ[illegible]
結ぶ程ゐ曉ぐちろくろりみろ。陪臣よ入[illegible]
さとく雖と向ふ。小湊なる敢川の村長ホ盜賊を捕へとく。牽立て來つるへん
緣故を尋れハさハ甲夜の間よ。[illegible]
[illegible]
[illegible]

そが間に荘客們ハ大門を推ひらき死囚を吐と揚ふ氏元と一隊になりて溝端ちかく寄こうけるに実これをぬかあくと時分ハ今ぞ囚をぬきそめ進めと令ぜのゝしる。

衆人打ゑ勇ざうん雑く合せる声。勢潮の涌どく。暮地よ支へりて二の城戸をうち破り。掬堂の茅毛とく出よ里見冠者義実ぬしの地小歴遊ぶものゝ。我衆人推く主君と仰ぎぬさればぞ逆賊定包をうち滅し囚の汚穢を掃ふ仁義の軍ぬされバ老弱簞食壺将迎へ奉り只今縛のくをゝ解ん。

誰ゝ歟せんそのゆくとちろ過るところ。老弱簞食壺将迎へ奉り只今縛のくをゝ解ん。

せぬもろこの城を献りぬ先非を悔くいと。玉石とりろ共に砕けるうんなよくと。鳴うけく。機横き身小擯去れハ城兵ますく辟易ちつく。防ぎ戦へとするものゝ。曽て脱弓箭を棄釜拝伏くく命をこひぬ。よりて里見義実ハ刃を鉾とつく。東隣の城を乗取り。賊将茅毛酷六をぬかよ梁ハそや。

亡くその性方とちらぶとの義実ぬしの。眉根をとち。彼ゐ懶惰後悔ゝ志を改くけめとうとき後ぐ。これ旧悪を外ゐんや。始ゐ我を明の醉醒ぎのちよ〳〵逃亡せ。

間ゐと惜ゐ足ゐ後ゐる直ゐ瀧田へ遁かくる。定包ゐ告んゐ安西麻呂ホ小撲ハ合せとく。時日を移さず推よせ来りべしこれ今新ゐ城と稜て二三百の士卒あまたゐ。

羊ハ降ホをつるものゝ主客の物乃甲乙あり。謀合期ずべしく。三方ホ敵を受ゐハ何ぞのくこまる当らん誠ゐ漳ゝ志ゐ大事ゐあらゞや。酷六既ゐまるともいまゞ妻ゝハ

ゐべくぶ氏元負ゐ二隊ゐ合ゐ疾追掛よと令ゐゐべゝ。

そ

そゝうち先んとまる折ゝゝ金硯八郎孝吉ハ何処へゝ支ちん軍兵十人あまりを招ゝ。

忽然と出ゝ来つ大将義実ゐまくこの城の案内とゝゝゐりぬされが衆軍ホ先ちくゝ三の城戸をうち毀賊猛妻毛酷六と生捕んとくあさうホゐゐ二絶くその所在をゐよゞ願ゐ城の西北ゐハ一條の沼路ありゐ前面ハ檜山ホくゝ右のくゐ樹立ふくく左ハ崖高くく。下ハ一条の谷川ゐ

為朝八郎

為朝六郎

城中一の要害あり。人よもこゝさぬ秘所ありと。彼奴ハ一ツ笛の内と名づけ、
つらんと推量りて、必ずそこに利ある軍兵を駈催し、峭を倚ひ蔓ゐをとり著提俵より
うち出で、前面を倍とゝんでくせん女房子どもを簇へ乗る。主俊をべつ〳〵九人東
南を扱て走るめあり。熟視ればこれ主人の老臣なり。這奴もそゞめハ神餘の老臣これ主ハ逸
者ひろぐ忠義のあれバ死ぬるまでくせ逆賊と媚諛ひ東條に在城して飽まで
民を虐ぐる天罰竟に追ぎ落城のけふ及びて逃るとも脱さんや。金碗八郎
さつそあり。かへせ戻せと呼ばゝりて透間もなく追蒐れバ轎夫どもハとゐ龍言ふ。
主既に轎を擲捨て撲地とうち遣せバ女房子どもハ吐嗟と叫びて千尋の谷へ
滾落様ゐ打ゐ石ゐ碎ゐ骨も遑ばず死ぬけり。蓁毛ハ眼前妻子の横死を救ふ
もべろく。鉾杖揮ふく岸邊ゐ立在ふるを倩と見めへりふく腰れふくやもあり
けん主俊七人魚鱗ゐ備ふく追ふる我をやうやう復ふ。朝かハ鶺翼ゐ連て鷲鳥の燕
雀を斃ふどく旋風の沙石を巻ふく吐と嘘ふく突崩を地ゐそ谷ゐ有ゐ節ゐ天ゐ
明るぐ雲ゐ亢峭山蔭の樹下闇進むも退も一騎打。互ゐ識ふるともろ〳〵
鎧の袖を潜脱ふく先を争ふ朝方の英氣ゐ道足馮ふる雑兵ホハ霎時拄て散
散ゐ走る紙追蒐追詰ふくはりろく生拘人
と辞せずにく演説て件の俘を引居させ。酷六が頸めろ共ゐ実検ゐ入れてくべ。
気実ゐろぎ噴息ー。夫兵ハ凶器ゐり。徳妻ふく武を講ー澤足ふざれ。威ゐりて
制もこゝ己と紙いぶるのゐ城を攻地を争ふも民を救んろゐまゐこと。楽ふく
人を殺さまどさゐ定包ゐ後ふりのみる悪人ゐあべふく或ハ一旦乃害或
おそれ或ハ時と勢ゐ走狐狸をりの。十めふく八九ろべー。この故ゐ非を悔ふ
朝方ゐあるめとーいへバ安ふく命を助るのゐふ用ざるところをりのを仟雲いろ

その丑ご前毛を。従卒ハ生拘られ彼身ハ却頭を要ひ。剣妻と子ハ石堰水とゐろ
共ゐ。皮肉碎けく死さゐん。こハ時と蟷螂ゐ斧我録さゐて通ゐ後ゐのくぞ。
必天の赦ざる元悪のあのゐるべ。ゐや悪ゐハ後ゐともみづゐゐ悪我るまじゐゐ。
努怪めと鏡諭し。金碗ぶ牽ゐて本世停と釋放さ世凡新ゐあゐるゐハ軍功の
ゐ。必彼此へ仕ゐそゐん。ゐゐゐ麻呂と安西ハ媚て定色を佐るなゐ。先ゐ
とれバ人我制し。後ゐとゐハ制らぼ。この瞻香ゐゐら護く。通霄ゐゐく

平郡の城の櫓を冷さん欤初度の合戦朝岑ハ利あゐバ麻呂安西ハ
勧賞を沙汰
せんとく。金碗八郎孝吉を第一番と定さ世荘園数賜ゐんとも故ゐ
ゐふゐゐあゐこそ固辞ひく。これを受ど第二番ゆハ小湊ゐく東條を取
ゐと下さこゐ。使とも三へを召出ゐく。その名我問せゐひゐべ三平四治郎
仁擁と荅ハ義実ゐくうち微笑こハいと愛さ我名そゐ。三平とハ山下麻
呂。安西の三雄を平治前象とゐべ我四治ハ四郡を治ん祥ぺ二郎ハ則
上総下総後ゐゐゐ。ゐゐゐ三四十二个村ゐ今又二増倍とれバ。三十六所の長さ及とて御教書を
賜ゐんれバ皆一ゐ歳と唱つ。歓ばさゐて退ゐゐ。第三番ハ氏元貞我。こゐ餘
浅こゐ輩ハ緑まるゐ遑あゐど我ハ秩禄を辞死我ゐ我ハ牽虫物を賜れバあゐく

足くそゝぶ
奔一拝舞ふ。賞重しく。罰軽し。死せるものも更ふ生活る物ハ栄さう。江ふ還る
車輸の魚雪の中ふる常盤木君が齢ハさゞ礒二石の巌とふのうさく竭せじ
と今様を合奏く。壽ぶ奥しきりぬさる報ふ義実ハ法度を寛しそ民ぞ安抜
軍令を正して士率統励しのひしくバ招うざ且ともかゝるの数百人ふ及びぬ。
こゝろふ過半とぶ置く。杉君氏元ともふ城を守らせ。僅ふ二百餘騎ぶ留く。
孝吉を先陣とし。負ふ殿陣とし。平郡へ進発きめバ氏元ハこれを諫て
切てハ与ふ小丸勢寡しこゝ城よりを二三百の士率あらバ足るん。と頻ふ密諮
ヤせしぐ。よさぶ。ぶをうち掉く否この城ハ己ぶ巣くりこゝ武破らるゝバ何
知へ還るべき合戦ハ必しも。勢の多少よるふもあらざ我ふ利あらぶ
二百騎ぶ千騎二千騎ふもなりぬべしこゝ城をもて
ふ泊のべんうそあれ麻呂妄西ホるぶ和睦せ必これと争ふべうらべ瀧田乃
歟兵しせはらべカを竭しく退のうぢ出こゝ城へうのうぢ退のべうそぢこれ安全乃
良策べ努く懈るべうらぢと叮嚀ふ説諭しさて先陣をいそぶしく薙く出陣
きのひう。果せるる里見の一軍その夜前原浦と濱荻ふる堺橋を
渡はお。武実の徳威慕ひ風を望く帰降する。野武士郷士るど百騎二百
騎うちつ且ともくおくゆく追著在り。軍勢千騎よなりしうバ後ふやうぐも
この捲纔千騎橋と唱ふう加旃こゝ
上総へ赴ぬのとれこゝ川のほとうゆく後陣を待せのひとそ結崎と字ある。
側ふ白旗の神祠あり。義実則馬より下りく。征前二條を奉納し且く祈念
ありぬ真夜中ふるふ白旗二隻社ぐの松の梢ふり。そゝくと軒著翻しこ平郡
のうこゝ北ぬこ且戎ふる猪軍兵合戦勝利疑ふ(と)そ勇ざるめるうけ里

南總里見八犬傳卷之二終

東都 曲亭主人編次

第五回

良将策を退て衆兵仁を知ㇾ
霊鴿書を伝て逆賊頭を贈る

山下柵左衛門尉定包ハ麻呂安西へ遣ㇾ[つかは]その使者瀧田へ立ㇾ[たち]帰て彼輩ハ忽来ㇾ帰降のよしをいひざれども怕害てひしと遠うちぎしてひともよみづうち結ㇾ[むすび]ず罪状勸解麾下ㇾ属せんと疑ひ[うたがひ]ろ[ふ]その為体ハ固様ㇾ[かたち]如此ㇾ[かく]ふりひ[ぶ]ん[ん]とやぐもある如く辞を飾り首尾精細ㇾ飽まぐ媚ㇾ[こび]告ㇾ[つげ]べ定包ㇾ[さだ]もとよりまろ傲り夜をりて日ㇾ続杯奥ハ士卒の労[つかれ]をりこぢ戎ハ玉梓と弊軍を共ㇾ[とも]ゆ[ふ]ㇾ浪園の花ㇾ[を]翫れ戎ハ黙の美女を聚ㇾ[あつめ]高楼ㇾ月を賞びきのふハ酒池ㇾ牛飲けふハ肉林ㇾ

飽餐して一人かくの如くなるこそ老堂も又遥酒を耽りて貪しどの飽となく貰せども盡ぬを考ぐに王莽が宇内を制する日禄山が唐祚を傾るとて天日私を照すをも忘れて逆臣ハなぐく命絶うけを定包が滅んと必久しからずとて目を側て飛弾をとるのミならけり浩処は城外城中は劇く敵軍乱ちく寄ると雖も定包ハ後堂に酒宴してなり。此も騒がぢ。それ何わどのゝ勲ある勲ある虎の髯を引く安西麻呂ホゐあらざり甘ぐ民を劫して物を奪ふ山賊ホゐぞあらんぞ。そが為体をうてゝ作候を遣ーけるぐ且ー立ぬり。敵ハ安西麻呂ホゐあらざるぞ又山賊ゐもゆらぢ雑とゐあらざる千騎あまり整ととのへて稲麻のごとく。陣列隊伍法の稱ひたく。中軍ゐハ一人の敵ゐあらざるが為の白旗を推立てるが為の敵ゐあらぢ。ちゝ我去ると二十餘町。両軍時く鳥の足疾く休ふく。推薦んぢ光弟え傷ぢ。ぐくひと吻死あへぢ報知ーうぐ。定包ゐく眉を顰め白ゐく源家の服色なり。安房上総ゆーく白旗を用ゐるものゐあるとハいぢそぢ是も又人我怨ぢ敵の謀ゐぞあらんぞ。それこそれゐくもあれ敵ハかなうぐ長途ゐ疲労ぐこの暁ゐ来んとをうん逸を以労を待ハ勝ぢとゐふとあるぐぐやをそく追ひ掛へと人我伐くく山石熊蛇平。錆塚幾内とゐふ腹心の老堂ゐ五百の軍兵を擾ーうぐ両人伏然と命を受遠ーく衆兵を率ぐ前門より馬乗出ー勇ゐいさゝて馳去けり。さても岩熊錆塚ハ万夫無當の力士ゆく武藝も衆よりーこそゐあらざるけ伝うぐぐうぐ。定包ゐ意ぢ稱ぐぢとゐふとをなく二三の老堂ぢと重用せうをうく。ようぐ傷若無人なるこどもゐ人食ぢ乳我屈恨我隠ーて下風ぢ属ざるものなうり。かくハ山下定包ハ日来より。彼両人を懇ーくもひつゝこの

ヨも討ひの大将ゟ撰出ゝ遣ゝゟれバ今ま
ゟ穿くみの奴原を蹴散さんと疑ひ
ゟゝさの〻騒ぐをうとゝく只兵ホみ四門ゟ
ぞうとゐつどゑ歌舞艶曲ホ奥を催し酒宴酣なり凡正體のくさゝるべく
よろらどゝく。と叫びゝゞ定包ハ管絃のゝ
声ざるゝの男童どもゝゝく来よといふゟ左右ゟゐまる所個の小鹿後ゟろ
ともホ立あがらんとする猶もあらせバ。名ひげ
らゐてる軍兵ホ五六十人数个所の深疵を負ゟりゐ大将岩熊純平を
楯のゑ人ゟ拾ひ乗せ帰らゝ孫廂のほとりまぐ推ゟゝく異口同音ホ
此上進ゞことゝ喚りゝくゟ員を撰地と扣おろゝく二階ホ立ろれ阿容ことゝ
ろゝく躊躇仕者なきとも二个所三个所疵を負ざる者なろろゝく。
玉梓ハ劇敵ひゝく婢ぞうホ扶ゟ上屏風の背ホ隠ゐ件敵軍と

ホ頭を擡ゐ。ゃ。ゟゐも面ぶせなる。大将の時の軍配ゟ郎方の進退一致せバ敵を
ゐゝゐいやゟゐる勇将ゟり猛卒ゟり。ろゐも大軍ゟりしゝバ敗ともせど一陣ゟ進ぬ猛将謀の上ホ大荒月の澁を重ゝ長一丈おちり
なる。綿ゟうゝくとうち揮ゝ馬の平頸ゟ引添ゝ眼玄睜り。大音揚群賊天
罰脱ま。白刃跃ゟ臨む共暁らぐ。虎威を犯ゟゝ愚なり。ろうぞや
里見義実朝臣。さゝホ遊歴ゐるひとゝ式州民推ゝ主君と仰ぎ。逆威矜ゐ
宛ゟ報ふそぶ事のみぞ。ゟ東條の城を按ゐ賊主定包を誅戮ゝ。
ゟ此潮田の城を按ゐ賊主定包を誅せんとゝく。孝吉先陣をうけ給り。
もん郷道ゟゐまろ。ゐまるゟこの隊の賊将を清塚岩熊とゝるゟ僻目欤。
きのふまぐれ古主ホ仕ゝく共ゟ神餘の禄玄給ゝ金碗八郎を忘れハせ己れハ

彼古主の為よ漢を佐く秦楚を討ち。張子房が孤忠よ倣ひて。里見の君よ
扈從(こせう)。義兵を勸めなり。敢刃(ぎじん)を辭らじて一城を抜き二郡を奪ひ。既にその
巢(す)を近つけさり非を悔く兜を脱ぎ御方(みかた)の為の八生人(いけどり)勲功(いさをし)を
向く唾死(つばきしに)淵よ臨く水練(すゐれん)亦如く。労(つかれ)ず・煩(わづら)はず
彼(かの)なん。いざ試(こころみ)よと呼(よば)りて馬よ拍(う)ち籠(こ)み。
く名一陣を突崩(つきくづ)く。大将清塚と槍を合(まじ)へ。人まねせじ戦ひが。孝吉大喝(おほごゑ)
一声(ひとこゑ)く。幾内が槍巻(やりまき)おとして。胸前(むなさき)よく丁と突衝(つきあて)て。馬より撞(つ)と落(おと)せば。雑
兵(ひやくしやう)克(よく)よりく。押(おさ)へ頸(くび)取(とり)くけり。清塚竟(つひ)よ討(うた)れなる。石熊
純平(すみへい)大(おほ)よ怒りて。四尺六寸の大刀振翳(ふりかざ)し。金硯(きんけん)を猿(ましら)の
馳(はせ)よとれば。二陣(にぢん)よ進む里見の老臣堀内蔵人(くらんど)貞利(さだとし)と名告(なのり)つ。柑糸(かうし)の甲(よろひ)み。
鍛取(きたへとり)る曽の緒(を)を縮連(しめつら)ね芦毛(あしげ)の太く逞(たくま)しき馬(むま)よ打乗(うちの)り。備前長刀(びぜんなぎなた)の鋩(きつさき)

さぶりの。昔蒲冠(むかしかばふり)なる弧矢(ゆみや)を挟(はさ)く。渠奴(かれやつ)を五呂侑(ごろゆう)よ教(をし)へ。のと金硯(きんけん)1人(ひとり)金釋
ちく。馬を曜(おど)ら仕(つかまつ)れと出(いだ)く。純平を遮留(さへぎりとど)め丁(てい)くそっと戦(たたかひ)ける刀尖(かたなさき)
より火を散(ちら)し。一上一下(いちじやういちげ)ら煉(ねり)の大刀風(おほかぜ)生(しやう)ずるまで。
ちゃん岩熊(いはくま)八馬の平頭砍(ひらあたまきり)落(おと)され主(あるじ)のろ共(とも)よ轉(まろ)ばれ負(ま)け長刀(なぎなた)とり延(の)く。
内堺(うちざかひ)を破(やぶ)と突(つき)あらや純平。斬(きら)れぬべくこそ見(み)ゆる刹那(せつな)某(それがし)名(な)る肩(かた)よ引
被(かつ)辛(からう)じく逃走(にげはし)るべ。敵(てき)の大将里見(さとみ)義実(よしざね)三才駒(さんさいこま)よ雲珠(うんじゅ)鞍置(くらおき)いく華
やか小(ちひ)さる威風凛然(いふうりんぜん)四下(よもさ)を掃(はら)く。馬上(ばじやう)よ槍(やり)を横(よこた)へ。
今(いま)よ後(のち)ふ勢潮(いきほひうしほ)の涌(わ)くが如(ごと)く。出(いで)と嘯(うそぶ)て攻(せめ)ふるとぞ。朗方(ほがらかた)八辟易(へきえき)して
脱弓(いぬけゆみ)を伏(ふ)大(おほ)くさなりぶ降(くだ)れ。と呼(よば)はる。純平(すみへい)よ猶(なほ)も懲(こ)りず。と生(いけ)捕(どり)ん
餘勢(よせい)深痍(ふかで)浅痍(あさで)を負(おひ)ぬもなく。やをく必死(ひつし)と脱(のが)れく逃(にげ)んとすれ。と生捕(いけどり)れ純
平面(へいめん)を俯(ふ)せ。めいんとそれども小髪(こがみ)の外(ほか)を劈(つんざ)き背(せなか)を馬(むま)よ敷(しき)ぬ。

ども攘ひ止めず日数ふるの冬の蜂痛くも螫れて
息だえ物の益もや立ざりけり定包は
里見ハ結城の方人と彼城没落をきゝ
郎と漂泊ふ大軍を起せしかどもあもひろ
城ふ。賊六郎ハ城兵をひきいれんとハ城兵ハ
ろぶ又彼金碗孝吉ハ神餘謄代近臣ハ
身の措どころなく潜びろ彼此なる愚民を惑し野武士を
集めさるぐ流言ふく英気を折く詭の計みぞあらんまろぶ
寄隊の擾大将ハ真の里見よりもあひ
勇臣ふる幾内ハ墓なく敗亡ぬ平深蔵を負ふ時運ハよろしからひ
なのがら倫理ひろ敵ゆゑあるひふ四門を堅く守ふ東條へ人を走ら

ゐて消息を問せんハ虚実ハ由がく
小窓後ホ走入り来ふ東條の落武者ホ逃ふりふ告ふ定包
ホ虚説ハあらざりけるこれその緯の顛をみづから
より余よせよとふくといそび立れハ
賊六郎ハ後ふ落ふ辛く脱まふる雑兵ホ三四人十王頭の肱當臑當腹巻
ぞろうのめりけるど餓鬼のごく疲労果ふ絃掛け引く足の一歩ふ
高く一歩ハ低く庭門よりよろめき死入る絃ハ定包近く召よせふくホをゐ物ども
東條と立ふらゐなび落城せざる先ホ主
寄せふ後ハ阿容ととくふまるとハ日の昔蒲十日の菊その絵絶ふくある
べしやハかまびくも絃度ふるまと睨者まびホそろく四人斉一ふろ
ふの絃なふくホ理ふのーとハやひまふ絃ど鐸只呼吸乃間ゐ起ふろく落城

ゑゝくひへが告ける隙いかぞ。その故ぃ如此こゝろの箇様とみひと小湊なる村長ら。ゑゝ赤が金碗八郎式縛ゐく深夜ゐ城戸を開せる計策の為体透もあらせぢと敵の大軍どよめくと迫ゐりて矢庭ゐ城を落せる。妻も酷六ゐ妻子をゐて笛の内より落ゆく刕式金碗八郎ゐ追蒐らまゝく妻子ゐ谷へ滾落。皮骨砕けて死せる。妻毛ゐ金碗ゐ輙れる縛の麹季細ゐ演説ゐ某ホこある式片時も。ゑゝ生捕ませうんとやうざろふいうけど城兵過半降参ゝく敵ゐ手ゐ勢甘ぬ街道式麦ゐとゐゐ追撃れんと疑ひうゝとやゝば經ゐ遠り入り。山越をゝくゐゐ敵より浅ゐ来つるとゝくもん咎を蒙りと見非ゐ及ぎひと勸鮮ゐび定包歯を切り。原来金碗八郎が結城の落入を引入ゐて縛みる彼奴が計アゝへいでやゐづら馬乗生ゝくゐづ金碗奴を生物らぎゐ熟ゝ死腸を冷ゝゝあゝんや。ゑゝ出陣の准備をせよと跳揚ゝく敦圍ゐ老軍ホへよゝ。

ゐのやと呼ゐ。東條の落武者ゐ目と注ゝく。貝山右熊弥平を擯斥ゝ。食ゐろ共ゐ退ゐゝを定包ゐうゐ。人そゝどいゐびひろゐれがつゝくゝどゐ。要ゐそあれと刕とり点ゐ老堂を近習を召ようゝく竜城の准備見彼と。おちもなく視示ゝ義実大軍ゐりといふとも原是烏合の集り勢けゐり十日を俟ぎゝく兵粮竭ゝ退死ちん。そのとき死急ゐ追撃ゐば金碗ホそいゐを。さゝろのり大将義実我擒ゐせんと。まろあんさゝゐ。麻呂妄西ホ義実ゐ一致ゝくゐ。顧ゐゐ麻呂小五郎八逸夫の勇士縛る刕足ゝぎゐろ憎ゐ八妄西のゝ思慮あるよゝ我豫ゝくゐりゝく猜引箇様ゝみゝゝ。東條をとり復さが義実一旦逃走るとも何処へ遯るべ死進退そゝる究まて。

雜人(ざふにん)們(ら)がはやりをり死(し)ぬる敵(てき)この処(ところ)より生(いき)ざる間(ま)に件(くだん)の使者(ししや)を出(いだ)し一生(いつしやう)懸命(けんめい)誰(たれ)か今(いま)
よ寄(よ)手(て)が為(ため)に館山平館(たてやまひらやかた)へ使(つかひ)をやりて死(し)と吾(われ)と
わめき声(こゑ)を揚(あげ)てく進(すゝ)み出(いで)願(ねが)はくは某(それがし)に討(うた)れよといふべし定包(さだかね)大(おほ)きに歓(よろこ)び没(ぼつ)
幾内(いくうち)純平(すみひら)ホ勿(なか)くまで寄手(よせて)がよろこび武者(むしや)
館山平館(たてやまひらやかた)へせ給(たま)ふ景連(かげつら)ホよべ定包(さだかね)古主(こしゅ)の逆績(ぎやくせき)を収(をさ)めて新(あら)ホ二郡(にぐん)を
領(りやう)せ給(たま)ふ結城(ゆふき)の落人(おちうど)里見義実(さとみよしざね)當四(とうし)へ漂泊(ひようはく)して愚民(ぐみん)を惑(まど)し野武者(のぶし)を集(あつ)め
不意(ふい)に起(おこ)りて東條(とうでう)の城(しろ)を乗取(のりとり)勢(いきほ)ひに乗(の)りて鬼(き)
卓(たく)をまでく孤鬼(こき)ふこれ。その禍遠(わざはひとほ)からぬ事(こと)なり。定包(さだかね)不心得(ふこゝろえ)
とも正(まさ)く神餘(かみあまり)の逆領(ぎやくりやう)受(う)けこそ舊好(きうかう)ハその家(いへ)ホあり両君(りやうくん)いかで郡(こほり)の
兵役(へいえき)救(すく)ひ給(たま)へんや速(すみや)ホ出陣(しゆつぢん)して東條(とうでう)を攻(せめ)よと檄(げき)の
旨(むね)に従(したが)ひ共(とも)に敵(てき)を攻(せめ)ば定包(さだかね)ハ必(かなら)ず滅(ほろ)びん。三面六臂(さんめんろくひ)の義実(よしざね)ホ
あらじ虚言(きよげん)ゆせられんな。絶(たえ)て疑(うたがひ)ひ給(たま)ふな。死(し)ぬる敵(てき)の処(ところ)より
賜(たまは)り。定包(さだかね)ハ平郡(へいぐん)一郡(いちぐん)。滝田(たきた)一城(いちじやう)ホくる事(こと)足(た)らん誰(たれ)ホもまして世(よ)
攻(せめ)とらふ人(ひと)ハ長狭郡(ながさぐん)を進(すゝ)らせんと叮嚀(ていねい)ホ演(のべ)よ。とふべし戸五郎(とごらう)
面(おもて)を贈(おく)け。御旅(ごりよ)でハ候(さふら)へども。よりや里見(さとみ)ハ滅(ほろ)びても長狭郡(ながさぐん)ハ取(とら)せそ。
みづから呼領(よびえり)を削(そぎ)ぐ。外(ほか)の援(たすけ)ハ遇(あ)むもよりも賢慮(けんりよ)をめぐらしのハ
ざハ後悔(こうくわい)やいん。と老覚(おいおぼえ)たる練(ねり)れハ定包(さだかね)のあくどうち微笑(ほゝゑ)を
泛(うか)めもろ欲(ほつ)ふ計略(けいりやく)ホ鵜蜂持(うばちもち)くく換者(かへもの)ホ獲(え)らん長狭
一郡(いちぐん)我餌(わがえ)ホくく安西麻呂(あんさいまろ)ホ東條(とうでう)ホ
滅(ほろぼ)さん景連信時(かげつらのぶとき)利(り)ホ迷(まよ)ひ確執(かくしつ)ホ及(およ)ぶべし。件(くだん)の両将(りやうしやう)彼地(かのち)を争(あらそ)ひ合戦(かつせん)
あらくなるとき一方(いつぱう)ハ傷(きづつ)き一方(いつぱう)ハ則(すなは)ちその虚(きよ)ホ乗(じやう)
じてく。安房(あは)朝夷(あさひな)の二郡(にぐん)我取(わがとら)らん當四(とうし)ホ平均(へいきん)居(きよ)なんぐらゐ

四郡武揆ぶ愉をとゝのふべや。と誇負ふ祝喩せば戸五郎只管感佩ーく定包が
書簡をとり。身軽く徒ち駿馬ゐ鞭うち館山を投く馳去り。さる祖ゐ里
見の大軍結旦未明より。瀧田の城をとり巻く息も吻せず攻まども要害
固より堅固る。神餘数代の名城る。まして一朝ゐーく落べうもあらざ昏
夜をこゝぞ攻ると既ゐ三日ゐ及へども城兵ハ勢ひて生ず寄もさゝざゐ
疲労ーぶ只遠攻めぞきりける。浩然ゐ武者一騎暮ゐる日とのろ
ともゐ西の城戸より入くんとく溝端さしく馬をよきれば堀内負ゐ佶と
ふく。渠奴ハ必定城より出て。麻呂妄西ゐ接戦をひ今立ゐるとおぼえり。
彼生拘ると鳴るゐ早雄の若武者ゐうけもろ。と意あくぶ先ゐと追蒐ると。
城中よりもれとゐて妻立と競ひもとそ西城戸を推開ぶ戸五郎ハ衝と馬を
入とく。そゞ俄橋を引ーぶ寡ゐハ将場の倫立も弐追失ひーおちーん。

はけ入るゐもゐの後ゐいく焦燥く引ーく。
名ゐさせく負ゐホ宮ふゆ。怒ゐ無ーく
とゐの一件の武者を生拘りく。縁由を蘭向ー。さそゞ首を刎とりとゐ妄西
麻呂ホ相譚きく。ゴゞ後弐襲んゐハ城ハいゐく落べうぶ渚方の攻口合
期ーく後ゐ備前弐勢。常山長蛇の勢力を張るゐハ絶くゐまとゐふと叮
嚀ゐ祝喩ー。麻呂妄西ホ弐卿げとく。脆ゐく五百の軍兵を引ゐけく。堀内
負ゐ弐後陣ゐ招さ世更ゐ東條へ人弐遣ーて杉倉氏元ゐ云云のよ弐告音
城由おとべうぶとそくそのとろ弐ゐるさ世のひつ金硯孝吉めろとゐホ実実
みゞうゞ郷を遣りて短兵急ゐ攻ゐあゐまーゐホ定包ハ妻立戸五郎が悉なく
推拭ひさゝゐ景連信時一後ゐ及ゐぶと領諾ーくりひ弐又彼里見主後ハその

妻立五郎
瀧田の城攻の
負軍ホ
妻立
戸五郎を追ホ

金まり八郎
堀内貞行

そ。館山なる安西を大きなる威さまして逃吠あるる
白徒いふかひなく日なごめ大軍を起しゝん。さるにても
信時の娼一と疑ひうくいと報知まう定包やもく
猶び戸五郎を召ひく物黙被させおまし。
平館より援まつる残候てをり。かくく日未猶る隨ま寄ひ既ま兵粮竭くく。
三日の貯糠ろくなりしかば負彩孝吉これを患ひく武実ふおうしをう。既ま
出陣ましくく。七八日を経されたりぞ東條より兵粮残なおうせぞ。ゐふた
杉倉氏元ハ老功の兵うまとども。彼処を新ま獲る城へ民催促小後ハで物
そのへぎやひん。時ハ今麥秋ゐく。彼腐せ遠山畑うる麥ま老熟しくいふ。
刈とせいがやとのくべ武実ハ残揮り。否ゐぞ瀧田を攻ん。
城んぬ彩ふ残今その農を奪ひその生麥を掠とりく兵粮とうんく。

人を食ふく身を肥を虎狼ま笑ーいうどもの加以長挨の豊民催促ま後
ろく。彼処ま兵粮そのうぞへ見ゐ徳の至らぬところ速ま退陣しく。徳定
備め民を挨時残待く瀧田を攻んさいあふどや。と宣へ負彩要時残残
頽け。仁心ふくまでゐ民を情をふてそふふ
有くるのゐひさられ今とのまゐふ。ゐ攻めるだく岩ま
ろ。そうぎ出難武ま及びかん。今宵舶火の数残おーく。
真夜中過く後陣ゐ軍兵を退せ樹立隙ゐ死処ま伏兵をゐ置君中
ぞ
軍ふをうーまー。某厥つまふゐ縦城より追撃く喫留んとされべとく
うぞふゐ欲ひべ死とのう残孝吉ぞのへ杉倉生の計策可あるうさるふ
あらざ豆ともさぞハ兵ゐを衛り。敵残御
とゐ死ハ三四百の壮士ホま計器を授け。麻呂安西ホが旗をめく

指物仏立印まぐ〳〵皆その模様よ打捨〳〵黄昏る比及よ我本陣の西北を
過つゝく城よ入ゝくとゝろと死ぶ士つゝ
撃を去くこゝん中へ城中よりこゝ互戒見くゝを八舘山平舘より援の兵多屯そ
彼勢ゝるみと城戸推ゝゝ死ゝくめの機兵ゐ力を裂〳〵城へ入ゝんとせぐやハ
止ん。そのと死件の軍兵を先ゐ立〳〵く我三軍ゐひの隨ゐつけ入ゝまぐ
一挙〳〵く城を落さん約ぐへいつぐゐへ死〳〵のと正首ゐ謀ゝうせぐ義実
つゝくとうち出のく負約ゐ我よ益ゐく孝吉ぐ策ハ巧
ゐるとゝも甚危〳〵。ありのよいゐ人の聖王賢将二義の軍戒起さめうゝ統
つゝ戒のゝ〳〵提ゝをゝろゝゝど唐山晋の丈公ハ統計戒用ぐ〳〵く五伯の一と
稱せゝゝ〳〵く周室を佐ゝり。孫呉ぐ兵法統道を旨とゝゝ戦陣の習俗へ
策ようとのとゝも詭をりく敵と威〳〵その土地をたゝゝゝ何ぶりて民ゝ

教化波達の策後ゐゝゝゝとの故ゐり定包富饒の地を有ち要害の城よ
竜り且三年の糧ありとも防衛ゐの術尋常ゐ兵ゐ落〳〵ゝにといふゆ〳〵も
あゝ私ど一時よ城を乗取ゝゐ罪なき死民をヨのく殺さん暴よ去ぐゝゝひ
つるぞく定包ゐ後よゐ皆免悪の人のゝなゝんや捨ゐ歸ゐ威ゐおそ〳〵
一旦城よ竜るとも。その楽を共ゐ〳〵せぐ竟よ憂を共ゐ〳〵く命を其ゐ
損〳〵るのぐいと痛〳〵死るゐゐん。秦ゐ
いつぐさゝん〳〵秦の降卒八万人戒坑よせ〳〵項羽ぐ死ゐ暴
殺をのヨの死故へ我人呼ゐ定包のゝ
餘のゝゝゐ漢ゝゐ話ぎと。丁嚀ゐ説諭〳〵ゐ負約も孝吉と只憶と
ざゝり感伏〳〵く又いゝとなゝゝ去ぐゝゝて件の両人やゝゝも
噴息〳〵賢慮ん智の外よ出く。昔の聖王賢将もこのうえやゐべ死。ゐハ

あまたで時既に殘季よ及びぐく利よ饗よめの其裏く徳みよるもの究くく
富豪〳〵君が慈愛淺うそ敵城ホ備まる民まぐく助よ居のくく田心召とも。
勢ひ而ぐく全うぐ兵粮既よ竭るぐく城を乗取と成
要せと又詭計く退くと残肯ぐ仇船方の千
餘人餓渇よ迫ぬ拠を離さ矯んさなとそ
べ死宋襄の仁微生が信八日来笑せのくるぐや。姑且賢慮をめぐらしぐ。
ろるべうんとうう。ぬぞ甚実苦元介とうち笑そて兵粮え〳〵なりゆる
よ〳〵ぬもまた〳〵ぬ患ざうんや却をやくぐ空のく欲彼此とうく瞻望れへ。
東南のくこなる豆畑よ餉黙求食あり。彼何ぬより聚ふとうれぐ瀧田の
城より旦ホ来くタホなるぐ還るし旅八源家の氏の神八幡宮乃使者
とぞいのうるぬよりそ不意此二の物を獲とりぐ則神ホ祈りく。

上候ぐのホうろ約さーく編ホ雖ーく件の鳩五六十を捕とりかて数通の
返文を書写め件の鳩の足よ結びく放さぐかうぐ城へ還ぬんさると先ぐ
人怪ふく旅をとうくその書をとらべーうや捕なとうのくた結目解て
ろるものあらん城中よあるとうるめさの撥文を披閲て逆戎去順よ帰せ。
おろ起らぐ変を生ぐく城八攻ぎも必破ぬん縛り成らぐ四の仇賊主定
包とのこ殊ーく民の望を果ぐべー城兵豫ふ定包よ後ふこうろな死ぬの母
おうくふあうろくホ裸はうまんと陥そ仇の為ホ城を守る欲ぬを
又不便なり城よ小児の智よ和とく果敢なる紀謀よ似ふ玄ーどぬ是裏よ
此方へ来ぬるとう元待崎のほとりなる白旗の神よ祈ぐべ山旅の祥瑞ホあるよ
今又おうホ詭の裾あうべと祈るのこ成るうざ原八神ホまろーくホ如此ーく
ろよと仰ぐべ負約孝吉ホするく甘ぐ
微ぬ裸よせぬひみけぬと今定

包が罪狀数へ〻城中へ示さんあへて
その書を開せば憤激〻〻乱を生じ賊首の頭を献らん速よ列ひなへと
辞齊一應まうしつ。金碗孝吉奉ずる〻草案を綴る筆ふるひ出ざる
牢を繋合〻。数十通既写させもの〻立地に写一冊ごとにその日いまゞ
暮さりけるかく〻実主後八香を焼神酒を注ぎ〻白旗乃祠を遥
拝し豫て捕おせもの。数十羽の鴿の足ふ彼機丈を結著〻そがやくみ
放べく紫ふ違ず翩こと飛揚つゝうちつゞ立〻みる城中へかへりけり。
昭七くも結ばぬ状なるべ鴿ハ城中へ入ると安ぐ〻おのづゝ結目のとけざるを
なるほ〻珠更不思議なりけるハ此度軍役ふ驅入〻る一平郡の荘客
們が小屋のほとりへ初而遣へず落ほ〻ぐべ云什麼何ごと疑惑〻裏ゟ
拾ひとり〻遠〻く推開けん

流水不附于高良民不從逆若夫佐槃討兇
猶水而附高也謂之恃於天雖欲久勢不可得
抑賊主定包者好詐以什主蠱毒以虐民雖云
王葬禄山又何加焉茶以吾
日未幾見推于衆而討逆
成湯澤似周武於是乎取東條畧二郡將破其
巢也可憐沒衆人隕命於賊巢因以喻示于此
矣不速歸順矣不功以償罪區〻取惑雖悔豈
焉哉天鑒不悞王事無豔恭奉　台命以喻示
嘉吉元年辛酉夏五月
金碗八郎孝吉等奉
とぞ書さりける。軍民ホこゑ歓〻〻貢欵びくいつをけるハ彼時曹司ゟ

仁君なり。曽刃を鮮らざるに。東條の城を落し。今又安房吾妻を憐み。
ふとかくのめし。浮名をかゞやかす。慕しく。忍ばるゝあらねどもうさ
てや城ゝ駈入らまうく。十重北重を囲きて入べしとも。ゆるさゞるべし。
城溝を越彼処へ赴むとするとも。今さら赦さゞるべし。とへ赦すにせよ
黙止さり。所詮寄手の内應せんとて。陣を窺ひ日を過さゞ縛竟を獲て
頭を見参の座へ出物か進とせるべし。一ッゆへ手来の寇を其処へ返すべく
揚ゝ寄手を誘ひ綽の紛きる乱を入りて。人喚馬を殺し。素
彼処へ赴むとするぞ。盧ゝせられなん速ゝ忍ひ起ゝく。本城へ火を放煙を
一ッゆへ里見の君の御感の八ッ手かさせのんさんとて。家鵞か翼合つゝ。愛
誤まや一吠するわうゝ戎ゝ又陥ゝく。第一の出張人なる。清塚幾内も
討死ぞとれと彼当岩熊純平ハ手痛大うゝ平愈ゝく。二の城戸を護陪
かる。先君神餘世さりなりとて。渠ハ馬奴なるものかまでのろ悍く。
ちゝうゝ。膂力強うり。定包二郡を押領せ後漸ゝ厚用せうまゝく。民の膏を絞
とも。奸智ハ主ゝ異うらぎ又彼妻立戸五郎ハ総角の比よりゝく定包か
使ゝく。随一の近習ゝり。武術才藝人ゝ勝まさく。今るゝ主のそとりを去
らざるこの二人我ゝそゝぐの本城か乱ゝ入るとも。彼ハ固よりその
黨ゝうり。忽地遮留られゝく。ゐ遂ゝられなん。この後いかゞと
密語ハ皆有理。とまどひく。さとび件の両人を駈とゝく。その翼を除去。
忍ひの随ゝる働きせよとゝく。その部伍ぞそうける。その次の日妻立戸五郎ハ
彼檄文を拾ひとりて。続も疑らざるべし。岩熊純
平か本処へ赴処固様ゝこのよしをあまねく速ゝ告あげて。荘客们を搦捕。
その禍を未然ゝ避おゝせ。ゝとゝれ大事ハ及ぶべし。ゝとゝれ人と懐ようゝ一

通成とり出ー推ふろげて閲が純平へよこ
ぶん　ひろ　え　文を拾ひ終ふく驚たるふ呼べ廻てみ。
ふぶ　違ふとたゝりしふ戸五郎ふうぎとよ
やん　野心のあふべこの城ろぐ保ぐてー。ふ忽ふまべうもあふぐ誘ふ
ろう共ふ告をふんとひあくぎ。立んとまる袂を引と先妻立生且く
まま　俊ふうるさまるあり。と理るく禁ふ。備ふ推居四下をふるふ人へ
なゝれと。咏む小るみ異ろふぎ。右をえふりて扇を口ふ推當て。
耳遽ふ願さー著ふとこの密書を終ふりより。彼此ふうろを著るふ
只管寄ふ成渇望ー。ふの城を献らん。とふざるめの口ふ終ふれと
和殿のこ。さ居ふより。ふと。と和殿を撃とりふ。衆人事を起さんとて。
衆縦すや一決。ちぐりとを觸ふある人密語ぬ大厦の覆ふんとまる

とふふ。一木いそうとふ成。荘人勉ふ終ふ
ろう　朽をーたるろうぎや。速ふろひ決めろ
さささ　里見ぬーふ降系せふ衆人の怨成釋て。死を脱るのこふぐ勧賞ふひ
のまくめーふく栄を子孫ふ侍ちん。和殿の四月中いふぞや。と向ふて戸五郎
呆果。ごの行のぞ物ふや狂ふ和殿が神餘ふ仕ーとふふ償ふ馬の口取ふりり。
ー成吾君ふり用ひふひふく。光弘ぬしー清塚菱毛ふろたふ
ぶト　大事を任ーふふろぐや。吾侍ふ四主定包の私率たる神餘が老堂ぐ
をろせーとふより。不便のふのふせさふ労ふひふ恩成擔ふ恩をふりふぎ。
こふてふ報ふふ他をのせが何ふより人といろまん命を惜む男も
なく。主ふ殺ふが大逆ろり。今一言ふーそふよ。その席成去せ。と敦圍ろぐろ
小勝突立刀の鞘ふふ成かくふふ些も驚ぎ冷笑ひ忠義を主ふよふ

ものぞ嗚呼なる玉ぬいとものぐさ今定包を
救逆といふべくもあらざるや定包もまた
平。兄垢三ホがる玉借さ。主君を殺せ一緒の
志もその日ハ朝景り。夏の日寒ク落羽が岡
の弘の乗るひ一。鶴毛の馬驚きて定包ハつゐに
もん乗替を俟んとて。その刃ハ其処より引さがりて
三ハ彼白馬を遥ゐ視て。定包まつとそひしが矢比近くなるまゝふよろ引
漂と並ぶる箭ゐ光弘朝臣ハ脅を射さ一。馬より撞と落るその前の日ホ
定包ハ吾倩を籠ホ招死よ世如此ゝその密謀ある汝ゐまゐ荷擔きて翌
将倉の朝立ゐ囲主の乗馬ゐ毒を餌へ事成ると死ハ軍く用ひんとハロ当
座の賞錬とて。物数とらせたりとゐふある事ハ。

奴謀勢ひ敵さぞうのおくゐど否とのぐ殺さまこなん命ゐ換るものなり
一張ゐ及ぎ兼引て。その日馬をハ驚一て
とうせ一ゝこの徳ゝこの恨ゐ報んとて。今老嘗の後ゐそうせよりや大事を
仕るとも絶て恩とハいふべくもあらざれこれらの弘ゐある毛清塚両人
ゐ生死楽ホハ泉下の人とぞなりぬ今でハ和殿のゝなりぬべしか旃妻立生和
殿ハ月ごろ日来よう夫人ゐ懸想一て暨ぬ恋ゐ物をそふと云れ豫て
猜一ゝう。ちゝぶたゐ一ゝ人唆馬を殺と死ハ賞ふえても玉
梓を妻ホせんと易かりなん。かその吾倩ゐ與せばや。と飽まで説ゝて
戸五郎ハ動く心とゝもたホ又死るひを釈く。忽地小膝を磯と敲ゐて
歹寝ゐちゝえ逆賊ゐ後ひ一刃の汚穢を洗んゐ小理を捐て大義を伸る。
和殿の様ホて後ゐべけれ速ホ一ゐ純平

大笑よ歎びて。さらばこそせん。ろせんとて。送よ耳弖そりくへ。遠しげよ
相譚そり。このとき死山下定包ハ宿酒いまだ醒さとて。後堂を出ざりき。女の
童のミ左右ゟ果ゟせ翠簾を半捲揚るのみ柱よ身を倚て愚そり
徒然よ尺八の笛吹をきゝ。又餘念ハなかりけり。浩然ゟ山岩熊純平ハ
妻立戸五郎を先よ立てく事ありくと叫びく間毎の障子開放ち主の
ほとりへ居る狩よさうらを絡る鞘兵数十人勿輕く躍ふて器械引提此
後れて次の房なる。いろくの衣る画なる。腰障子の陰よ躲きて。おのく
奥を窺窺そり。定包ハ純平ゟが忙しく来る弓弦。尺八の音をとゞめこゝ
何ぞと問せもあへず。両人肩一声をふり立積悪の家餘殃あり。城中の
民みな叛死く。穿る弓引入れ。ハ城踵を旋べうびん眼をめぐれ
ハ吾倩妓借住うん。といひも終らず。先ゟ進ミ戸五郎ハ刀を晃ア
引抜く跳掛く砍著る弓推倒もとゞめと尺八の笛のく丁と受留れハ笛ハ中
ようなをゟ砍られて。頭ハ過よ飛散さり。戸五郎ハ忽ちも一の大刀を撃
損じ主とおくび心憶そ武者戦そく進ミ込ぎ定包瞪る眼尻ふ立原未汝
ゟ謀叛を企ずをゑんとそく落るよう。呼嗚乎ぬまやと敦圍さく立んとされば
戸五郎純平透間もなく撃ゟ刀の下をくり脱受るの(ゞ)切口尖る尺八をゟ飛
の穂ひと内せとも。刃ゟす鉄を帯ざれハ疵もさらく朽笛竹の銑現よ戸
五郎ハ右の腕をうち脱き忽地苦と叫びあへず刀を撲地と落しん。尻居ゟ
揺と倒ミてくび定包ゟう。と走掛く件の刀を取んとさまでハ後ゟ内く純平ゟ
刀尖さりゟ撃大刀ゟ腮よ七九命をとゞめ。
眼なく又撃かくる純平ゟ刀の弱えうち落しそゟ倭より下よ
り。且く挑ミ争ふめうち定包ハ添瘢を負ぬ勢ひ既よ衰へく竟ゟ膝下ゟ

岩熊ごん平

妻立戸五郎

ごんぺいとごろう
祝平が五郎
こざるき
便宜に
さだまる
定包を撃つ

山下定々

組布巾を引ゐ人を咬立まゐ純平ハ頸我ゆゝんと腰を捻る中刀さへ振落
さゝ後方ゐあり。いくゐせまゐと心劇さ。そハざるえゝる雌ゐの方ゐ倒さゝ
妻立戸五郎が。打うけらまゝる笛竹を。こま究竟と接とりつ友ゝさんとひゝる
定包が吭をゝさとつらぬゐぬ戸五郎ハ竹を抜れゝ忽地ゐ人乳つ死岸破と
起つこま我えゝ落せゝ刀を拾とりゝく岩熊ゐ遮与せゝゞ純平ハ定包が頸
うゐ切てぞ立あゝるさまゞ黠の兵士ハ純平ゐ荷擔まゝく次の間まぞ来ゐ
ゝまとどるゐその勝負を測うゆゝく。逃ゝゝくこま我扶けど既ゐゝゝく定包が整
る紙えゝく遽ゝく障子紙門紙うち敲ゝく開の声をぞ揚うけるさる程よ
主の左右ゐ侍りゝる。女の童ゐハおそまゞ迷ひゝく庭門より走ゐ去これ彼ゐ
告ゆけまゞハ。縛果る比近臣ゐ遠侍よりゐ況ゝく抱の黠るうゐぬ女房ゐハ只泣叫ゞ我純平
生ゞゝく又その家臣ゐ殺されうゝ。加以そゞ首を取るゝと我件の岩熊
純平ゐハそゝゞも刀を用せゞ七日米り笛竹ゐ曼竹繪の刑ゐ倣こま又
彼妻立戸五郎ハ定包が恩顧のめゝ其も笛竹の洗現ゐ驚れて一旦息
絶ゐ悪人なりとも主を殺つ冥罰るゝん。おそるゞゝ就中純平ゐその罪
比んめゐあゝまゞ神餘が馬奴さうゝと我逆謀と去りつゝも定包ゞ為ゐ
主の乗馬を毒殺ゝ又定包ゐ仕てゐまゝくその悪我佐ゝ剰をさゝゝ
民を苦め悪報その身ゐ係るゐ及びゝく脱まんとゝく又主を殺つ猴皆
人ゐ與をとゐよとも。ゆくのごくゐよそ後栄んや。むゝゝ後漢の光武帝ハ

子密をりく不義侯と世り。夫不義のふぎ
匹夫ホ終るとそよけき。他者同常歴史軍紀を読む毎よ。
大息ス世ざるとほりく今ホ自注を附しく。童蒙ホ示さのそ。
山下定包ぐるホ軍書舊紀よりあり。詳ろびとい。主の神餘を害
ひ。癖者るよいたぐらび今るほ彼れよ古蹟ありくくれがくも
紀さび又後この巻みくらいなん。

第六回　倉廩を開たく義実二郡を賑ひ　君命を奉ずく孝吉三賊を誅を

却説滝田の軍民ホいちぐ純平ホを報ぜんとく。二の城戸陝しと告寄せて。
閧を咄と揚しが忽ひがけなく塀の内より。穂の穂頭ホ串ぜる。生頭をとるく
袍華ゆホ軍兵殿前後よ立しく。両人床几ホ尻を掛軍團把くさく拒けば。
軍民ホ呆れ惑ひく。件の頭を向上座よ。こ紛ふべうもあらね定包が首
級なり。原来純平戸五郎ホ脱るべ死途なを知ずく。さや定包を報
たるよらん。憎しとおぼ今又よ同士報さとるホよ。うのをよ已と我ぬぎ
その今よ在ひ城楼よ降参の幡を建く。正門を推ひらび純平戸五郎ホを
先よ立しく。雄く岸ゆ我迎えび。里見の先鋒金破八郎緯の仔細をうく
告ぐ。定包が首級を受とり。軍法なをび純平ホが腰刀さへ取おりしく。
大将よ報知ををび。義実ハ諸軍を進めく。さや。その跡へ近つ死のへべ。純
平ホハ阿容さと沙石よ既我掘埋めく。こをこ我迎えり。城平ホもや二行よ

つゝみなく。負方歳と唱ふる。且ゝ後陣なる負行もまたけまこゞ前駈後後の隊伍を整へ大将徐ゝ城ゝ入ゝ。隈なく巡歴ーもへば。神餘がみまそゝりし時ふり。只管驕奢ゝ耽ーくゞ弁麗壮観玉を敷金を延べといふとそみー。加ふ。定包又民を絞ゝ。飽まぐく貪財ふ米穀財宝倉廩ゝ充ゝ。佛公が阿房ゝ入りしと死。幕下ゞ泰衡を討ー日も。かくやとおりふだらまえ。さるまけまこども美実ハ一毫も犯をゝなく。倉廩充ふるく両都を平館ゝ山ゆへ。麻呂安西の強敵あるまこと。百姓ホよ頻與ゞ負ゝホこれ死練ゝ。定包殊伏ちゝまこと。なる。百姓ホよ頻與ゞ負ゝホこれ死練ゝ。定包殊伏ちゝまこと。なのまー式一毫も貯ゞ百姓だうよ賜まる。賢慮つゝくゝろるゝこと。と眉うち聲てやろーゆゞ美実ゞのくうち点ゞちろゝの眼前の理ホ。彼ゝまこども。民ハこれ國の基ちり。長快平郡ノ百姓ホ年来悪政ゞ苦そ。

今逆賊去順ゞ帰せへ。飢寒を脱れんゝ。ゞ歓ゝ式ゝまこと。民を賑ゞそハ定包ホよ異なるまこと。まそなるまゝゞ孰とも歌を徳ん民ハこれ國の基え。民の富るハゝゞ富む。徳政空ーかゝりせゞ事あると死よ軍用ハ求ゞも集ゞべー。惜むところゝと宜ゝゞ負ゝホハ実ゞもいろゞ感涙坐ゞ禁ゝてあれまゝを退出ふり。却説次の日民実ハ正願よ出まーくゞ首実検とをふり。降人純平戸五郎ホを召よせら。主を殺ゝまこと。斉一ちふゞ。定包ハ主を仆ー。土地を奪る逆賊ふるまこども。某ホ討とかゝるまゞ。倨よそのまゞ属ふろハ窮よ時運式ちゝ。あえ。ちふれべきのハ賢君の御教書をゞふるく。栞を去湯ゞ帰く見参の牽出物よ彼首級を齎ーくふり。とほとふゝゞ陳をまゞ。金碗八郎冷笑ひ辞巧よまうせども。そハをゝーき

虚言なり。抑汝ホ両人ハ定包が悪状佐ク刈民を虐ぐる緯既ク隠ミちゃ。さ
ばよ玉軍民ホ。まづ汝ホを縛ん。とそその徒状繋る程ホ汝ホ冥ど偽ぬて
み。ろ。のれ。ろ。さぶろ。ろ。
身の咎を脱んゐよさて定包を縛ゃ。孝吉仰状業つまく城中の
民ホ向。その頸をなやおまり。かゆまけミども陳ざるや。といふ玉ク両人
驚ど性中ホ純平眼状睥玉。そハ戸五郎ぐるゐあるべ。渠ハ總角の比より
ちく。定包よ仕ーぐ。第一の出所えゐ。ぶ。ぢ。ぶ。
思ひ状運ー。密妻状果んゐのそ某よ荷擔ーく。初大刀を執よくゆひー。
某底意を猜せーぐ。身の潔白を明んとそ。彼玉梓と生拘ら生押篭置く
ゆくゐ召せゐぐ。分明ろうん。とまゆ
いろせもあるびと戸五郎ハ眄えーく声をあゆ立八郎ゃー。此奴ぐ辞を
まことのとろ状ひそ某いくぐ玉梓よ。情ありく主を縛も。ん朗方。ろ

ろうん。純平ハ當初神餘が馬の口附え落羽が岡の狩倉よ定包ゐ相諢れて
主の乗馬ホ毒を餌ひ光弘ぬー状亡ひ。定包二郎を奪ふホ及びて第一の
出所ゐなりぐ。民の怨も大くなりくそその咎を脱んゐよ二代の主を殺ころ
なり。欺ミゐふな。と苦状随よ非状あげく人を陥ふ。罪状ゐまを争ひ
果ーろうしぐゐ八郎咿ことち笑ひ向ゆハちで語ミよ落る汝ホが好悪ハ
生をかえ世状かゐるとも頸状続べ死ようちのそ定包逆賊えとのふた。
戸五郎ハその家臣とうく。脱るく途のろきゐふこと状報ひと人よあまご純
平ハ又當初定包が為よ主を傷ひ。その蔭よ立ちぐう。緯遍て亦これを殺ひ
悪逆ゐうよ極れり。吾君民の父母とーく仁慈状上日とーゐふたりー汝ホ
叛ーゐぐ。賞罰遂よ行ミべ。忠孝なぐく廃ミちん今汝ホがまうよ状縛ゐ
隠ミ憑露顕ちくミども。その口づからいろせんとく法場よ牽出せう。罪藉既よ

定まる律ㇵ干ㇰ赦ーぐ已彼縛めと喚ま
撲地と蹴倒し押て素戔嗚ー乀件の二人も劇騒ぎ
給つ。只涙ことゐ死口覗べ金碗怒ま
天四訓ハ八劇の刑さるべーとそ。といそがせ
人成外面へ牽のくゐ死時を移さびそ
梓ハ姿の花もとゝう。夜半の嵐ㇵ吹萎れ天羅脱れ
凡や。何とある子の音ㇵ驟ぐ。崔ㇲ」時る
らまろ。豫て知る孝吉よ愧ひー。要時も
ぬるけー小膳紙をろ。王梓汝ハ前囚主の側室
縛つて主君を湯し政道ㇵさへも絞うけー。忠臣を傷賊る。その罪と

ㇵとゝそ。身ハ口ハ綾羅ㇵ纏ひー。玉を炊ん
ㇵ嘯らー。定包と密通せり。その罪こそ二ッ
吉ㇵ殺ㇲとふなん。かゝー。山下定包ㇵ逆謀既ㇾ
汝ハその婦妻とるまて愧るこなく。憚る
造悪の業報なり。生て八繰縄ㇾ繋ま死
囚罰ひるや。と声ㇲ叱されバ王梓ㇵやく
かゞー。女ハよろづあやーくー。三界ㇾ家
百年の苦も楽も他人によるといふごや。況
先弘なくゐまひてハよるべなき身を生
再寝の夢を結びあへど。因ま過世の因果ㇾあらんだとうん又
給事のたびめーう。私ㇾまろりごちー。忠臣を傷ㇲる。山下ぬーㇵ情由あるま

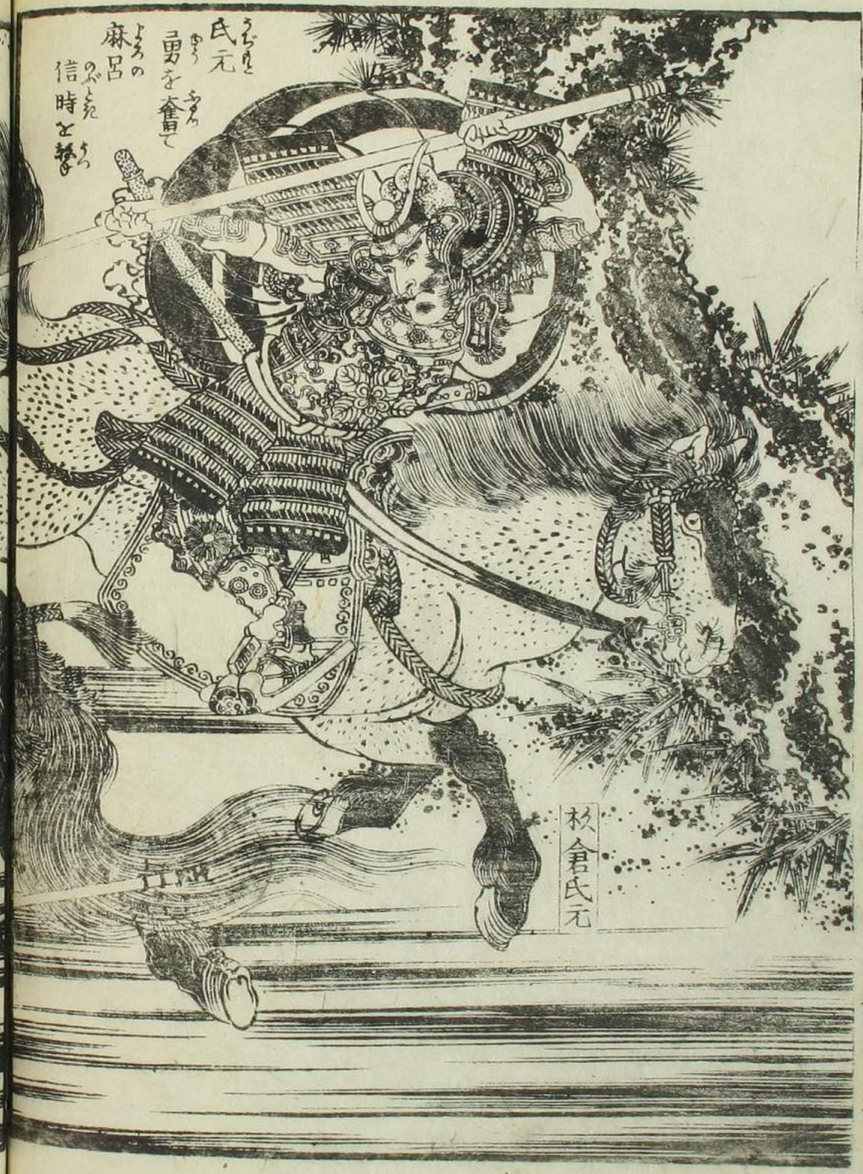
賞罰を
あたゝか
なるかな
義実玉梓ホ
珠数を

といふ。傍の妬婦ゆく。実あるべき事ぞ。
高く職重なり。大くさかづき二君ゐ仕ふ。
きゝ恥ぢよ主君と嘘ぶく逐電し。更ゐ里見ゐ隨ふ。瀧田の城を落しゐ。
鬼の毛だつまも先君のなんなるゆへなるよう。
仕ふる忠義の男子もとゝめくのごし。女子のうへ沉魔女の狗をゆるすも世に
ありうる。然る我何ぞや玉梓ひとり。
ませるをとる。いと羨がこと。
鼓。その過言なり舌長し。既に汝が奸曲ハ推量の源ろうび。十目乃視指所
十指の指を所えもう所をゐ羨伏せび。みづう許しく喻を引外面如
菩薩内心夜叉顔と。ハうう。
さ所退し。女子なうび。いでう城を頒くべ。ろうぎ。酷六鮑平なる。神

餘潜代の老臣なるを以て。利の為めに義を棄て。逆に随ひ悪に黒ませ。宜の罰遂に脱るゝ事を得ず。皆ハ創を為せるなりと。又孝吉ハ主と異なる事を疾み。忠を変じ故君の仇を報ひんとそのゆゑを。単身めぐりくてその家に入り。指のめるくを弾んより。一巻の書を出して。里見の君に随従しく。祖眉の躬方を集め。今定包を族滅しく。未だ致さずして。呼。鬼の毛だるまも先君の盃あるときハ。忘るゝ婦女子の愚癡とのみ思ふ。いつまでも許しくなるべき人成かるべきや。豚と抱かしく臭死を。覚期せよと。敦圃ハ玉梓道理を責ていふ。重く罰し軽く。歇城の士卒とゝもに里見殿ハ仁君と東條を。寛恕妄罪ありなん。ゆるすとも。まつるのハ殺一罰を用ひのふとも。賞をさつぐく黒髪ハ白刃を掛るも妖嬌ハ春柳の糸垂て人を招くハ彷彿たる美実ハ上坐ハ逆臣斬殺しく。この件の截り殺うちハ。玉梓がさそのの疵ありぬとも。不及へ殺さんやとも。罪を悔く助命ハこふとも。赤と芒気なと咲く向上る頼ハさなり。故郷へ還しくやらん。男女と差なれ。とも。むかし共ハ神餘の家ハ仕へひしく八郎ぬし。舊好ハ忘る時勢なりそれね。

桂死よあくまと女子の身ハ助るとも。賞罰の方立ざるハあらじ。よろしく計へしと。丁嚀よ仰まつ金碗八郎貌を更め。御掟でハゆくとも定包ハ亜ぐ逆賊ハ件の従婦玉梓ハ猶ハ戮の忠臣を追失ひさるのこなるべし光弘の落命も玉梓をきく傷ハ在く。定包と心戒合せ竊ハ計るハあらざりせハ縛

麻呂信時


杉倉氏元

一朝ありぐさもなびくことくのよう糺察しありぐ賊婦氏赦しありぴきの君もまた
又その色を愛ぐ依估のおん沙汰ありるのと人の批評を憚うらんされば姐妃を
朝歌に殺さる大真八馬塊に猛るとそれらは傾國の美女ありるのぞ玉梓が類ひ
あるまじきことそも四乱ぎその城敗ぐ日に至ぐ遂に斧鉞を脱ぐ赦しありぐ
ものごとく辨儀しく練ぎ六氏実ぎ立ぐ仰ぎぐ玉梓氏を安あくぎ死ぐ
ぐ牽生ぐ首を刎よと声高ぐ立ぐ玉梓が顔朱を浴びて凱旋のごく死歯を切て主後氏信とゆくまく怒しぐ金砚八
郎赦んといふ主命氏拒ぐ吾倩を斬るのみ汝も又遠ぐぜ刃の錆となるのぞ
ぐそのありぐ断絶せん又氏実もいふぴる赦せとのひ吾も汝引ぎ
孝吉が視破ぐぎぐ人の命を弄ぶなかれ畜生も追が道ずんてこの世ぐありる煩悩の犬とあざ笑れ物るのぞ
と罵れば物るのぞ

掌立よと金砚が公を刃雑兵四五人立あるて罵り犯ふ玉梓を外面へ牽出し
駈て首氏刎さりけるあぐぢ犯ふ八郎ぐ犯よ八郎ぐ文ぐ仰を兼ぐて賊主定包玉梓が純平
戸五郎が頸ぢろ共よ滝田の城下が殺ぬ表ぐぎ現積悪の報ふ呼斯あるべきと
ぐぐぐ今更かめぎほとぐ親ぐぬの日毎が堵の如ぐぎ絶ふその暁ぐぐが救倉未
曽ぬ氏元が使者とぐ蜑崎十郎輝武とふめ汗馬よ鞭を鳴ぢぐ東條ぢり
ぐせ来ぢぐ氏元が軽ぐ取ぐる麻呂小五郎信時が首級氏敵ぢ合戦のぬ体を
巨細がやえあげぎりけるその図ハぐふ載るとのぐどもるぐげれば巻を改ぐ。
第七條のすぢ先がぐぐん又玉梓が悪念ぬ良将義士が憑とかそのふぎぐその子
その子が貴縁ぐ一旦不思議のりぐ来るぐその禍ハ後意が福の端とぐる。
ぐれ限までぬ過ぢり。閲者彼賊婦が怨言ふ。ぢろ氏とぐぐぐぐぐぐのぴ祝。

南總里見八犬傳　卷之三　終

東都　曲亭主人編次

第七回

景連奸計信時を責ㇾ過　孝吉節義實ㇾ辭ㇾ死

杉倉木曽次氏元が使者蜑崎十郎輝武東條よりそせをまりて麻呂信時が首級を進らせてこりけるこゝ氏実ハ大床子のほとりゟ出さ。件の使者を

ちく召せ合戦の始体をみづから

兵粮をくまゐらせ。氏元豫

運送せでやと思ふ程ゟ安西景連麻呂信時ゟや定包かくられて。

海陸の通路を塞ぎ。小荷駄を取らんとされを俟簿の難義ゟなび

ちくぶ氏元よりく憂悶さく。いくづゟ日を過しう。ゟ景連一夕

窃に家隷某甲をのぞく氏元よいのそうしんちゅうぎ蘇秦張儀をして百遍千遍相譚とも差引べうかろかざりし信時ゆえ
そのうさをとく渠がみち途塞がり死良将勇士を苦めくふこれるがら浅猿と後悔臍を噬ものぞう信時只管鏃を磨く候ども必ひく
さびが呂も亦靴を隔く癢を掻くふ異なるべく借事の情を量るゆ信時ハ匹夫の勇士利のみ義を忘まてく貪れども飽とそう景連舊
好をおふ故ゆ一旦合體をとのへどもり悞を改ざれ狂人を追ゆ不狂人走るに共ふまとりかべし所詮合體の念ひ紙翻し。おふ信時を誅果
して兵粮運送の路を開き里見厥ゆ力を戮くく賊首定包を討滅し。大義を辞んとそふのこ曩ゆさまく未臨せとき里見ねーを要
とぶんびあるじ能ハ礼儀るうりしハ彼信時が拒ゆ名ちう。

城を出さ。短兵急ゆ攻るま信時ハ野猪武者ん敵とそんく思慮もるく一陣ゆ
進んぜ。そのとき景連後陣よりまさて挟くこま弦輪ゆび信時をゆ取ゆせん
る。営戒退ハ如ん狐疑しく大事をこ悩ゆ
ちうまとども氏元ハ敵の謀ゆりや。とそひーくバ俄ゆく後ろさ使者の往返
度かさなるとく偽るうびぜえふけまバさハ信時を殺んとそ安西ゆ
諜し合せ降ま降ぎま五月雨の黒白もとろね暗夜よ。二百餘騎をり率し。
枝を銜ゆ纔を銛め。麻呂信時が屯せ陣濱荻の柵乃前後より生ことと
推よせく興戒咄とつくま掛ま二ま三ま突くく入る敵よびべーとハおひ
かけなき麻呂の一陣劇騒をく鼓ゆ信時ハ馬ゆ鞭を當弦なき弓ゆ箭を
とつま添楽立ま陣なまバ只ハ活路を求るのみ防戦んとまるめる。
そのとき信時声を激し。懸しげる推包で
敵ハ正ーく小勢え共うる

その夜さゝ里郎方の為ゐ征箭一條も射出さゞいらの祖ゐ前ゐゐる柵を退去くゐと苔ゐう世ゞ実ゐ扇をゐつく騰弦敷ゐゐゐゞ既ゐ景連が奸計ゐ著れりゐゐ滝田を攻ーとゐ兄勝敗測ゐことゐゐども定包も天神地祇も憎せゐひとく人のゐもさゐ逆賊なゐ一旦その利あるゐ仏たるも始終全ゐしゞとゐ景連ゐゐひゐん定包竟ゐ滅亡ー。実その地を有ゐ及びく。信時ゐ安西が翼ゐゐゐべ死めゐゐゐゞ只大だゐりゐ勇め居のゐ與ゐゐ謀の軍残せゐ脆く負なんとゐ弦おそまてく陽ゐゐ実と合體ーそ氏元よ信時を襲せ景連ゐその虚ゐ乗ーくく平舘を攻落ー。朝夷郡弦合せ領ーくく。牛角の勢ひ弦張らんとゐ鼓ー扇ゐゐ外るくとゐゐ推量ゐ違ゐゞ。とその腓肘弦指さゞゞくいと精細ゐ宮ふ折氏元が再度の注進某乙ととさ甘糸。信時既ゐ襲れーゞゐ残兵頼ゐゐゐ直と追捨て氏元ゐ

軍兵残纏めてく雑ゐく東條へ帰陣ーくゐゐや景連ゐゐゐ前原を退去て平舘の城を乗取ゐ里麻呂が来地朝夷一郡みるおのが物とゐり狗骨をりてく鷹ゐ捉せー氏元ゐ労ーて功るー。ゐん勢をさー向ゐゐ先鋒とゐ奉ゐりてく朝夷一郡いゐゐさゐなり。景連が根城を屠ゐりてくこの憤を散をべー。

とのゐーゐりゐゐとてく孝吉貞弘ゐ山豆おりゐんや景連ゐゐゐ前至ゐりてくその君の聰察叡智ゐ感伏ーゐゐ景連弦討ゐゐゐと頼ゐゐゐ勧免奉ゐゐゐ義実ゐ弦弦ゐち掉て否安西ゐ討べゐゞゐ定包を滅せゐゐとり栄利弦ゐゐゐゐゐゐ民の途尚残救んゐゐさゐ衆人のちゐゐゐよゐゐてく長揖平郡の主とゐるゐゐゐ死已ゐ幸ゐゐゐゐゐや。景連衆雄ゐゐとゐゐ定包ゐ類ゐゐゐゐゐゐ

蜜觸の境ゐ迷ひて人民を損ふそへつゐぜ景連好計行れて平舘を取るといへども一時ゐ雄雄を決さべーさて
なほ八境を成つまくさよりも先ーさべらび金この旨をさろろよと叮嚀ゐ
喩ーゐへば孝吉負約ハさらゐもいろぶんなれ
感佩せざるものもなーいゆーへの聖賢もゆうへあると云へ顧稱賛ろうり
けるかくて民実ハひづう氏元ゑ書をゐろろく渠を喩ーて安西を
討こ我禁ゐ人う物を取らんとてくこぶら絆を忘ろろ鄙絆ゐいへ飽と
去らぬ者ハ仇の列ろう。篭城の外他度あるべらびと警ろく蜑崎十一郎
多我選ーのひつどろくさる程ゑ夏寒さうしゐ花降晴ゑこう風ゑちこふる
六月の土用ろのふゐちゐゆけゑとこの時安西景連ハ芙戸納平とう来當ゐ
西三種の土産を齎ー瀧田の城へ遣しくく定包頭ゑ滅亡しくく我実とゐ基を

開陽祝を述好をう通ー景基のおひ遂ゑ絶ぜ。
只義ろくハ信時ゑ席を犯さまてくゑ意外の不礼さてそへ晋の丈公ぶ曽を
過ゑー憾ゐ似つろめ。若ゑ是どもそのゑおなくハ雖う君を激ーてこの大業成
奥ぶゐ至ろん實を推べ初ゑり大くこうべ君をゐふ景連がす志ゐて假ゑ
強顔ゑてほしゑり。ゐる故ゑ愚意を生ーくく君がゐる信時を除ゐけまゑ湯
報あゑ不思議ゑ附驥の功ろりて平舘の城を獲ろり一圓四郡を二ゐろ
ちくく犯ゑととなく枝翼ゑ児孫のまゑ名まぐく伝へろべ楽ーろ
なろまぎや些ゑの野品その美ゑ足ろ称ぐと乗馬三疋白布百反画ーま我
進ろまる。只いろまぐも文の変ろーぐと祈るものを収ゐべ幸ろんと感勲ゐ
ゐへせーろべ堀内負約とり次ろ使者の口状云云と我実ゑ告ゐろ甘べ我
実疑ゐ気色なくく箱ろく負約孝吉ーくく芙戸納平を饗意させろまそゐの

使者ホ對面せん等雨ふらば數行せよと口噤ホ仰ヨテ負ホ孝吉歎ホヒ
君ガ賢死ヒそのくちなごとく彼老狸ヨ欺ヨひぬる景連実ホアラ
與一徳弘募ふめりならバ當國ゆ
べし今さらホ虚ニ死壽を述妬弘通ド些の物弘贈ヨしそのヲホ獺を
さるめんそのほその好計をるべうらぎ使者を歎待のふとう御對面ハ物
体ゐと綿ヨ連ゐう せしバ実堂ホとうち笑ヒ景連ハ実情ヨて
まうゐ妬弘通ぜバとも今ぞとところハ憎むべ死ホのホあらぢ
まうゐホヨヒをう祝くもその舊恩弘報ひ背くなりゆくゆの如くホしく争バ
ゐ人みるヨヒ弘不義とせん不義ホして
提ヒあるヒとも義実ハ祝しうらバ妬ヨ疑ふべうらぢとホをくも論ふく
みづから使者ホ對面一納平が還るホ及びて共ホ金硯八郎弘安房郡へ遣

義実ホおろりけるヒ見よりしく
神餘の舊領長狭平郡の二郡弘領一義実ハ
のど長閑ヤホなりしバ祝倉木曽妙氏元ハ東條ようヒ召久さヒてそでめて
安堵のごひ弘るの一君臣上下笑ふこ向く楽しうらぢといふものほかヒ一
程ホ七月の星ゐもる夜ホなのヒホ
そでなりしく祝倉氏元堀内貞行ヒ金硯孝吉ホ功臣のこ弘召饗ふく呂茶の
礼綿をうヒ一むり里見のお例ゆハ烏茶の礼と
ほこ。この功臣ヨるホ宮ふ守う手ホ二郡弘獲ようひ波風たゝぢなる
めりう。とホゆくホ事繁くふく祈ヒ一神ホ賽さバ又功臣をるホ賞を

釣りぐさもゆも山を造るか如くなりさて毛氏元貞が先考の遠命残受て。
つらが艱難か後ひろそその忠信か今さらかいふべうもあらざめれど白箸河の
上ゆく金硯孝吉か遺ざりせば。いかゝ
又詩が書を捨ばぞ八定包いそぞう首をおくらん彼とこゝとゝこゝろ
ざうち一の勲績へさゝぐもぢめ安西ホが奸計ありてれて軍法をあて
斬れん鉄兵粮竭て餓つゝ死歌の為ホ擒とあのうんこの二ツホ過べうぞ
時かうやく清涼ゆく根ろー言の紫雲むとぶ待を賊ー敷残孫んぬる。
今宵八二星のあふとうい人の吉凶ゝ互ホ係る
ゝ互ゝ既ゝ天ホ拒言ケ。當城の八隅ゆ八幡宮を建立ーく秋毎ゝ祀なり。
又領内ホ徇志らしく旌我をゝ我禁ゆん又金硯八郎孝吉ホ告ゆ長披
半郡我列表與ゝく。東條の城主とせん氏元貞ゆあ所領あのく五千貫を
宛行ん。この旨ゆろひへと正首ホ視示ーくゆづらぢおかせのひー。
一通の感状をゝぶ孝吉ホ賜ゝぶ孝吉三ゝび戴なく。その使返ーをゝ
席を避くゆろひゆう。相伯神佐の老臣ホ先ゞにゆゝ恩賞再度ホ及
ぶせゆ我推辞をゆろひゆうひゝど其ゆゝ初より名利のぬゝゆホおろる。
故主のゆゝ逆臣ゝ絲せんとゆゝるのゝ宜ホ君が威福ようて宿志
果ーいうゆのうへの恩恵ゆみー。とゆぶ我実うちほく栄名聞栄利ホかゝ
らんぞ功成ゝ名退く現我士の表。如此あるべゝゝ唐山の張良い
故主の為ホ秦楚を滅ー。後竟ゝ封爵を漢ゆゝ受ゝく留侯ホ封ぜいれ
ゝゆ例あり。ゝゝいホ高祖の徳ゆゝゝゝゝ。和殿ハをゝく張良が孤忠ホ称うて
さゝぶ又功ある人我賞せぶハ誰うそのゆ志我忠孝節義ホ激ゝぶ死狂く
ゆうが意ゝ後ひろくよと諭ーゆぶ氏元も貞操ホ亦ゝ互我勉めく彼

一子を殺しくれ
孝吉大義ぶ死也
里見うさき
金まろ八郎
扨倉氏元

玉つさぎ
上総の介
白井の城

感状をうちも措ゐ遽ふせゞ金碗八郎ハ已ニ死ゐたるひゐ受てくうち両死
続ぐち。ニヨ賜ふと辞しまう甘ゞバロ只管ゐ我意気ゐうてく恩義とおもふぐる
ゐゐ仰ぐうまさうとてく受てハ今さうゐゐ故主へ對してく不忠なり受てく
受ざる孝吉がこの世あの世乃君が為よせんさべあるよとつひあへど刀を
見つと引抜てく彼感状を巻そえゐ。肚へぐさと突立ゞべ見かとだゐ主
後三人ほとゐ迎く居よりまち。武実ハそのゐ脊を安さう揚てく癒口をとさゐ
かくさゐうち熟視尖刀ゐてく入りてゞべ助るべき死甚う苦痛を忍びてゐゐはし
ニの仆ゆてく絆絶ゐバ誰ゐ狂死といふもの
ゐゐまちゐてくいひ遣てよと宣ふ声を仆とりてや。佶と向上てく息気吻さ
故主の狂死を仆ーと死。ニの肚ハさや切俗べうまーゐ只定包を解んだと
ゐゐなうまゐ存命てゐ有甲斐とゐゐハ事我為遂ぐがてく時あり縁ありて。

君ゐ値遇ーまた大馬の労を竭せーよう。切ニ過ぐる恩賞我今更ゐ受ゆてく。
後ゐてくなり故主の狂死をこゝろ幸とさ仆ゐ仆てく存命かゝる死甲斐なり。
加以義羽岡ゆてく定包なゐんとゐ必ひてゐや。岡主を傷ひまゆまーゐ朴木
朴平五垢三ホ八原某ゐ家僕八彼ホゐ武藝云八某ゐ剣法を得べゐろ。
ゐとゐひゐゐう。下司の兵法大痴の基我両死ーまた存命てゐ死二ゐ彼漢朝の張良ゐさゐろゐ
田横ゐ死ーその後ゐ潔死まゐてゐ墓ーゐ「君臣ニまてく狂奴の帯我活ゐ
非礼の罪ハゐるさせゐ人と小膝我実刀を安てく右ゐのてゐ引絞えさん
とさ仆ゐ彼禁めうと武実ハ焦燥ゐへバ負ゐ氏元ゐ手ゐ携ゐて御渡へ。
とてもかくても冥土の旅宿今さうゐてゐぐゐうと弊我竭せゞ武実ハ
数回嘆息ーてさ孝吉ゐ表我。ゐうざるふあてゐ招ども甲斐なゐゞとゐてゐ

ゐるぞ。勢よく恩賞の沙汰ありそのゝ死を促せ。こゝぞ生涯の悦ぬ。きそのをけるのゝ
黄泉へ入給ふ汝が首途こそ実餞別せん。木曽妙彼公丹を。そくく呂と
仰ぎ氏元が阿と哀そく縁起ぬ立生そく。上総の一祇そやまあ立と声
ある甲ふぬ立ぶ兼りつとふ吉も鬼ぬへまりそく同ハ涙六十あまりの
荘客が前より其処よあら拷の脚半甲掛裙そ〳〵折そ右ひぬ営立
ぬんで左ひぬ五才おろうの男児のく残掖霄を屈めく樹立間ろ死後園の。
折戸の蔭残立生ろ。おくく。と氏元が招くやふ〳〵縁起ぬひをかけく
伸あぐりやよ八郎どの孝吉ぬ〳〵。上総よりぬ恩より来つそう。一祇そひそ女児
濃萩ぬ産せるひ〳〵。その子ハこれぞいそ。ぬうハ行るぞ拘ぬをろうぐやと恨も治もたゞかうまあ風ちろうぬ
夫人の席とそく影護なる。孝吉ハ一祇。と名告る残ぬく目残もく死。

ろてるのゝ拘のうぢ。當下扶倉氏元の孝吉ぬうち對ひ八郎祇残ろうりや
某舘へ来る折伴の老人路次ぬ在立金殿氏の第ハ何如と。こゝぞ役者ぬ風
〳〵ぐ有繋ぬこれをぜ捨くくく。そのゝ来歴をろるまぐが間様く。と雅
児のうさ人生るぬうちも措ぜ。孝吉ハけぬ宿所ぬあくぢあんと
ろのふぐこゝぐ後よ跟くちの主。とそぐ修ぬ君所へこま残ぬく旦綽乃
越を義人ぬ告ろく世殿へもやよ〳〵ぐ。そハ奥あるとふなのん八郎ぐ
かく〳〵子ろのふぐ末憑〳〵元りのとおぼ〳〵。こま
ちでゑ金硯ぬ。ろう主ろのと宣ひ元。こ主ぬ祖
後園なる緒折戸の蔭ぬ潜せ殿の仰残ろりよく一祇ハ雅児もろとも
ちぐのいろくぬ和殿ハ自殺外ろのぐくんや。そのゝ残。
せめく今般よ親と子の名告残さ世ん。と。ろ呂こ主ね殿の賜へ噛八郎と

及びて。親子の名告それも終なき
うみなん某主君を練うみて。瀧田を立去りし折上総岡天羽郡岡村の
荘客小一郎といふものへ則件の老人を父が時々使れける私率でいへば某
且く彼公羽が宿所に足疾駐めける旅宿の中に渠が女児濃萩が許ふけ
濡ぬれて結ぶ仇夢うつゝの間を千とせの帰が告るふまゝろ驚死現ろ情ハ
うつゝ平なりぬ者とゝのりけつと婦
意外の悪事と世絡みもいふハしがうへなり。往方定めぬ旅の空。ひく久
恋の家ゝうう孤ハ締と果ぬ妹と伏の浮名残ゝて城ある人の女児よ
瑕疵てハ今さゝうう親が汗ととゝと絶てく会とる面ハろ〳〵浅ゝうう死ぬ者そ
けつと。二百遍悔千遍悔とも後悔其処。立ざまハ。
墮胎せつとゝゝうのを別ま思念ハなき

一仇ま迷ゝうそ関村を走り去里彼此ま流浪て五年との夏ゝの日
故主の柱死を伝ゝく定包を聞ゝんとゝく窮ふ遥る蒼里の途の便ふふ
あなま一どの一仇許音つまび濃萩がうハいふぞと塞ふも問ゝそゝ
なゝと志ゝ居ま其子ハ美ふく産せうく羊来養育の誠をうそれハいつそ
うほ面目なくてそいつといふ声ゆえや危息ある現理りと一仇ハ慰ゝつく
鼻うちかゝ有繋ふ悍死武夫ゆ恋ふハ脆き人情況てもん労ハ妻もろく。
子もなき死旅宿の後然を愍ゝうせ〳〵女児濃萩ハ漲奔ふ似ゝく漲奔
うゝびいつバさゝう氏素姓あのが故主の倒を宿せ〳〵彼奴ハ天晴果報もの。
佳婿がぴとゝろ〳〵ぞハ婆ゝうう共ま扶びつ。志ゝとゝろ〳〵
とう猜〳〵のひけん。和君ハ出ゝかゝりもの〳〵びつ。往方を索ゝうびつゝを女児ハ稚
なく烟月ふ産おとせ〳〵ハ男児そ。あゝ愛ゝさ〳〵と祝ぐ間なく濃萩を積ふ

お初父母肥立て竟に十方億土逝てく名人となる。その初七日を二七夜。
宴目面を相を米ふの内出ら乳を普ひの生死ふちふ三界流転患苦ハ
絶さる言の葉ふ演竭さるとなふばさらぢ赤子ハ健へ主と女房が形見ぞ。
とふまび可愛くいと惜く昼ハ終日懐ふ夜ハ通雷父郎婆こが迭代ふ添
ぎ乳。ふ母ふく立ば跋よといそぶ笑へばおぼつかなくともろだふ引伸ば綿
猿馬ふ索ふ綱孫ふ牽きてく二番草。とふ後ふる痩田の案山子。おぼ
えてく日を送ふ年成かさみてく四とせ去歳乃秋より婆こが病著。床
ふ呼ぶなる看病ハ届ぬ棚の某嗣嘎児ふ絆へてく熟著ふぐふ煎ぢ給
さるその年の大晦日ふ婆こが往生。虎脱のぐまー木偶と稚児とふまー只
三人棺を守てあふふの年成初度門松ハ冥土の旅の一里塚禅情良ふ悟て
えてる。暁かふ元ハ几夫心六十八の今茲ふて一生涯の憂苦患難。むとふふ
裏てもおぐ足ふぬ再三ーびの大厄難孫ふも愧ど涎老が身ハ春の外山ふ
笑れても涙の垂氷凍解て佛ふ折る花門の梅答も怡好五ッ子ふ。五ッて実
初る念仏ふ欠伸の雑る宵迷ひ短夜ふ。ふ春過て卯月の下浣ふ上総の
うらまぐ鄰囲のふ。和君ふ合戦の声隠ふるーふ且ーび二十さひハ繁昌
ーグ見ふり乙ふ勇あるいふ。ふく坊んとふひーふと歩行不便の老人ふ稚
児負ふく戦場ふゆんハいと危ー。時を候んとふひ久て対おさるふ弦
ゆめぞ定ふくけふふく来房甲斐ふふ且一今般の對面過世の業報想像ふ。
一倆ふ悲ふ物ふ屑ふもひろごこの子ふ人と成る後ふ二親ふふち白ふ髪ふ
遺憾ハいふふんふ喃加ふ三あまーそ
指せふ稚児ハ伸あぐ。ふふふ喃と声立ふゆふく親ハ死ふむふ。物ひ
たけふ動せー。唇の色変ふふ。たや臨終とふえーふ父実ハ稚児ふほとり

ちく召ようとぞ定めける。面軽八父八郎よりく肖こう。その名八何とかぞ。
と問せるに一低を勝推屈こうち向上楚と定し名八ひかまど故主と女児の
形見なるべし加之二ことと喚做せり。とヤ上まさそあらんこの子と我な
ぶさせよ。父孝吉八ヲを輔し大なる功あり。これとその子も名小著しく。
金碗大輔孝徳と名告こ父が忠義を業嗣けんと成るハ敢のとく長挽
半郡を列侯與こ東條の城主とせん。一低ハ外風そもなお留りて大輔が後
尺せよ。當坐の勧賞五百貫よの推児よ取さるべし。二ヲ残冥上の苞苴ヲ
ちく。佛果をえるや八郎とゆび激さヲこ孝吉ハ鮮血小塗るを矢も残
抗主君と拝をなり。きちく。と引裂て刀の蹟小大腸の出る残忠そ胴こそ
人く必潜さのむそとの残末期の一句小項残伸せと勝れし苦痛させ
と義実いかん佩刀を引抜こ。みぐりより背小立ものべ良果敢る八郎が。

首の前小おちく付ヲ光期ハおぢも憾うめ。一低ハ声を惜ど泣々老乃
淳言をうけ蒼つ氏元貞幼のと王首小慰ヲ稱児ハ只ハるく。と酸鼻のこ
情由ちくど縛断くり親の顔残さ一哥こ金碗八郎が死
果るとを星墮こ。七日の月ハ西こ入り陰こと。く心火内死女子の像彩の
ぢく。大輔が労小そおこ。死消を如くなり。
その餘ハさべく。ちざるを死。かくて義実のこ
吉が送葬大輔を養育月の事叮嚀小命じのひつ駈こ後堂小ご入り
ひぬ時小漏刻高く音く。夜ハ才ヤ亥中小なりまけり。
低者云この後七月の初旬の乙ども出像ハ冬の衣裳小似こり現羅
衣ハ画くとも彩るべくハ定ちぬものえ。こヲこちハ画者のぬふまろ
く敢時希小掬ぐど。かるる間多ふ。

又いふ。さの出像ゆへ氏元をあこ出して負へ利成首をうつ大ごなふぬめどもなほどでも。おこゆへさせほうみなのれば。剖剛氏を助けしん。

又いふ。巻端第一回結城合戦の條より。さつぶ至て僅ぶ四个月。嘉吉元年四月ぶ起てよく。おろで年の七月ぶ終る。傾れてその間八十餘日とぶなん。第八回ぶ至て八年月遥ぶ程經りて。十六七年のみぶ及べり。その間ゆへ伏姫の成長我をさくくいろのこ。させ居お語なる死処は皆省略て。くくくいろびこほつも例のうなながら。精魂互ぶ遠を異ぶをみるとべ柱ぶ靡きるぶ似されど。次亭我悩をとやとてくよくもんぎてん人のあるかるよりさてみづから注しん。

第八回

行者の岩窟ぶ公羽伏姫と相を

瀧田乃近郎に狸雛狗と養ふ

金碗八郎孝吉が猛ぶ自殺あてざるものは渠死るぞものうるぶ功ありて賞を辞し可惜命を亡ひしまを全く玉梓ぶ罵られまし我恩ぶもんと難ぎるめのもあつまとなん。そまてゆへあてぞいふ人の賢死人の言のまぶ男子寡欲なほべ百害を退け婦人ぶ好るまべ百拙を掩ふといへり。況て道徳仁義をや。さまべ義実の徳孤るぐまて鄰国の武士景慕しん妖氛通じ婚縁を莫ぶをまけるそべ中ぶ上総国椎津の城主萬里谷入道静蓮が息女五十子と心做せるへ賢ゆて妍なよ。義実灰又侍へ生てまとそのへちこまて我娶まつ。一女一男を産しのふそのうち第一女ハ嘉吉二年夏の季ぶ生れ。男ぶ時三伏の時節ぶ表しまく伏姫とぞ名けら。二郎ハその次の年のをりよ奉のひつ。二郎太郎とぞ稱せら後ぶ父の箕裘表我嗣て安房守ぶ成といふ稲村ぶ在城しまく武威おまとく隆るのれ。

志摩小伏姫ハ襁褓の中より儔なく彼竹節の中より生れし少女もかくやと
ふぞうまで肌膚ハ玉のごとく徹まく産毛いなづく項よかれり三十二相そな
とうとく缺る処あるまじくおん父母の慈愛尋常ふいやまして冊父の女房を
それおおさつけ此彼嫗傳ふさりけるとも伏姫ハ夜となく日となくむつきそそや三
歳ばかりのほどおん父母ともに笑もはべうち嗅ふのごとなるまで父母ともに
もだしく三年以来醫療祈禱畫ゐ高僧驗者の加持祈禱ごと彼とりのしめ
ども終て驗ハなかりけり不題安房郡ふ洲崎明神と唱奉いと上久
しき神社あり。この神社の山足ふ大石窟の中ふ
石像あり。土見ハ役行者なり。この処より湧出る泉を蝕子水といふ旱天ふも
涸ることなし。むかし文武のおん時ふ行基菩薩ふ
この地ハ伊豆の大嶺ふ海上僅ふ十八里小角ありく波濤を踏ふ洲崎ふ抵
り霊驗を顕しふ後の人その像を造りて彼石窟ふ安措奉る。
霊應今ふ著明にして祈願をかくるもの成就せずといふことなし。ここかしこ
絶いひつぎて大きなるを少なるまでおん母君五十子八伏姫のおん願ふ
もとく月ふ来彼窟へ代参れおの残遣し。既ふ三年ふなるものから。させ
ふ盆ハかれこれも姫うへ命差ふくともかくも生育のあいだその験ふぞあらん
ざとえみぐうち彼れふまかふべいうぐ奇特のあらばやうと殿へ歎せのひ
け里義実もとある弦のあるをのふ小あ
今ハ一も安西小野心あるべうもあらざめれどかるうやく稗苑の残る
る彼処へ遣さば世のあらえ新獲ありとひとぎりうへとそ容易許しぬ
さこれが請るとて度かさなるまでく駁止ぐく思召けん倶ふハ老士信
男女を擇く潜ふ姫うへ残洲崎へ遣しおひけるさ信相ふ伏姫へ輪子ふ

玉つさ姫ヨ夫

伏姫を相く異人逢難を知事
伏姫
堀内貞行
瀧田の近村ニ狸狗児を孕む

うち乗つ。姥母が膝よろ死抱きて。外ざしく左右より。うち囃されも。
よ。も楽ーげなる気色あく途もとぶら啼のべ後者ありて傷痛くく殊
更ふ途残いそぶしとう。ーく洲崎ふ勅死明神の別當なる志養老
寺ふ旅宿ーて彼行者の石窟へ七日余もあるかくそや結願の日も果ーべ。
後者ふハ帰舘を促ー。旅宿を出く轎子ハ平郡のろへ一里だろう。
来つらんといふ折姫うへくもむつうるべ女房乳母ふ懐ひて轎子よの中
出ーまゐう壮衆皆賺ーまいーらく。かく抱せろこの体途絶いそぐとまれど
果敢とうざ。浩礼ふ年の齢八十あまりの翁一人眉毛ハ白く霜をあれ
ど腰ゆハ梓の弓を張り。旭乃杖よ携まろく。途の真中ふ蹲ーとり。故よ通
行あるべ後者ふハ先を急追ざ。そのとき翁ハ目をすなさぐく伏姫をと
く熟視ーて。とまハ異見の姫君のうつくしやふ石窟のうさなるべハ翁が抱て進ず
せん。と呼びかけまつく後者ふハ驚て劇ーく久まべ視彼翁が為体凡人
ゆハあらざりけり。懇ふ実我告よ。と翁ふ。おのれハ老尚老女ハ
翁ふ對ひ。緯の類些も隠さず云云と告ふけまべ翁ふく点ひく。
宜ふ霊の祟あり。ここの子の不幸なり。襁ふよかくれとハあら祝ど。
禍福ハ糾る纏の如ー。譬ハ一個の子を失ふく後ふ験の翼を得ばその禍を
禍なりとざ。損益の方みなおろそ教ふべくらべ泉ーむべくらべ。
こよう我実夫婦ふ告よ。ーこと。まゐらせん護身ゆせよ。必ひあらまる
てまるべ。と後負ふ説示ー。仁義礼智忠信孝悌の八字を彫なーる水晶の
珠数一連我懐よりとり出ーく。内りと姫の衣領よかくるべ老尚老女を
劇悉ひくりろ。ふ額我つれ。ヨ人ハイの崇ゆらん委細ふ視ーく後ーまべ。
襁頂ーまひ祝。といハバ翁ハうち微笑妖ハ徳ふ勝ーとハ

いふとも里見の家ハますます榮ん盈虧とハかゝるを顧ふ
べきにあらず我委細ハ元よりとゝハ天機を漏すものおそれあるを伏姫といふ名よ
ばるゝ事ハ曉得なんさるにてもこの女の子が嗄聲を止
べきそとくゆゑ狐ハ洲崎のかくれ巢をとゝのへ
まてとゝ飛ふが如く出ハ入そなやまし
目送りつゝ全く役行者の示現よりそとゝふひとそ
拜し潤田を指さしかゝる行ゆゑ姫うれしさ
この日をそゞろとそ拍のいひざる尋常なる三歳児ゆゑ
のべ我ハ飽まで件の遊戯を殊よ
実五十子ハ大ごとなるゝ冥助なれバ
ちゝを呼ハ金壺まなこ光て卯を生王樹そゝそく花を締ふ天乃作る夫
顏ハ貌世の壽ハ
むしろく終日倦ず乳をのく夜ハ絃管のもろべ耽そ更闌る筑を学
のりど年十二ゟ及びてハ和漢の書籍をよく続てをさく事の道理を
知覺ー仇なるゝハ残積さで親を敬ひ下を憐を孝貞忠烈あのづゝ
常住坐次ゟえさせのハ母うへの鍾愛のべさうえ実ハ
ゐも綾羅のひけつかくれこの北長狹郡富山よりあちらの村落ゟ奇
譚ありけり字枝平とゝまでる荘容の凡ろ犬子を只ゝつ産くけり
ちゝも牡狗ぐあつてべよふゐとつ子ハ逸物とく骨逞ーくカ仕よく

敵をうちとりたるとて投平いと惜くく背門小藁蓋造肖かけて彼が
産屋と定めつゝ朝夕糧のあまれるをが與ひごとなりかくてまや七日
ばかり経ぬその夜背門なる芭蕉の葉に打臥さうのまに
衝去ぬ投平が天明くの後ち血をたどくくこと狐ありけるが打臥さうのまに
稀にそのこ。さるを雛狗ハ食送されて不思議なりしがせめて
ものおもひにそくいつゝ不仮の物ゝまでを
乳汁のごとくに又別ごとに養ひよりもなれが損糊のごといふめる狐なり
ぬるまで子めどもとの投平が妻子ろの元来単身なりけれど昼ハ
田畑の稼にく宿所ゝあること稀なりけるが。そのうち遂さるゝかくも只
ならぬ狐束狗つ。彼が死る狐候のこと思ひ捨ゝ草野へ出一日二日と経ぬるに
その日怪しなる彼雛狗ハ識ることをいふをきゝ。十日といふ日狐死つ。

肥るとそぞろにふまたるこ。ゐの平のふあらびとく人ゐも告ゝ豆暮ゐごろ狐
ゐ附ゝ窺ひつ。あるおまぐれゐ起ゝ人ゐ追ゝ狐ゐ
ち。そ。ゝ生ゝ富山のふもとなる原来雛狗ハ彼狸ゐ孚るゐぞあらん
ぞとん世ゐ又あるべきゐのとゐ笑ゝごとくそもいつふとぞろゐ口顧驚噴
すゐのうゝ物ごび楚とゝ定んとゐごとくゝ人ゐ追ゝその黄昏ハ
背門ゝ躡ゝく。狸のまる狐ゐ狢ゐ雛狗ハ母を莫少つ。ゐゝと啼ゝ頓ゝ
時ゐ燐火ゐ人魄ゐ瀧田のふより閃光ゐ
屋のほとりゐゝ忽然ゝと滅るとそぶゐ
ゝとり麦生ゝ来て孤屋の内へ入ゝーぶ。雛狗ハ頓ゝ啼止て乳を吸ふ音のゝ
ゐのそゝこ。かくて又四五十日を歴ゐ隨ゐ犬ハまゐ大きゝなりてよくあるゝ
ゝとり食ぶ裡ハ遂ゝ母ごびなりぬようそ今もこの狐大懸ゝ魚做せ。

居紙志料を按るに此房郡府中の地より長狭郡大山寺へ往く道あり富山へ登らんとまづ南八犬館より左へ折て又の西の平郡へ滝田山下犬懸の辺へ出るなるべし。

このとき杉倉木曽妙氏元堀内義実の仇敵一年兒輪番の東條の城を守まつり負彩八休暇の年ゆく氏元が城へ還らず滝田へとく還る日彼犬懸の里を過まじ理のつゐに告るものあり。

さればとく負行こと能信けまそその虚実我もらんが投平が宿所へいゆきて親しく、負彩の犬とそのつるの尾その綿の末歴然あるを。

彼犬のみ件唐山の獵韓日本の足往ともいひつべし。と是未曽有の珍事なまじかりけり。

武実朝臣へかくと告なんがまことか実耳我傾て勝の進む我等ほどに伏姫八穢褻の中より厭魅を生ずく泣ことより常の犬を畜さ後園の繋ことを尤今ふさせる逸物なりけるその犬ことに没がいみ所実へのるのみ。

さはさりとてのことをうくふ理が犬の子を孕む不思義とのみもまさりけり。

現犬八狐狸のごとき忌憚のあるよ。

相剋まるの義を去ず乳ことく養ひ且狸とのみ文字八里ゐ後ひ犬よ後ゐ昊則里見の犬なり。これその犬ことまつく名よ舟よと宣へば負彩八さらば犬を名ろうぢ。

義実ことに我「その八骨太く眼尖く高八常の犬ゐ倍ことく垂ことく耳巻こる尾愛ことぐく毛押さべし。その毛八白地よ黒丸を雑へたる首尾八所の班毛のごとくけだしハ房と名づけるひとく後園ゐこれ繋ことに投平ゆへ禄を賜てけり是よりことハ房八実人よ愛せらるることく飯よ飽裥ゐ離ぬ一條

帝の翁丸も。ごまこめいくぐまびべたとそく。金只奇怪のいのみるくど主君の愛
犬なる我のくを闇るのまどころさをやーん後くみ至りそく伏姫もこと我愛七
端近うおるみ日八房ことゆ甘のみ屋を揮ひく走至るく雲時もほとり我
去ざりけるさまで春の花秋の紅葉と幾遍う稍の名を深うそく伏姫二
人なりのべ。いくまびく。臨蘭とく白ひさのぼく初花よいさふ及我掛する
如。今茲の秋八月の比安西景連が来地ちる安房朝吏の二郡種物登ぎ
とく景連八そが老堂忠戸納平我使者とく龍田の城へ遣しく美実よ
乞けるあり。天こぶ領所よ災ーく上下忽地困窮せり。去ら為ぬ我領ここの
秋も豊孰そと彼ぬぬ我のみ米穀五千俵を貸多人来年の納我りく倍しく
返一年ちん景連齢傾そくく七旬よあまりとでも。男児ハさらえ女子ごも
いくみせん一女一男のこちるみ今伏姫を遣ひとも彼人妻のこまのこ我。
自他よその益あることのー。との一事ハ兼引ぐこーの豊凶ら時運ハ係当。
安西ぐうへのこちるんや。鄰国の荒亡を仕のつこと我救ひ天然脱ごぐ
養女の一我ハ推辞べー。米穀ハ我のでく見ようり遅ち進らセん。と正首み
回答ーく納平我ろーのひろことのとろ。
倉氏元ハ老病ら侵さ我てく。引篭とく
そぶ中ハ金砲大輔孝徳ハ見年既ら九歳よあのまね実の近習こま
外祖父一作ハ五年前ハ身まら重そぶ病床の枚抱ち大輔みぐろら塩梅
ちく識我てる物といくども奴婢ゆこと我任とるこちの。よく孝養我竭

たゞ加以生育まゝ父孝吉ゞ表戒受嗣て忠孝援郡の壯役なるべき
君を練まうんかう景連生平ゆ疎遠ふて事の難戒みなゞとそ養文を
求め穀を借る渠ゝく恩戒ある
拳ゝく妄房一四を平均ゆるクルと疑ひ
そ糧を齎ゝ讐ゆ刃を藉をゆ仍ゝり。ロ出陣の准備
惲るこいとなくまうんめぞ。義実ゝ
行る戒うゝくゆるゞ死讐部
士ゆせざるえ況や妄西景連ゆ今ゝゞるゞ仇ゝぬゆ故ゝるうゝゝく干戈を
動ゞゝ戒多名の軍ゝゆ多名の軍ゝ人後ゝゞようなる戒ゆ故ゝる。
と敦圍ゝけく叱ゞ懲ゝゝく則米穀五千俵戒妄西ゆぞ贈ゞゆゝかゝく
又その明の年義実の采地ある平郡長狭ゆ荒作ゝく景連が采地のゝゆ

尺穗ゝゝく登りゆけゞゝと曩ゆ借ゝ
ゆや難戒ゆ及ひゝり。當下金硯大浦ゆ窮ゆ主君ゆおゝうゞ鄰岡鄰郡急を
救ひゝく。相與ゝ技助け。その足ざる戒神ゞゆ好戒結ゆもその益ある。安
西ぬゝ去年の秋。黍の穀戒借ゆひゝゞ。ゆゝゞ
ゞ戒返ゞゝるゝ。彼人ゝこゝゆ
とゝうゞゝとゆゞゝゝ。義実ゆ大浦を。こゞ子のゞく愛ゝゆゝゞ。他乃娼と
あゝんうゝゝく。陽ゆいゝく叱まるのゞゝく。志戒激ゝゆふゝ渠ゆ羊ゆ北を
超ゝ器量骨相親ゝ劣ゝゞ。ゆゝゞ今ゝ茲ゆ東條の城主ゆせぞや。と豫ゝう。
用意戒ゆゆゝゞ。その年の
一の功を立させゝく。その勸賞ゝ挙用ひん。と。ゆゝゞ最中なるゞゆ志ゝく
のゝせゝうゝ。ゆゝゞ。汝が淫論ゝゆが意ゝ稱ゝり。使者ゆ沒を遣さん。ゆゝ

とて。五千俵残さるゝより。債ふべき由様よく〳〵と叮嚀ふ口状をさゝげ。さて次の日彼処へ遣りのみさる程ふ金碗大甫孝徳ハ後者十人あまりねて。馬ふ跨。鎗をかつ〳〵未明ふ滝田を啓行りく。只管足掻をいそぶ〳〵夜を日に継ぐく景連が真野の舘へ赴たく。その老党茲戸訥平ふ對面し。里見の米地五穀登らざ。縛そや難義ふ及べるよし。主命を辞ふ述てく。五千俵の米をぞこひぬ。その口状慇懃ふ訥平ハ應うけく。則主人ふみやこん。とてく。そぶ侭奥へいゆ死りぶ。ふ日あまりて。今うと生ふとまび大輔ふ對くいふ。向ふ米金の数残委細ふ主人ふ告こうた景連。對面さべれども。いふせんいぬる比より。風邪ふ犯さとてく。今ふ始起ざ。去歳の秋そのこより。危急を救ひのひ〳〵ぶ。もとも舎を竭りく。

先恩ふ答んと別ふ仔細ふいひけど荒羊の後なるべ。さらふもいまゞ物足らず。老党茲戸訥平ふ對面し。委細ふ主人ふ告こうた景連

縛の紛きふ城を出で。瀧田を投て走るに一里あまり来かけるが後を
とゝ後者をよつて殺んと大浦が石滴を掬て。咽を潤し。並木の松が尻を
うけて。流る汗をとりて。浩然と詞平が軍兵をおそく追蒐来る。
真先と馬を進めて。登踏張て声をとゞけ。孝徳今さら外戚を蓬に
汝が主なる義実が云ふ食ーさゝ浮浪人白濱へ漂泊ーて愚民を惑ー。と土
地を奪ひ両郡の主とるの足が麻呂信時を滅ーるの君の助けまゐれ。
かゝる是腰を折め臣附ーく出仕さゞ死ざるを大よ
そうみづくう傲慢僭と米を進らしとゝく。こゝを残債るを鄙吝るの至。
又その女児伏姫が妖艶さる残生を召。假と養女と擬へて。実ハ側室ゐなさ
きんとてく。五百君召せのひーるゞ義実愚ゆーく後るゝど。此彼めてく不
礼やう。時いまぞ五十らゞとてく。年来ゆしあれのひふ決行時も春ぞと

のひん。汝ホ主後が愚さよ。いまぞ五百君ハ三千の軍馬を起ーく。
とるや東條の城を乗取今ハ滝田を攻るゝバ。必ず退るゝ途ハなき死の残命をこゝ
降参せよとほざ死るあざく廣言を大浦ハ彼のあくざと鳴乎がまし。や嵐の
軍ごる。稚死ようこと残生るの足が君ハ主なる景連ハ麻呂信時と称と義ゐ
背死。その地を合ーく足ろうとせざ。さるの足ごるの君ハ谷戔を加えど。乞ふ
随ゐ鄰郡のゆと結せるひーる。死ようるの死幸といふごとるの。又奸智をめぐら
して曩ゐ敵の来を乞とう。約と背をく。今ゐ返さゞ虚を窺ひ出ゐ乗じく。
大軍ぶりく攻撃とも皇天ハ不義と與せゞみづから敗を取らんと境と
照さるゐー。主命ぶ受なが。縛成ざーく空ーく還る孝徳がく裏ゐ汝が
頭と引抜く。見ま。よくべ死え。其処を退そと滝引揺く。後者ホ残左右ゐ
後へ群立ち。各ヲ勢の中へ面もゆらざ突く入り。縦横ゐ蹴ふ戦ふ。さるゞが

金碗大神ハ主従僅ホ七八人必死と覚ひ決めふけまぶ射れども矛も物とも
せび薙ふ薙れつ追ひつ久しふ半時あまりの血戦ふ敵ハ三十餘騎殺れつ
死骸ハ路上ホ横り船方ハ七人命を限りと大神をとりふなりしどな
一歩も退ぐぞ訥平ホ組んとて出没不測ふ走つ走とど敵ハ目ホあまる
大勢え遂ふ人馬ホ隔らまて矛も遂べうもあらざりけり夫君子ハ欺く
べ隔るべうぐぐと賢者のいひんこと寔ホ左ろ義実ハ蓋世の良将仁心りつて
民を掩ひ義信りつく鄰郡ふ交る景連好ホ弥彊るゐ。これを欺くふ
その方をりつて猶且ニ年戎疑ぐ君子の人と稱さるふ足らぶ義実
子産がオありとも。その欺ホよもとさとてる抑ホ宮ろうぶや。

東都　曲亭主人編次

第九回

戯言を信て八房首級を献ル

却説安西景連ハ義実の使者なりける金碗大神を欺き留めて。その弥
そのひホ軍兵を部ゐ。俄ふ里見の西城へ牲ニと推寄さり。その一隊ハ二千
餘騎景連みづから主戎ゐて滝田の城の四門戒囲ニ昏夜をこゐごこれを
攻むその一隊ハ一千餘騎基戸訥平ホ戎大将ゐて。堀内貞行が竜ゐる東
條の城を囲ぜ両城一時ふ攻潰さんといやがうふまぞ攻登る。その縛ゐる体
稲麻の風ふ戦ぐ口く勢ひをきく破竹ホ似さり。これと兄里見の西城ゑ兵粮
甚ふ乏ゐ兄ホ民荒年の役ふ労ゐて。催促ふ後ろぐど口ハ米ニさるのこなまだ。

恩義の為ㇵ命を軽ㇺ。寄ㇵ我屑ともせざる。勇士猛卒なれよあゝ彼ㇺ。
をさ〳〵防戦ふるのみ。主客の勢ひ異ㇺ
る七日ㇵ及ㇺ。士卒ハおとろ〳〵堪ふみて疲ㇺ
敵の死骸の腰兵粮を捞取ㇲ。僅ㇵ餓よき
肉を食ふもあり。実いくこれを思ひ
卒我襲合さて容ふまう。景連ハ表裏の武士盟を破ㇲ義ㇵ違ㇵ好詐ハ今
さらいふもㇺ及ㇺ。さのみいそ〳〵敵ㇵあらぶ。彼両郡の衆我ㇵ
両城を攻敗ひ。ㇺ二郡の衆ㇵ
勝るとも。午角の軍ハきらべ死よ。ㇺが徳ㇲ
空ㇾ〳〵外ㇵ仇の大軍あり。甲ていまぐ
百樊噲あるとのことも。餓ㇾ〳〵敵我ㇵ
そのㇵ我のくことの城中ㇵありとある。士卒我殺さふみのびんと。今宵衆
皆鳥夜ㇵ乗ㇾて西の城戸より走ㇲ去ㇲ。辛くㇺ命を全せん。その時城ㇵ
火我放ㇾ。且ㇾも妻子を刺殺ㇾ義実ハ死とべ死なり。二郎太郎をㇾ
義よ。その術ハ箇様ㇾと精細ㇾ示ㇾ〳〵ㇺ
りつども。我禄を受ㇾ妻子を養ひ。難よ
只頭身の息の内ㇾ寄ㇵの陣へ夜ㇵ
下ㇵ報ぜん。この餘のㇾハ轟ㇾでうりも願ㇾ
義実ハこの件叮嚀ㇵ説諭ㇾ〳〵ども。兼引
もん子。二郎太郎我成ハ十六歳ㇾなりけり。この父死実の
〳〵これとのㇾうちㇵ我ㇾをハせ〳〵ㇾが言果べもあらざる。父の乳色を
窺ひㇾ。弱冠の某が異見をやよるㇵあら。ㇺ我ㇵ天の時ハ地の利よもろ〳〵

地の利八人の和よろこ城中既よ兵粮竭く士卒飢渇よ遍き疫脱れ去らんとするのなく併死を究めし八徳ふより恩我あり八是只その和の致る所故人の性八皆なをなじ。ようや寄手の軍兵ろをとも若悪邪正八去りつらん又兵粮ふ竭されじ毎日ふ煙をうそさせるへ敵くまでとハ思ひうけざ短兵急よ攻給はざる八父の武勇よおそる〻ゆえなるの紙撰く城樓ふの〻寄手ふ対ひ景連が非道の行状明白無言を破り。恩我仇とて不義の軍を起しことを。その罪我責さ世るゆえ士卒忽地慚愧〳〵く攻戦八のちろ失なん。そのとき死城より独よく生口八一揆よ突崩さん。勝ざとハいふとあるべからざこの説八いかゞあらん。と言葉こい演るへ衆皆只管感佩〳〵く。ゆるべしとやうにはあらず。我実八弑よ。その声をきりの我生〻景連が不義を数へ。その罪我責さ世るゆえよ。日来八声よくこらゑれを餓

て久絶く息つくど城樓八高く堀八廣〳〵。腹の筋のよるまでに口を張り面をせくのごとく呼ばゝ士卒我敢ふよ〳〵もざるとの肺肝を摧のへど輙く敵を退る謀我ふのごとく凝てふ其処ふ至ら。杖を曳園よ出徜徉ろ八年来愛さ世のごとく。八房の犬八主をうそく尾を振〳〵来ふけり。さる程よ我実八熟ふ脱れ去ざる。赤う〳〵むざうふ八罵ごとも敵の陣へ声届ら。ど果八涙ふかれくれてかう唆我ろ八足定ふよ肉脱て骨高〳〵眼おちいりてく。右ふ我りてその話我拊嗚呼汝も餓さるの我士卒の飢渇を救んとやごころよいとあるのごとく我ふ汝がるを在ま〳〵。賢愚その差在ありといへども人八則萬物の霊ごる我のごとみる智恵あるよ教ふ後ひ法度我守よ礼譲恩義を知るのゆえよ欲我禁め情ふ嬉我く死さる由天命時運とおもひ諦め

なん只畜生ぬいその智恵ろ〳〵教戒受ぎ法度戒ちらぎ礼譲恩義を辨ぎ。欲を楚るよりも已只その主の養ひ水一期を送るのみのみれば餓て餓さる灰戒ぇ犯ろ〳〵食戒求くやもく媚ごまでも又不便なり。現畜生ハ恥辱を犯ろぎ。いと愚なるめろまごども人よよ〳〵主の及ざる所性の勝るこ所ぞさればこ古歌に

鳧をりくよくれを弁ぎ居。ごまら〳〵人のみもぞひぐまの人ハなろく〳〵ろたの戒。あろまホ犬のぬ〳〵戒ちやねる恙猫和尚の縁とろおや也今試ま汝ぬ向ん。十年の恩戒よくちるやの〳〵その恩戒知るとわろぶ寄もの陣へちのびへく敵将安西景連戒喚殺さばころぶ城中乃士卒の必死を救ふまで至らんかまごぞその功第一なり。いろホこのろよくせんや。とうちほく笑つ向ぬ〳〵八房ハ主の白戒つくくとうち向上てよくそのこころをゐとろが如〳〵実いよく〳〵不便よおぼ〳〵戒ぞ又既戒麼。此月を掛汝勧て功をとそよ。

ちろろバ魚肉ホ飽まべ〳〵と宣へバ背向ふりて推辞るごくろえ〳〵バ義実ハ哉れまま向ふまて又ちろく。ちろろバ職を授ん欲戒ハ領地を完行ん欲官職領地も予ま〳〵ろバろぶ女壻ホ〳〵く伏姫を妻せん欲と向ぬふ〳〵と宛ホこそ八房ハ尾を振り。耳戒擡つ。瞬もせば主の顔戒熟視くこと吠〳〵バ義実ホくとうち笑ひ現伏姫ハ予ホ与ぬ〳〵汝を愛さるのみなまバ汝ホまべ〳〵とこそ必ずらの縁成るとろ八女壻ホせんと宣まバ八房ハ前足屈て拝さるやく。啼声悲〳〵ゆえホ宣バ義実ハ奥盡さ。あさ咏や。ある忌こ〳〵ろなる死戒与ぐらう。慢なまほ〳〵とこそ〳〵ごろ〳〵貽さ奥ゆぞ入りぬ。かくてその夜ハ大将と士卒もこの世の名残そと思ひ決めく〳〵ろの翌バ義実ハ霄の間ハ且く後堂ホそろ〳〵まく〳〵夫人五十子。息女伏姫嫡男義成とそゑめよおろく世老堂ホ氏元ぬ戒ほとり迎く召聚合て。かん盃を賜りぬ。さろま長柄の銚子のこ酒一滴も

伏姫
戯言を信じて八房
敵将の首級を献る
八犬伝巻六

里見ようさ縢
杉倉氏元

かのつまこゝに水戸のこと言ふ代者ゆへ枝つ先の果子少し出されさるそれも大くさ
蝕そく生平ゆへ下司もこうべ。と思ふ拍ざる時ふとうそいと悉くいと愛ど席
上殊ゑ蕭条ゆく只四表八表のおうくうち或ハ来〳〵ふ死。うち擲せのひと。寔
期のよゝハ一言も仰出さるとゝうのそ。ど死を穴九めくる主後ハなのく水勇ゑ
あり。かるとそゆも武士の妻とく子とく黒髪のなが死別淺惜あぐ音ふ
こそうく。薄ゑ住む虫け。ふとうう表うう鮮さ。濡るゝ袖の始なるぬ泪ゑの
中推量る女房なゝハのろ水ゑ涙の泉堰とあうねく。おうど歎ゑ水沈ふけゑ現
理うと氏元ゑハ忽ち。ど斉一嗟嘆〳〵。迭ゑ目と目をあハされば。七日已来一粒も
食せぬるとも人も赤眼ハ四ゑ類骨立尚死ろ孫ども主とある。顔色焦悴
枯稿さう。今宵十日の月没く。鼈て生んと豫うう軍令ゑ集る雑兵水もどひ
ろひゑ長首彼首ゑ集やそ。洲と鋒ゑ酌をかうと水ゆもうろる星の新澄ろ

細ゑおく霜ゆおく消るん月ハうゝや双三比ゑなるふけゑ時刻ハよ。と言
実丈子ハゆたゑ澹投うけゑハ五十子伏姫傳の老女專女がのろ共ゑひよ
て取くまゑうとゑ大刀長刀のさやうなる風がのて来る遠寺の撞声緒
行多常と音ゑなるゑ浩処ゑ外面ゑ犬のろく声をくけさゞ衾寒耳欹側
て。彼ハさくく八房ゑ異なる声ぞ皆ゆざやゑ生てゑよゑと宜へゞ乗りの。
と表のへざ西三人衛と立く縁頬より指燭を抗八房こと喚うけく。そえ
かうゑとゞお母死ろ生こまろ死人の首を縁端ようち載く八房ハ砌石ゑ。
前足うけくつくと件の首を守りてをりこんくいふゑとぞろゑ紀ろうの劇
表ひく舊の机ゑ走ゑ入りかるとゑ
あへど驚をあ母まざるのゑ。そゞ母ゑ氏元ハ被某弐ゑうりく餓て六
人の亡骸を食ふも犬のかくひゑ是ゑよゑしゑりそまろる音ハ認れはものろう

ござや。御遊五十子伏
す。追ひよせ追ひよせ追ひ落とすが再びさてんと
す。そのとも左衛門尉義実ハさやうに
ハ。みえ。ず。と呼とゞめ大ハをとるとも妨るこゝろ
誠ある隨身の射方の兵藏を傷ひるがへ。そが俤ゆかさ一おれがピこれみぐろう
いあれよくそんとのひかけくそやと立ならべ氏元ホいふもさてえ男房女房散
動渡りそ我ハ燭を乗て先よ立義ハ主の後よりてく魚りろ九ホ縁類挟一。
と件の頭巾てる狩よ義実ハ眉根をよせ木曽めハ何とろてそる鮮血よ塗れて
定なるら狩どこれ景連よ似てるろ一洗ふくそよと御ござ氏元も亦拂里
るがら浄ら鉢のほとりへよせくて柄杓よ水弐汲そうけく頭よ途るく血を
つく遍ら洗流こて主後文よこ互弐これが果一く敵将景連が首級ホ疑ふ
ぐうもあらぢ分明るるよ。と宣へバ金疑ひを解なが一おごそその衣弐まる
よーもるるとど人の及がぬ軍切よ当下ハ義実嗟嘆一く約
奇怪るるの弐これまでの前象後兆るの約
るよ蜻蛉の命を捨んと思ひ決ひ士卒をいざく放んと思ひ決ひ士卒をいざく放んと思ひ決ひ
ろぐ為とろ鄽ホ園へ出るおごこの八房ぐいとうう餓ろ弐ふ八房ぐいとうう餓ろ弐ふ
彼を思ひ此弐憐ら汝り寄ふの陣へ忍びくく景連を咬ひ殺一て城中るる
数百の士卒を救ふよ至ふバ日毎よ魚肉よ飽せんとのごども飲ぶ乳ごとなー
さるごハ所領を宛約人弐重職を授人弐とのごども飲ぶ乳ごとなー
生平ホ汝を愛とる。伏姫を取ら世ん弐とのひつるとれよ八房ハ弐しげなる
乳色ろく尾をふるまく吠る声常ゆハあらぢらと忌一。戯言ろり共忌ひ
ろる出ぢとのごとなの弐ゆの弐慢る足。と打とりそろく。そら修後堂ホ人を
聚合宴期の軍弐よ眼るくそ。そのるハをや忘足ろふ犬ハ却ら足下ら弐。
忘れ後ぢこそ狛剣ろぢ虚言を実るとろく。寄ふの陣へ潜びくるとも。二三千騎の

大將なる景連を輒く殺しそその首級を獲ることと不思議とのみもおもはりおほきに
るるまく。と八房をさし招ぎ呼び近つけ。只管賞翫ものが氏元ホハ又さるかぎ
驚奇とうく舌を巻き畜生ゆゑく人よりも功あるものとそな君が仁心徳
義ふかきの致。偏神明仏陀の冥助ありてそと稱賛をかりしきよ升候の兵
庭にまぢかく走り来つ敵よ異変のつもあるべし。速よ殺よ。
勝利疑ひあるべからず。とまうすを氏実はあらまし時なれ。
ろ。いで殺てよとのそび立て諸隊よ令伝ふさせ大将みづから寄よの陣を離れん
とす。八犬士者共成とを先景連既よ死しぬれば縦寄よの大軍なりとも追
拂んといと易う。おつる我ら大人能くしく。出さぜるの物体ほ口共成氏
元をさし副ら且くるの足なん許さぜるべと諸ともしく庭門よりまえ出
ぬ。ものあるさそ氏元の士卒我勝ちに逃ぐるを。如此のつあるさそ景連残兵とらぬ後
三百餘騎を二隊よさころち共成ハ前門よりまえ氏元ハ後門よりまえ城戸を颯と推開せく。
乱れ騒ぐ寄よの陣へ驀地よ突て入る勢ひ日来よ百倍して當るべうをおら
ざれバ敵軍おそく辟易して逃亡ものの半ばるべみなまふ降参ぞしぬ。
鬱悒うつ多人の中よその夜もすがら明かけり。かくて共成氏元ハ山のごく積貯
さる寄よの兵粮ほぼたく城中へとり入れて則縛の処よ実よ報知なれバ降
ますせ。めどもを悉釈ありて氏元よ領ぜひつ今朝より實よ煙を立て竟城
せ。兵ホよ白粥をまうる小一碗の外あるべくく餓て食よ飽べ盈地傘を
隈なく故ら加以彼兵粮の半を散。城外なる民よ賜ふてをさく飢渇を救ふべ
拝。受ること且残領ち鼓腹して傘を延そ。ものの為体輙魚の水を獲るが
如。かるまし。狗よ東條の城を攻よとてく向ふ。安西景連が老党。茗戸納平

ら○とへ攻給ども件の城ハ滝田ゐまゐくの半月
の貯糠あ○ま○負ハ敵戰拂ひて滝
雨の夜風のまゆハ敵陣へ夜討さるゝと再三さびよ及びよけまでも郎党の勢ゐ
比ま○寄ゆハ大軍なる我のく捉といくども烈風の塵を拂ふが如死ゐ至らど
敵ハ新隊を入ゑそ○弱ゆ乱ゑ
旦京建ハ果敢なく敗ま○て滝田の囲ゑ頓ゐ釋ゐ曹司義成ゐ扶舎氏元を副
ら○ま○大軍當死へ援来るよ○誰いふとハなく風伝ゐと城兵ハこゐ戰ひて
勇乱日来ゐ百倍ゐ寄ゆの兵ホハ兄を攻て劇騨ぐ○大ぐ○なぐ○ぢの
役納平ハ彼どもゐぬもりくちそ○士卒を罵ま○激をめぐ○きのふゐいや
まぐ○風伝のまゐ○味ゐ現虚云ゆハあぐ○ぢべ○とゐべいよ○怖乱づ○軍
兵ホゆハホあハせ○納平ハ男親兄ゐ西三人を後へ○鳥夜ゐ紛れて落ゐせ

○ま○天明ぐ寄ゆの軍兵ハ大将逐電せゐよ○残ゆやく○ホ知てぐれハ喪皆呆れ惑ひ
つ○生大将の憎さよ○とうも服さゐの○せんさべなのま○ハ緒軍育一神後ゐ城
中へ使者を遣ゐ○皆阿容ぐ○と降参ゐ負ハ○ま○てのよ○残滝田殿へまゐせそ○
騎馬の使者をまめぐらせつ○その使者ゐ滝田ゐ勝軍を告来つ○兵士ゐいき
あ○ぐ○かく○て寂使ハ東條へ来ゐ○て景連ぐ命ゐ○せ○王ゐ勅ゐ告ぐらせ○ま○曹
司義成ゐ天将ゐ○て扶倉氏元ゐ副と○不日ゐ出陣のよ○残告ぐ○ま○ハ當地ゐ敵ゐ拂ふて
館ゐ両城ゐ攻んぬるといふ負ハ○ま○ハ遣ぐ君命ゐうけゐ○ま○再ぐ使者ゐまめぐ
せぐ勝軍ゐ加見○ゐ○ま○ハ曹司ゐ出陣ゐ今ぐ○とぐ○ま○ハ狩ゐ豫○て武実ゐ徳ゐ
菓ハ安房朝夷ゐ士麻呂賊景連ゐ亡びぬと伝ぐ○ま○館ゐ両城へとりけぐ○
その守将ゐ攻滅○ま○戸納平ホ首級ゐ○て○ま○老ぐ○ちたるゐ数十人東條へ
来つる日ホ武成氏元ハ陣○て負ハホりろ共ゐ縛ゐ数ゐ書写ゐ滝田ゐ城へ注

ーん。進じて件の首級を献ぜんに実に安房朝夷のものどもを召せひく物騒被させ。御曹司と氏元ホゴ御教書を賜ハつてひく諸の両城を守らしめふかくてぞ四郡一个四義實管領しめへ威徳朝日の昇ほどく徳澤ハ時雨の潤さどく好民ハ去ヲ吾人ハ時を得ん。夜戸を閉ざ又遂さる残拾よりの日久後ハ牽まろ濱ホ波風立ざるのしるべ。このとき滝田へ書を贈ひそく一四平均の倉に立つべきそや羊来ホるのしるべ。功業を稱賛し室町将軍へ伝ひそへあげて則里見義実を安房の四主ホおさしまるー。剌治部少補ホ補せらるよしや。者を進ぐせ土産種々に献る。持氏の季子を成氏とのゝ。ありて成氏ハ鎌倉ホ居るとぐるのゝと。康永の年間下総なる許我へ移住ーひくり。成氏のゝ九代紀ホをえう。ゐ。ゐ。ゐ

さごといふとゝろく二足ゞみる二犬養の職を置奴隷數卅けく出るとゝ先を追せ入るとゝ先ゝも護らせ寵愛耳目を發馬せども八房ハ就就低尾をふせて食ふをも睡らざいぬる宵敵將景連が首級就りて來し緣煩のほとりゟ來て立もさらぬ主君の生させ給ふ就見まゐ緣端ゟ前足を懸ゐ尾をふりて鼻を鳴らく。こゝのとゝもゝのあるが如し。ゐつまとゞも美実ハそのさゝろ就るのゟざゝゐづくり魚肉餅るゝどを折敷ゟとゝろく賜ゟけまとゞも八房ハ入もゐつまざる。ゐつまる頬りく筒様のゐゟ食かさゝなゐまゐ美実ハ犬うゐゟ犬のさゝろ就推量りく。ゐゟこゝゟゐゟとゐゟ世ゝうが急地愛を失ひく端辺ゝゟ出ゐゝを犬養ホーて八房ゝと遠く牽ゐく去ゝせゐゟゝど動さまゐゟゐゟ後ゟゟ果ゟ據を引離て梵天人を喚ひ倒し彼緣煩よゐまゐ跳登りく奥ゟゝろ入ゝ彼此と奔走まとゐゐまとゞも二足就追ふ犬養ホハ憚の関の戸あまゐゞゐ就就てゐまゐよ。

あまよと叫ぶの男子のゐゟざゐ奉せね犬ゟ喀狗ふゐゐゐゐれが侍女們ハ一斉ゟゐそまゐ我ひく立驚き彼首へ走れが是首へ逃此方ゞ追へゞ彼方走る。犬のろたゟ人も狗ひく障子茶襖を推倒し叫び吼つまゟゐ伏姫ハとゝーゐゐ後堂へ追入まとゝりこのとゝ死姫の用人もゐく書紫ゟ肘をゐゝーく。枕の草紙を御覧ざるゟ翁丸とゐ犬ゟ勅勘を蒙まとく捨らまーー一ゐの廷又ゐるさまとゝゐりまゐまとゝもとりどもつゝ美ゝ昔ゐかゐるゐゐとゐまとゝもとりどもつゝその姫就操返しゐゟ侍女們ゟ叫ぶ声ーゝ背後へ走り来ゐゐゐまとゝその疾ゞ飛ぶゞゞく林ゟ立る筑紫琴を横ざゐゟ倒ーうけて裳の上へ磯と叫ゝ投ゐ残吐嗟とゞりてゐうゐまゐゐゐゐ犬ゟ則八房ゝ。その面魂生平ゐうゞゝ。ゐつ病つゝゐるゐうゐゐゐゐと書紫を掻生ゐゐゐ立ゐく去ゐゟ犬の臥とゝ前足を。長ゝ枕ゟ突入ゐまとく。進退特ゐ

不便ふり。現ヨ十年畜育て大死ふるこゝ情よ
なきものゝ。ふるまひ。ふるこゝ後古ヨ引きそゝきく頻ヨ人残ゆせるへ専
ゆこゝせうのめ女小扈後女の童。意もあくび走来ふ。この為体ヨいよくおろく。うち驚くのこ
近つ死ぬど引捉来ふる等のく。席蒐を撃こゝとうち敲死此こゝといひんく
もそるく追生んとをれべへ房ハ眼を瞪ら〳〵。牙を見ひ跳ふる形勢凄ど。れハ
侍女。們ハ等帝弑捨ふ。逸巡せぬものゝ
けん短槍引提ふ来ふひふ。戸口ヨ立ふそ。ふる人女の童ヨを叱ヨ退けて
遽〳〵進入ヨ。ヨをふ畜生とく生ヨ。知ふ
追ひ出さんとあるどゝも八房ハ些ヨも動ふど。信と向上て牙を張りまもく。味ふる
声凄〳〵。闇ヨかくん形勢ふり。実ハ勃然と怒りヨ堪ど声をふり立理と
雅ヨ。ふるあくる畜生ようのいハ。益ヨ似ふるヨ。ふりつくん。あくる

ざいふひあり。せんと敦圍あくど槍とり直て突殺んとふるへ伏姫ハ刀を措ふ
やよ待ふ。ふる人貴犯ん方をいろ〳〵ふるまへ牛打童ヨ等けて畜生の振舞ひ
あんふ我下〳〵ふる物体ふくハ待ふどやゝ。耶やふくも待ふハ枉て赤さ丹ふひ
祝とひみく貝弘拭ふへ。実ハ突ふける短猪を引く挟ヨ異ふる姫ヨ諫
言ふるいよ〳〵あくびふく。といそぐのへ。ふる人ふる涙を禁め顔を改めひと
憚ある工ふ犯ヨ今も昔も和も漢も。かゝ。と死君の政事。功あるハ必賞あり。罪
あるへ必罰あるもの。功ありて賞ぬ。ハその罔亡び。ふる
ん。譬ハこの犬の如死功ありヨとも賞ぬヨ。罪ふるして罰弘ふる不便ゆハあ
さどや。とのふ弘義実ハのくど。ん方が異見甚さぐり剛敵頓ヨ滅ふう。犬の
為ヨ職を置食ヨ珍饌美味を與へ翫ふ錦綾羅を賜ふかくてもその賞ぬ
とのや。と結ヨへハ駁弘撓綸言汗の如一と出てくさぬ喩ふ待ふん。又君子の

援引事實 昔高辛氏有二犬戎之寇一。帝患二其侵暴一而征伐不レ克。乃詔募天下一有レ能得二犬戎之將一。吳將軍者賜二黃金千鎰一。邑萬家。又妻以二少女一。有二畜狗一。其毛五彩。名曰二槃瓠一。下レ令之後。槃瓠俄一頃倚二一頭一泊二闕下一。群臣怪而診レ之。乃吳將軍首也。帝大喜。且謂二槃瓠一不レ可二以妻レ之一。女又無二封爵之道一。議欲レ報レ之。而未レ知レ所レ宜。女聞以為。皇帝下レ令不レ可レ違レ信。因請行。帝不レ得レ已。以レ女妻二槃瓠一。槃瓠得レ女負而走入二南山石室中一。險絶人跡不レ至。経三年一生二六男六女一。槃瓠因自決レ妻。好色衣服。製裁皆有レ尾。其母後以レ狀白レ帝。帝於レ是迎二諸子一。衣裳斕斑。言語侏儒。好入二山壑一。不レ樂二平曠一。帝順二其意一賜レ以二名山廣澤一。其後滋蔓號曰二蛮夷一。今長沙武陵蛮是也。又北狗國人身狗首。長毛不レ衣。其妻皆人。生レ男為レ狗。生レ女為レ人。云見二五代史一。

一言ハ駟馬も及びがたしと聖経にもあるとかや。物の本ゐも引て怪しむ景連を討滅して。士卒の餓を救ん為。この八房を増ざまにこれを許しまゐらするとも一ト度び約束をひるがへさず。假令そのとき苟且のわん越ゆるもあらばこそ。恩賞ハ君が随意許させ給へ。呼べるも及びがたき大が気ちがひ。渠大功をたてゝ及びがたき輒く約を変じ。代るに山海の美味を賜ひ又綿繍の衣食義残のものゝ足なんと世ゝを生ゐ人ゐかゞ朽をしく恨めしく思ひなんとも。その賞ふさはしからぬ戎許さ世のひとも皆前世の業報と思ひ決めん國の為後の世の為乗さ世給ふ子を生ゐのぞみ畳生道へ倡せても政道に倦まあなき死ん戎民ゐ恩愛をさまの業を勤てこそ。乗よと云ひ異類の後の小女子ハ大牛世界戎常破て約ふ叛きし。彼景連と何をかもつてか異ならん。よく治めゐかまし。明を乗よと云ひ異類の後の小女子ハ大牛世界戎常破て約ふ叛きし。彼景連と何をかもつてか異ならん。よく治めゐかまし。明を

ふ袖の上に落てたゞ雷雷の玉ゐおくのみ来る秋うべ。実ハ黙然と笑ひ玉ふ母に嘆息して引提し繩を真哩と陰鳴乎悔ゐあやまちぬ法度ハ上乃制る呼上まづ犯して。下犯を見大乱の基本ゐり。ゐ是実ハ八房に姫をあふの名ろ〳〵。なりといへどもこゝをといひつゝ。ところ彼と我口よりも生て耳に入る蔺相如勇をのく。夜光珠ハとりかくともとも返しくこゝろ口の過現禍の門に外ならじとか犬ハこゝ父の仇ゐりきゝてよつゝ〳〵来る戎おのく前家乃死よあらぢ。ニの子が幼雑りし時立願の為潜女小洲崎の石室へ参籠して。祈たこの稚児がこゝの病ある夜とあるく日とたなく尋つるゐみる悪夢の崇ゐよる。ニ三戎委細に視明せば。天機を漏ゐのおそれ二ありて伏姫といふ名ゐよりてみづから

さと曉るぶ曉毎なんおろそ怠すそこれらのよ
なう　きょうまいね　　おこた　　　　　
姫ハ嘉吉二年夏月伏日ホ誕生せり。因て三伏の義をとりて伏姫と名けそ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
この名よつねて判せよとハいふなる故ぞとぞさるをかうさるをいとども
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
彼曹公が三十里を一日の遅しとおもふ人さへふもおふ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
向ぶやと待ホ久しき年歳をかけふもあらうく解ゐう。伏姫の伏の字ハ人ホ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
犬ホ從ふとの訣尼のあるべきなり。禍福の中より迸る所欤名詮自性といひんべ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
まうぐ勅念深く崇るハ残雑とハおもふ定包が妻ありけ
る玉梓ぞとやおもんぞとん彼婬婦ハ主を傷ひ忠良を追失へる隠悪の
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
答えあり。おもとどもに下さびハ命助んとハいふ
かおのれなおや。と子ホ憂ホの限り歎えせくに非狸の変戎復をホなんさへこの犬を
　　　　　　　　　　　　　　　　　　
出うせくと狸が育一ホのとおもく狸の異名を野猫といひ及玉面と顔倣せ。その玉

面を和訓よ唱ハ是則なまうえ玉つさと訓続迚ホも忌くべき仏語
つぐ賢一げホ狸とハ字ハ里ホ後ひ犬よ後ホ
心ひとおもく畜神一寵愛せ一を悔一けま一現天道ハ盈る残缺ハ月が教誨當れる
おもさ討後ホ長久よ百世害毒を受るとも何ら楽くおハバ犯面目ぬ！と狂よ
さとれ仏の限り覚盡一慚愧後悔おホハバ側よ果る侍女仆慰るハ。なるくふえど
老の怖さかた流を涙ハ滝のいと迫く。皆りろ
苦ら病を拇おろ一使るおぐふも悩ぬ数たよ淪むなる況や親のホさうよ狂推
量一ハ是ろホ。なさね不孝も罪重一さりろぐら。一旦鬼畜ホ伴ま一師従よ
俗りるれよ一残竟よ果さバ王則る命ハくもくなる仏のと号ひ出く付るなる
ふホ受るる人の身を受く生れて成長ホ親の遺體をホざくと畜生もやハ

機さるべければこそ。かくまで思ひ設けざりけれ。実頼ぉうち点頭て速めでさくいひ是よう。遠く異邦を考れば高辛氏の盤瓠が。よくこそ今の患を例ふり。又干宝が捜神記ぉ大古のよし大人あり。遠征して久く。ゆくえ知ざりしが。妻ハ世をすねてひとりの女の子あり。年ぇやぅ二八とぉぼえたり。父の家ぉ牡馬あり。かくて女の子ハ旦暮ぉ親慕ひ。いぬの一父ぅ戎衆をかりてゆきぬ。件の馬よくこれを信てや。彼馬ハ絆戎斬ふくそびるのよぅなる叛日来孕るまふ果しく馬ハ父戎乗せて。還るとあて嘶て元来ぉ。父怪とて女児ぉ問バ如此ぇのべあることを。當下女児ハ馬皮戎ふく。斉生ぉ掛ふ。皮ぉかなぶてものぅに吾倩を娶うやいふと罵ぁバ。その皮機地と落かゝるを。女ぉ襟と推包ぉ颯と飛上る風ともぉ中天ぉ閃紀登ぅ次の日庭の桑の樹ぉその亡骸と掛ぇり。是奇ぇとの父ハ信ぐぇ元ぅ。唐山ぬハ魏晋よりのひのそなべ小説ぇ被荀もぅ戎命せぇ約ぉ背るのぇなのぅさぇ。ニ戎殺ぇ人ぬぇ。ぉぅ獣ぉ於ぇるぬぇ。ぉぅ獣ぉ於ぇるぬぇ。ぉぅ獣ぉ於ぇる

第十回

禁を犯して孝徳一婦人と失ふ
腹を裂く伏姫八犬子を生るゝ

義実の夫人五十子八房が為体を人の告るに驚き死す。嘗て寵愛し遠ざく伏姫のそのまゝ子舎へも来ひしぶとそを刎陝までも侍女たちを戸口より治部殿義実をいとまをしまゐらせ姫みづからの死のち親子が中の犬を置て同衾の最中にそのまゝ果るまでとそく窺ゐ潜然とうち泣てゐるほどりとゞまりて侍女たちを左右へもやらでおのれ一人撲地と伏路やあらく躁れ果ぐるをあらざまたゞ支加乃沈こゑを惜ぎ泣ゐたゞ哀実八悔ひひく。うちそそるのこゑ抱宮ぐ伏姫の母の背を掻おろし又抱おろし縁由をゆら〳〵と揺ぶり母うへ〳〵阪紙摧く涙を拭ひゆきぶりつゝ歎伏姫よりも怜悧く

まうくる侍女たちの御淀ぶ表裏ありて賞四割の道直れとそ名残汚し身を捨ぬ。
そんなふうな考ありて此情ふ悖り俗ふ背るべ誰ふ入れを誉ん心持ハいつふぞやと慰められて
の二親ろうねもあらざる母が歎ぶ域なりけり。さやとそ心つよー幼稚
とその母病なる母の苦労をやうやくよ昔かこをふるぶきぞふ生育ぬべ又ぬ
兄婚に漂致ハ月も花も及ばぬ我いつなるべ。
ざふもおぼさぬハあやふかりける物の怪のそう移死亜るふなるべ。やよ覚ぬ人。
覚のへ年来念ぢる神の加護佛の利益もなき死世欲と諭ふ泣ハいとせあそこを
返一の母の慈悲ふ伏姫ハ堪ぶし涙を袖ふ推包をきう宮へぬ不孝の罪かりたが
上ふの厄重一親の歎ぶもかへりこびる死後までも名を汚をそ是哀ぬよ
伏ふ祟ど命運の致を呼寇ふ脱当ぬ業因と必ひ決めく伏るなること有衛世
と左ひ小掛ふ殊数さやと右ひ小取り。ふふハが幼稚ふ足と死役行者の化

現とゝもうん。お年を翁ぶてふせーとそく。賜りしより身を放さぬこの水晶の念珠ゆゑ。
数とりの玉ゝ文字ありて。仁義礼智忠信孝悌と続きてる。この文字ゝ那所ゟ
あらさゞ又淂ーく書ゆるぐ。自然と生ー見れん年来日来くひゐ觸
ことども磨滅ぴーと死ゆくりるく元ゆゑ八仁義の
八字ハ蹟るくなゆまく異るる文字ゐるりこの比ゟまゞ八房がこゝゟ
懸想をゆるふるん。こゝ抔一の不思議なる。過世ゟ定る業報欤と歎くハ
きのふけふのことなゟぐ。その期を俟ゝで死なゝと思ひいゝゝ遍ひゐ刃を
とゝもるぐら否この世ゟーく悪業滅ーゆゞ八後の世ゟ浮むよそぶいゝ迚も
あゝしのゐゟち唐土のゐる果を神と親とゐ仕せんのの紙と形の死浮世の
林ゟおひゆり。されらのゟ我かーくゝと暁ゟるぐん恨も忽地散てるりくゟ。
ゟひ給さゝゐゐんなん。さても十あまり七年のあん慈愛を他ゐ世序。子ゝ
あーゞと前世の怨敵なゝゟゝと思食ゝ今自前ゐ恩義と絶郎勤當なーゐゝぐ。
月もゝろく受ゆ恥辱ハ又生れ来ん世のゐゝと墓なく頼む弥陀西方浮の御ゟゐ
ゝとゝゝゝ糸落尾花が下ゐ刃をぐ置とゐ竟ゐ悪業消滅せぐ。後ゝとく果ゆるん口ゝ
しれハこのゐゝをゝく許さ社のひねとさーゝ社のふ隊数の上ゐゐゐの後数
そひくのづ百八煩悩の迷ひゐ解ゐ母君ハ疑ーげよ頼うち熟視さゐでゐる
るゐゐぐ初ゐり如此ゝと親ゐなゝとく告ゐハぬ什麼その殊数ゐ顕ゆゝいゝ
なる文字ぞと問ゐハ我実此ゝと取うてうち返しくつくゝとゝく嘆息ーー五
十子ゐひ後ゐ仁義礼智の文字ハ消ゝ顕ゝてるん如是畜生業苦菩提心の八
字ゐり。是ゐりてゐゐるハ行五常ハ人ゐあり。菩提心ハ一切衆生人畜ゝゐ
あゝざるぐ。かゝゝハ姫ゐ業因も今当生ゐ導ゝてく菩提の道へゝけゝゝ後の
世さゝゝゐゝとくゐ寔ゝ貧賤栄辱ハ人ゐのくその果ゐゝ姫ゐ三五乃春れ

比より。鄰國の武士ハさら〳〵彼此の大小名或ハ男のゐ子のゐゐ婚縁を募來〳〵
さる。裁人といふ〳〵我もく〳〵と一切悉く斥ケ。今茲ハ金碗大鋪を東條ノ城主
ゆゑ。伏姫を妻セて。功あるなどゝ賞状神〳〵自戦ゐる。孝吉ハ剛だも。こゝひ
つ。言過夫〳〵畜生ゐ愛女を許とも業ゐり因ゐ五十子ハ我実をうしなひ
とのこゝひゐん只この珠数の文字我ひとり
慰めく。境おこゐ晴ぬ神の雨俤ひ声暴ゐ〳〵泣ゐかく〳〵あるべきにこ
ゐ後伏姫ハ今宵生んとて。その准備をぞいそ〳〵ゐふ。孝吉ハ
うゐ〳〵来んこゝひもかけど只この姫ゆゑと宥ゐ〳〵玉椿ハとり捨く。白小袖のゐ
龍表彼く。件の珠数袈裟ゐ掛。料紙一具と法華経一部外ゐ物をハ悉セ
ゐうどゐん送ゐ後者などゐ。かく〳〵辞ひく倶〳〵ゐごと柯如とハ去ゐ
後ゐ。八房がゆく〳〵随意いゐ。ゆく〳〵笛法華ゐ〳〵彼り
ゐ。ゐ死とゐ。なるべき准備ゐ。

ゐ。ゐ立ゐ去ゐ。今宵をゐ生ゐ命ぞと思ひ決めく出ゐ時ゐや黄昏近ゐ
べ〳〵。さるにゐん毋五十子ハいぐ別の惜けまぐ立おく。ゐ
泣ゐべ〳〵羊来使ゐ去ゐ侍女ゐ中ゐ是首彼首小泣倒ゐ伏沈ゐ物ゐ要ゐ立ゐ。
さゐ程ゐ伏姫ハ共ゐ消ちん露霜ゐ袖ゐうさ〳〵。と村肝のこゐろ〳〵ゐけゐ。
慰めく別を告侍女ゐ〳〵ゐ。外面へ出ゐべ〳〵。日ハとゐ暮て後園ゐ樹間
漏ゐ月さやうゐ。既ゐ〳〵ゐ。姫うゐ人ゐ出さゐ我ゐ前
よゐまゐ〳〵待ゐべ〳〵。當下姫ハ彼犬ゐ。ほとり近くゐち對ひやハ房執ゐけゐ
ハ。人ゐ畜賤ゐ差別ゐ。婚縁ゐ。ゐ分ゐ随ひみな数珠ゐて友と成ゐ。かれバ
下ゐ下ざゐなゐ獣ヨヌと見とゐ。ゐ畜生を良人と妻と成ゐる例ゐなべ〳〵。
呪てや吾侍ハ國主ゐ女児平人ゐ婦とゐ。ゐべ〳〵。さゐ我今畜生ゐ為ゐ命ゐ
をとゐ。ゐる。前世ゐ業報ゐ。併最君ゐ御

辨へ。情欲を遂んとするがごろ懐剣とりあつ。汝を殺して自害せん。又一旦の義と以偏ゐ吾倚を伴ふとも。人畜異類の境界を辨へ。恋慕の欲を断なんが。汝ハ則ち為よ。菩提の郷導人なるべし。殺すとならば。いでや。と懐剣を逆手に取て向結ふべし。犬ハさらに戒ろうけん。とうとハ。ありもちのつまが。忽地ゐ形拳。姫えん中門西の門。ち踰ち越て。君ゐ姫ハそゐ後ゐ跟ゐ。誓ゐが如き形勢ゐ伏姫ハ刃とおさゐ。母君女房の達ゐ。君ゐ胡四ゐ嫁ゐ。恨もやまくいとも。なるべし。扨も伏姫ゐ豫て送りの従者をかく。路次の程ゐりとゐ。

させ給ひく。竊ゐ遣ゐ給ひけゐ。件の蜑崎輝武ハ原東條の郷士ゐ曩ゐ扶舎君ゐて。氏えゐゐ属て森呂信時が頸取くよう。蔵実のほり近く使ゐて。年来ゐ輝武ハ馬よち疎ゐ。さる程ゐ輝武ハ馬よち疎ゐ。一町許後れつ。ゐん跡ゐ跟く。ゐく跟ゐ房ハ瀧田の城を出そうとくそが侵ゐ姫を背中ゐ乗せ給ふ。輝武ハ後ゐて。と頻ゐ馬ゐ鞭を当。戦兵ホハ喘ぐ汗とち。ち追ゐ程ゐ。遥ゐ後ゐて輝武ゐ従ゐ。大懸の里ゐ至れバ戦兵ホち。往方を失ハ。とく終夜走つち。来とち。入りつ。抑富山ハ安房四郡第一の高峯ゆく。伊予嶽と伯仲ゐその巓ゐ攀登れバ。那古洲崎七浦ゐ浪のよう。さえぎち。山中ゐとべく人家なく。巨樹枝を

垂見さいと暗く荊棘樵夫の道残埋く苦滑ま霧源一かくく十郎輝武ハ山路ま
馬を乗倒しく。ま」と數兵と僅ま二人息吻あへず攀登る山又山ま雲おさ多り
迫ま彼方を向上れバ。伏姫ハ経を誦ま乗く八房が脊ま尻を
掛そや谷川筑うちつゝじく。ま輝武ホハ辛ゞ川のむとろま
まるけまどま水ふく。流まてやく。
甲斐支もなく。川一條ま禁られそ。ち
帽をせんと輝武ハ凝ーくを立て杖をちうホ渉ーもあへず横ざ多ホ推倒
さまとく。一声苦と叫びく石ホ附筑うち碑ま濺りちとと水のやふ〳〵骸も
そゞめばまるホけるま扱も蚤崎輝武ハ海辺ま人となるまく。水煉の達者ろり
ふ約草ろのも流さまてるまら。數兵ハ坐ホ舌筑掉ひく。
舷く葉へ立ろま淺れさるめ緒ともホ次の日の夜をさめく。濫田乃城へ

かつまを乗り緯の麹をもうしさくし実委細ま次名て再て人筑遣一当ゞ。
只四中へ徇志ひて樵夫炭焼の翁とのふとも富山へ登ま上筑許さゞり
彼山へ入るめあらバ必死刑ま約んとく嚴重ホ捉さ世又蚤崎輝武ハ枉死を
ふく悼おなしく。その子ども乎召出一升のごくぞ使世のふかまけまゞも
五十子ハ伏姫のゆとふかくホ日ゝまりく忘まてさけまハ行者の石窟へ代
乗とりひとら月毎ホ老女ホを窺ま富山へ遣して彼ゐ呼在をさゞね
さ世。安否をちくまくやひのつゞ蚤崎輝武ハ推るゞさまてる。彼山川ふり
あらくろハ。おそまて渉バめもろ一固ふり川の向ひホ常ホ雲霧立
こそさく。人渡ふりもなのるまーゞ老女ホハいさうよりてかへるとて渡や
早暮月よなるふり。不題金碗大神孝徳ハ曩ま安西景連ホ出援れて。
歌こや瀧田を囲む筑ちゞ僅ま暁ゆく麦粟倉途ホ納平ホま追とも

らるゝ。ヨメ勢を敵くの小血戰。後者ホハ皆斬殺せられども。こゝ分もとろくの鬼口を脫まてく。やゝ遠く瀧田へ立うるホ安西ぶ大軍元滿そ。そを攻圍む最中ろまでべ城へ入ると竟ふかなのわざ。せあてく堀内負彩よ一臂のカを裂せん。とてく東條へまりもくホ彼此も甚戸納平ホ大軍の囲れてく。篭中のそホ異なら彼べ輒く城へ入るべうもあらざ。かくそと。あらべ瀧田ゆて一騎なりとも敵を拒とり。城の橋を桄ゆーく。討死をせべりよ今ホ悔どもその甲斐なく。大事のもん使を爲損ーく。剩主君の先途ふ爲立びよりや。西城の囲釋てく君恙なくおりもべとも。そのとき死行の面目ありく。元氣よ入くるべ死甚戸ぶ陣へうけ入て戰死せん。と只管ホ早倍をみびらう准結ちてゆ。ひえ。こゝ刃もとろ残のてく數百騎なる。敵軍へ向べ鶏卵をひく石を擲ふ如くそとよりとろ基なの元呼ぶん爺を捨てゆ敵よ損ちく。朝ホよ血ろの死因ぶをこれよりべのあらば速よ鎌倉君へ刻でやと。存思ーへ白濱より使松ちてく日なふべ管領の御所へ氣苦ー義実の使者と稱ーて来由を報急を告をさく救ひ給ひせとも。義実の書輸ろ々ぶ。孤疑せられて吉文整べ又いさゝか日をふ。甲斐なく安房へ立ろれバ景連ゆそ滅びく。一回既よ平均せ了ぬる歟ー。とゆふゆも。いよく帰氣の使ハなしさりとて今さら腹も切られざ。時節を俟てこの條の憐息を勸解ちうんそれやこの隠宅ゆとてく。舊里ある里べ上総ろる。天羽の圍村へ赴く外祖一郎が親族ある。百姓某甲ぶ家よ身を寓せ一年あまりをる程よ伏姫のうへ成よ仕えてく八房の犬よ伴を富山の奥へ入りるひしより。安危存亡定ハたゝふ。

やうふさ
伏姫

一言信を守て
伏姫深山ふ
畜生に
伴なは

この故ゟ毋君ハもゝひ日ゟそひく。長死病ゐゐ社多ゐと告ありのあゐと
ゐゞ大神宮ゟくう七歳勇允君失言ゟゟとも正しく老人の息女とて富生ゟ伴ま
さゝらの人の口のみよかゐとゟゟいと朽をし。件の犬ゟ靈憑く神通をゐゐ
ゐ誰ゟかゐ死工やある。これ彼山ゟゐけ登り八房の犬を殺て姫君を倶し奔卫
瀧田へくし八年ゟ六賠話ゞともこゞ先非改ゐゐ
もゐゐ尋思しゟ投宿のあゞゆゟ心私あゐ
ら久竊ゟ安房へ立くまく。淮陰の名號引
ゐん所在を其処ゟ見処うと需れゟ山路ゟ暮し山路ゟ明して五六日を経原程ゟ需調
ゐゐ死谷川の向ひゟ人ゟをうとおぼし。ともの
ついねくつしくとゆゞ女子の経読む声いとも幽ゟ聞えけゐ。
作者ゟこの児八犬士の起るべ死所以歟をさく演述しく肇集五巻の尾と

定め。既ゟ首巻ゟ十回の題目を載るといくども猶ゟそのごく
ちくなるうゞ巻の張数ゟも盈く。今この假を率庵ゟよるき巻数ゟ
定めあり又張数ゟも限ゟまあり毎編ゟ残るべ死ゟ賣買ゟ便宜
うくをとゟゟ書肆ゟ好ゟ推辞ゞ已ゟそ餘稿ゟ巻を更く明年ゟちくを
嗣出さん大約さくゟ演る所ゟこの小説の殘端のごこゟより下ゟ八犬士の
世ゟ出べ死ゟゟ及べり。この後又年代歴く八子八方ゟ出生し聚散時ゟ至
約束ありて竟の里見の家臣とゟる八人の列傳ゟ前後あゐ長短あるべ
まゞ其処ゟごゟ玫果さゞ年代かさ祢巻をかさ祢て全本とうくさんゟ
曩ゟ予ゟ著しこゟ弓張月のぬくたるべ閲者幸ゟ察せよ時ゟ文化
甲戌の秋九月十七日鳥の屋ゟ毫を閣く

南總里見八犬傳卷之五終

編述 曲亭馬琴稿本

總巻浄書 千形仲道謄寫

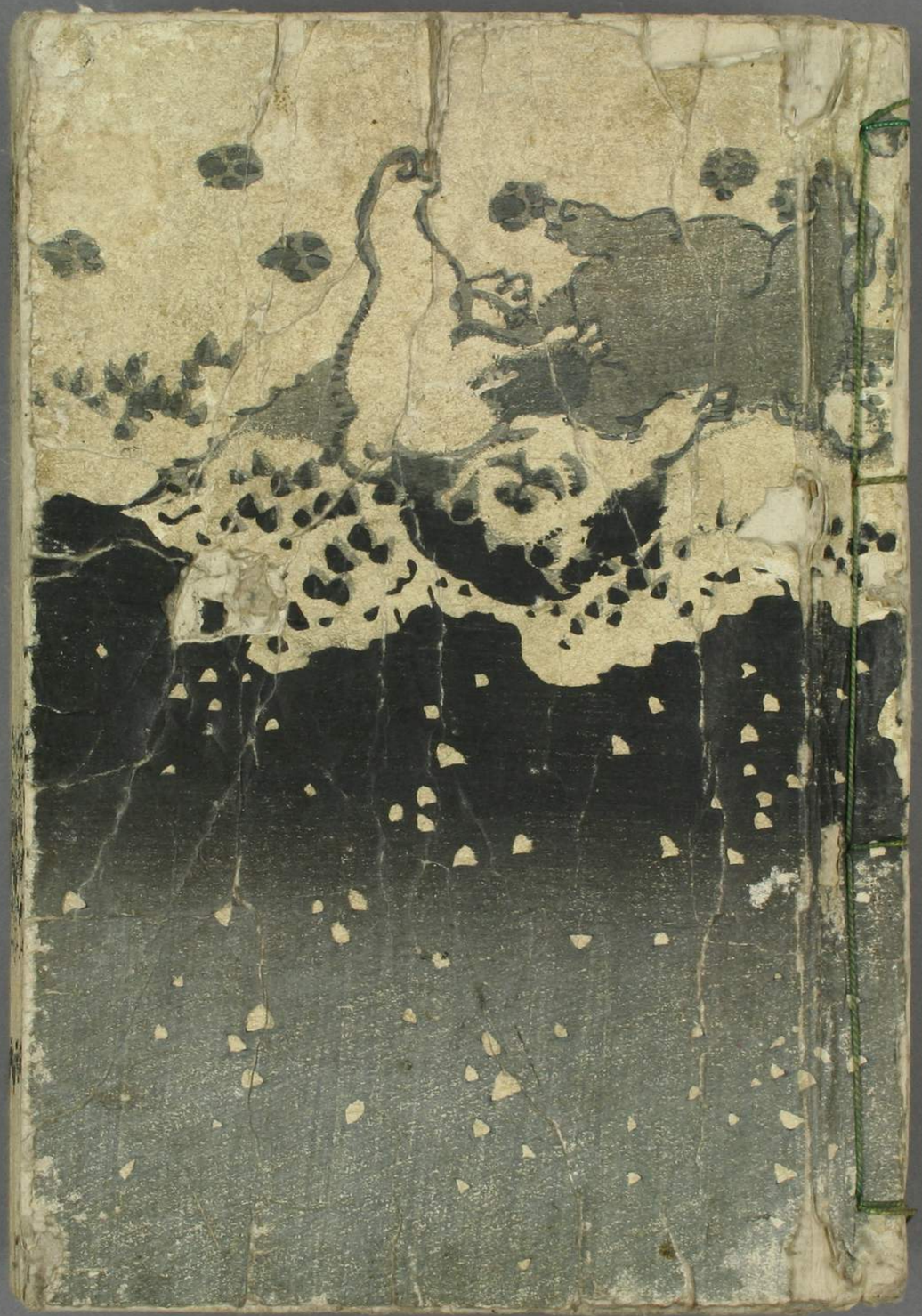
出像 柳川重信畫

繍像剞劂 朝倉伊八郎刊

○曲亭新著出像圖字小說畧目

架裟御前七條法語 紙數八丁

美濃舊衣八丈綺談

○馬琴畫賛扇并ニ家傳神女湯○精製袋きまるかね○婦人つぶ虫の妙薬ホ大坂心斎橋筋唐物町河内屋太助方ゟまかり扇ハ浅草神田鍋町柏屋半蔵方ゟ売弘ム

北嵩重宣画 全五冊